# 里見八犬傳

拾六篇

巻三十六

特別
へ13
4304
/7

へ13
4304
17

曲亭主人編演

# 八犬傳第九輯下帙下編之上

柳川重信繪畫

江戸書林　文溪堂精刊

<2001-319>

八犬傳第九輯巻之三十六間端附言

稗史小説の巧致なるや。よく情態を寫し得て。異聞奇談人意の表に出るもあり。獨軍旅攻伐の談に至りては。里巷の小児を悦するのミ。士君子の為に道ふに足らず。譬ば水滸傳の如きも。七十回より下に招安の事あり。宋江盧俊義等其徒一百八人。宋朝の為に遼を伐ち方臘を征するに至りては。是を七十回までの新奇巧致の筆に比れば。頗劣れるに似たり。されば金瑞ハ。七十回までを施耐菴の作として。七十回より下百二十回までを羅貫中の作とし。誣て續水滸傳とす。毛鶴山が如き善小説傳奇を見る者といへども。猶金瑞が誣言を信容く。其七十回より下を。續水滸傳といひしハいふもさら也。吾儕ハ見るよしあり。抑水滸傳一百二十回ハ。羅貫中が一筆に成る所。其證文多くあり。然るに彼小説を評定する。李贄金瑞ら。ならびにこの他明清の文人墨客。水滸を評する者多かれども。一人として彼作者の胸臆の隱微あるを悟れるもなし。この故に吾亦戯に水滸の隱微を發揮し。圏字評して命けて。

郷貞庭文庫

拈花寔談といふよしも然りけれども老眼年々に衰邁して今ハ筆硯不如意になりぬ。果もべしや否をも知らず。そハとまれ右もあれ本傳第九輯に至りてハ二三十回皆軍旅攻伐の事ならざるハなし。羅貫中の大筆なれども脩羅闘諍ハ餘韻始の如くならず。況や已が如き輇才のもの。本傳力戰の談までも看官の飽ざらんハ最難し。且難ぎ抜之遮莫水滸ハ征伐二度に至りて百八人の義士ミな陣歿して最後に宋江李逵等毒を仰ぐ死に至れり。看官遺憾しく思ふめれども是も勧懲に係る所果敢なく局を結べるハ則作者の用心之然れバ本傳ハ用意彼と同じからず。其力戰の故をもて里見十世の栄を開く花あり実あり。約束あり且性情仁義の致す所実に是大團圓の鉄びを書まに足るべし。看官本傳の水滸に模擬せし所これあるを知れども作者の用心始より水滸に因ざるを知らぬもあらん。然るを若しも後世金瑞に相似る評者あらバ九輯軍旅の二三十回を誣て續貂犬傳として吾筆ならずといふもあらん。狭夫隠るゝを求め怪を述作る小説野乗の



果敢なれども其大筆に至てハ必作者の隠微あり。是を弄ぶ者ハ甚ミまく是を悟る者の稀易からず。昔も今も同じかるべし。この故に吾常に達者の戯墨を評するに五禁あり。所謂假をもて真となして備らんと求る事評者ハ其理論を好む所へ引つけるハ作者の深意を失ひて只其年紀などの合ざるを見まくほしく欲すれ俗に云究竟の類なる前に約束あるものを今まで結ばざるを待かねて催促なる事神異妖怪ハ始あれば終なく出没不可思議なる者も然るを其出処来歴を詳にせまく欲りし其消滅して終る所の安定ならんを求る惑ひのミ作者の本意にあらざるなり大凡この五禁を知りてよく吾戯墨を評する者あらバそれ真実の知音なるべし。寔に無益の辨なれども人我泰平の餘澤によりて飽まで食ひ温に被て文場にさへ遊ぶ者米錢をもちひずして暗譚み春の日を銷しぬる彼も一時之此も亦一時なるべし。抑吾戯墨物の本の殊に時好に稱ひしハ弓張月及南柯夢胡蝶物語小冊子ハ傾城水滸傳新編金瓶梅その他猶あるべし。就中本傳ハ世の人

いと喋々しきまでに愛憎して弄ぶ随に江戸及浪速なる戯場にて屡是によりたる戯曲の出しを見たり又大阪にて浄瑠理に作れるあり其院本ハ長編にて四冊なりと聞にき又是况錦繪にハ八犬士を画きたる者ハ江戸大阪にて年々に彫りて今も猶出るめり只是のミにあらず又諸神社の画額及燈籠にも犬士を画ける稀ならず或ハ箕頭店の布簾剃製の金襴紬子或ハ煙包団扇紙鳶小児の肚被なども画けるを見たれ然ハ名聞巷軍記の岐坊講釈にもぞきく本伝を讀てよそ世渡りに做せるありとぞ人の告るに依て知りぬ其時尚に稱ふとかくの如くに至れるハ我さへ打驚くまでにあと怪くもある哉已戯墨に遊びより垂慮あくに五十年客舎に盧生の枕を借らでも稍覚ゆべき比なれバ細字ハ懶く不如意なる状況本輯又五巻を稿ド果さバ其折則硯の餘滴に戯墨足を洗まく欲ちれ筆硯讀書皆排斥して徐に餘年を送るに至らバ静坐日長く思慮を少省たく復少年の如くなるべし。

天保十一年肆月小滿後五日　蓑笠漁隠



本傳前板第九輯巻之二十九以下五冊校閲遺漏補正抄録

○二十九の巻 三丁右 總目録 頓智之功（加ハ當に搦よ作るべし二十の巻の初丁本文の題目に搦たとあり正しとさだし）
同巻 十一丁ノ右 二行 野猪犲狼（猪ハ豬の悞寫え當に豬に作るべし） 同巻 十五丁ノ左 八行 徳用も堅
削もて忽焉と（ものの下のてハ衍字なり削り去るべし）
○三十の巻 二丁ノ右 四行 兵ハ拙策を貴ぶ（策ハ速の悞寫なり當に拙速に作るべし） 同巻 二十九丁左 十一行
葎の中（葎ハ葎の悞寫え當に葎に作るべし）
○三十二の巻 二十一丁ノ右 五行 厨のうへぞ（傍訓くりやのやを脱し たりくりやと作るべし） 同巻 二十三丁左 三行
勁風（勁ハ悞刀え當に勁に作るべし）
ちの他聊なる畧きハ作者老眼衰邁細書を見るに詳ならぎ再校ハ發見の後なれバ追てちくに抄するのミ諸君子いかで披閲の折雌黄を施してあへて補れなバ幸ひならむ。

# 南總里見八犬傳第九輯下帙下編上總目録


## 巻之三十六

第百六十二回
悌順慈善流生口
荘介信義避三舍

第百六十三回
荘介設伏夜擒將衡
小文吾奮勇擊鷲熊

## 巻之三十七

第百六十四回
殘兵奪刄責窮君
水軍寄艦載敗將

## 巻之三十八

第百六十五回
挾一虜現八斷橋梁
放火猪信乃焼戰車

## 巻之三十九

第百六十五回下
題目同前

## 巻之四十

第百六十六回
以衆俠孝嗣援源公子
果西使來仁敗走景春


八犬傳第九輯一百六十二回以下五巻目録終

賢而事賢
譬以魚水
大樟村主俊故
盾持僕杖朝經

愚山人
上水和四郎東三
赤熊如牛太猛勢

神明有条祀之俗
仁君無不敬之臣
印東小六明相
いんとうころくあけすけ
荒川太郎一郎清英
あらかはたらういちらうきよひで
彫兼吉

白石城介重勝
朝寧録
小幡木工頭東良
朝良裕
豊房刻

火牛勝萬馬
勍風何俎水
継橋綿四郎高篤
真間井樋二郎秋季
彫春蔵

半閑人
狐龍精石
木曽三介李元

本傳前板第九輯巻之三十二以下五冊校閲遺漏補正抄録

○三十三の巻　十五丁ノ右　八行　嘆曰氣して　曰ハ口の悞刀なり

○三十四の上　十丁ノ右　八行　従ふ　従の一点ハ衍なり　同　十丁ノ右　七行　兼りひとぶ　傍訓のらけんハうけんの悞刀なれバさふ作るべし

同　十五丁ノ右　四行　論ハ　論の一点ハ衍なり　同　十六丁ノ右　十一行　蕭荷　荷ハ何の悞寫なり當に蕭何に作るべし

○三十四の下　三十六丁ノ左　八行　猿樂　樂ハ樂の悞寫なり

○三十五の上　初丁ノ左　二行　燈燭の下に　傍訓のあもハあとの悞寫也下かくの如し　同　十二丁ノ左　九行　原来和女

同　四丁ノ右　一行　津衛　傍訓つゆりのもと彫あやまりなり當につゆりに作るべし　同　四丁ノ右　七行　憤り　ゆゑハ悞刀ゆゑとあり　傍訓の上のゆへ

さてハ己の悞寫なりかくの如くえ

又も亦賣出ぬし後に知音の見出せしを抄録しそめて看官に便する者前の如し。

再校抄録終




# 南總里見八犬傳第九輯巻之三十六

東都　曲亭主人編次

早稲田文庫

## 第百六十一回　悌順慈善生口を流す　荘介信義三舍を避く

復説満呂再太郎信重安西就介景重ハ然しも良しく思ひたる満呂復五郎重時が矢場に敵の鉄砲に斃されて水底に淪しかバ勢ひ折けて哀に堪ず只共侶にうち歎きける。志を励しつ即便再太郎が意見のまく就介を枝掖ぎつ又那敵の由断あらバ今井の柵の横隊なる柳の枝垂し邊に泅ぎ潜び逆就く内に入るべく欲する怪しむべし件の垂る柳の杈股に其年非年人ありて身を杭て我を招くが如し朦朧にして安定ならぬを熟とよく見れバ其人の為体烏草紙の身甲に針脛衣して腰に両刀を帯たるが究竟時めき似たりける再太郎と

就介ハ倶に驚きて且訝りて左右なくハ得まで登時再太郎眉を顰て安西和殿ハ
如何見るゝ他ハ必我大人の亡魂にてもあらんぞかし倘果して然らんにハ勇士の忠魂
死しても亡ぜず今我们を導きてこの柵内に悄入らせて倶に是軍功を立させんとて帮
助けたまふ鬼謀りにもあるべけれといへば就介點頭て然也々々さぞとなりて倶に掌をうち合
せ俯拝みて南無大人精靈同志異體死生其方差ありとも我一雙の微力にて
志の已なく死をいへぐ憐みたまへば影に立ち形に添ふて障るとなく今这の柵に潜び
入ることを得させ給へ弥陀佛々々々弥陀佛と両聲に祈り念ずれば樹上の人聲とか
けく登よや再太郎よ就介よ我を死せりと思へる歟我ハ方便那溝戸より敵の發出
せし大銃にうちも摧れざりしかど一旦ハ其勢ひに逆ふべくもあらざれバ早くも波の底に
淪みて再度の丸を避けたるのみ因て意に件の大銃ハ溝戸を守る敵の雑兵
が我悄近就くを見出して轂ち殺さんとその所為なるぞ或ハ一時半時毎に他ハ



必水面に空銃を發出して其威の名聞るを射方の士卒に示すのみこの故に我
身ハ聊も恙なかりき然りけれども那里まで已に敵の兵の睡らで在るを猜ありしかバ浮ミ
も出ず水底を潜りくゞりて辛くもこの洲に剛才泅ぎ来て内より無言這柳の
枝に攀りて樹梢に敵の虚実を覗ひ得たれば舊処へ立帰りて然而汝達にその便
宜を示して共侶にともと思ひの折もよくあに聚合ハ事の成るべき祥なりとて悄
めたく報知するを再太郎と就介ハ聴て憶ず雀躍して鉄ふと大く聲も原来かの
折敵の溝戸より發出せしハ空銃にて大人ハ恙なかりし歟然りとハ悟るよしもなく轂ま
れ給ひしと思ひし涙の涯り暴河の水も増まぐうち歎きてせんすべ知らぬ在りしかど非
如両個の微力なりとも大人の志を紹ぎして退りて倶に成まするなら人に面を向けたる
かはと思ふのみなる那溝戸内なる敵の守の固ければこそ大人ハ果敢なく轂されけめ這頭
なる守の敵兵懈ることもあるべからむ先や這頭より潜び入りてそれなる思ふに差ひなかる只共ハ

侶に戰死せんと示し合しが辛くして方僅涸だ就けるに大人は反て恙なく早くも衣に
ませしかバ憂ひを轉じて大喜大幸なる上や待るが吁悦しや娯しやと心の限りうち明て
悄やかに告る兩個の少年憫るゝを重時推禁めて噫音高しいそぐべからずなより内を
見亘すに幸ひにして焚捨る篝火の殘れるのミ守の敵兵あることなし我に續けと呼
はゞりして内へ閃りと飛降れバ再太郎も就ひも是にひとく力をゐて倶に無する枝に
攜りて攀登り塀を踰て悄地に内ゆゑ入りにける恁而満呂復五郎重時ゑ兩
個の少年と共侶に猶も這柵内の敵の虚実を覘ふに才に燃る篝火に背を推
向け膝を抱きく打眠る兩三個の雑兵在るのミ外に守の士卒なけれバ憶ずも
うち含咲れて手ばやく篝火の燃柴を抜合しが立別れて東西なる守屋の簷に
火を放つに満呂再太郎信重ハ心早き少年なれバ初篝火を抜出る時那打眠
まる雑兵の膝下の鉄砲あるぞ中に火索を結びて丸さへ悉く篭るを奪略り左右に
引提て倶に軻遇突智の禍を做す程に時間河風吹起れて寒き夜なれバ火の
勢ひ禁むべくもあらざりける。重時等が火攻ハ瞬間に燃廣がりて車輪の像き燄を
飛せバ這柵内に在りとある士卒們ハ睡臥するも睡らざりしもおそれにとむろに驚
き慌て走り出て倶に火を防ぎてうち滅さまく欲すれども既にして守屋毎に火の萬ら
ざる隈もなければ誰かよく及ぶべき相罵り拵擇して小縣兵を焦し火を踏て叫び滾ぶ
もヨヲなりける登時第二の守屋なる柵の頭人小越小權太表練ハ萌黄絨の身甲に
二紅嚶呢の戰外套を被り駻の馬にうち跨りて手に眉尖刀を挟ミ従ふ士卒を
先に找めて乗り出し声高やかに兵毎などて騒あする。當所ハ河上にて素より
水に匿しからぬに疾汲上して火を滅さぞやと連りに叫喚れバ諸隊の士卒ハ其一言に
奨され氣をとり直して僉式鳥嘴鈎を打振々々滅禁んと競ふく蒐るバ表練ハ威
風凛然として馬を風上に立眼を配りて只顧下知を做す程に満呂再太郎信重ハ

闇に方より竄近就て携たりける鳥嘴銃の火蓋を鐨く撥と放せバ。小越小權大表練ハ胸骨托地と撃れ碎れて。馬より墜て死んでけり。是にぞ驚く諸隊の士卒も原來內伐の者ある歟。然らずハ敵の間諜兒が放ちし火にぞあらんずらむ。なとゞや人々疾猜して。摘捕ぞや。と罵るのミ。找むも找ねざりしも。喋ぞ立る癖なれバ同士撃らまて命を殞し。痍を負ふ者もヨヌかりける。事の紛れに。重時ハ再太就ね共侶に這里に顕れ那里に隠れて。揮撃らに做ましぬ。かの柵內に名ある兵も。只這二個の敵の為にヨヌく首を喪ひけり。有恁し程に犬川莊介義任ハ。其隊の軍兵一千五百餘名數十箇の戰艦にうち乗るを從へて。この夜丑三の比及に闇に紛れて。今井なる敵の柵に推寄るに。満呂復五郎重時。なるがまゝも柵を火攻して。剩再太郎信重が那柵の第二の頭人小越小權太を。撃ち捕ましかりければ。柵の士卒ハ。一人として防ぎ戰ふ者あらず。莊介ハ是に便りを得て。士卒を找めて。溝戸を撃ち破らせつ。乗



入々々。諸勢齊一岸に登りて。咄と揚ける鬨の聲に。いく乱るゝ柵の士卒を。駈立駈立找とける。されども柵の頭人猨嶋郡司將衡ハ。千葉自胤の親族にて。相馬郡領將常の弟なりければ。名を惜ミ謗りを恥て。勇ましく馬に鞭打々々。士卒を奨し敵を狂えて。一霎時ハ挑戰ふのみ。莊介ハ是を物ともせず。堅を摧き鋭を碎く巷路軍の進退雄々しく。勇將の下に弱卒なければ。群羊を駈る虎彪の勢ひ當るに前なかりけるに背よりハ満呂復五郎再太郎安西就介共侶に揉合して攻る程に。猛火頻りに飛散りて。柵の士卒の頭の上に落花の像く降蒐れバ。將衡竟に怺難て捨鞭中て後門より馬を飛し。命を脱れ木下川堤を驀直に女木逆井を投て逃なるが。衆兵倶に人崩打て。其里とも分ず乱走ぞ。中に後れしハ。胴に噎び火に焼れ臥田ぶりて死活を知ず。或ハ兜を脱ぎ戈を伏せ。跪坐て哀を請ふて降参するもヨヌかりける。然れバ犬川莊介ハ。事の勢ひ已べからねバ。敵の捨る好馬にうち跨り。その隊兵を。

找めく猶も猴嶋将衡を生拘んとて逐ふたりける。話分両頭是より先に犬田小文
吾悌順は其隊の兵千百十數名と共に幾十艘の戰艦を暴河に乗浮めて。
妙見嶋の柵を襲ふに那蕙人を建る艦十艘を先にして柵の水樓に推寄ま
るに敵の水中に張亘したる大鏁索は既に満呂再太郎が皆斫捨たりければ這回は
間近く漕寄れども聊も障りあらざれば倭而里見の士卒の先艦なるは既に柵の溝戸に
推寄せて鬨の聲を發げ。征箭を射出し。空銃を放かけて攻蒐るべき勢ひを示す。
真夜中過ぎる時候にて黒白も分ぬ鳥夜なれば柵の士卒は敵の艦の多少を知る
べくもあらず。然ば這妙見嶋の柵の頭人彦別夜叉吾數世は今寄来ぬる敵の喊れ
聲箭叫びに吐嗟とばかり驚き噪ぐ士卒を制めて若們などて先度のことを思はざる。
敵は今宵も亦我矢丸を取らんとて蕙人を艦に建て空攻をなすのみ初は我思ひ足
らで那術に乗せられたりけれども豈二たび欺れんや闇ねくと窘めて毫も備を做さゞり



けり。然程に犬田小文吾は妙見嶋の西岸へ隊の諸艦を漕よせさせて大銃を放つ
水際なる塀をうち破り櫓を毀ち。衆兵齊一艦より出て。咄と噇きつゝ三七二十一に
稠入る勢ひ破竹のごとく當るべくもあらざりける。柵の士卒は驚き慌て原来今宵の敵は
那蕙人にあらざりけり。不意を伐れて爭何ぞ一圓も退かで五十子より来ませし
御方を待てまゐらせんと罵りて倶に逃迷へば彦別夜叉吾怒りに堪ず。遂に兵毎不
知案内なる敵を煞所に捉籠て擇鏖するに做せよかしと犬まれ猪まれ首を沒てん找めくと
鎗晃めかして近つく敵の兵を突仆し毆散して。その先途と戰ふ程に今井の柵の
かたに猛火起りて。燄河水を照して白昼のごとく敵勢自家の君羊蜂の叫び漸にきこ
えしかば柵の士卒等は我より先に今井の柵は攻落されぬと思ひしかば一向に戰ふ擬勢なく
亂れて碎くるが中路を。小文吾沒さずと先に找みて敵を礫に擲々數世が鎗を打
落して。逃る甲の総角を捶抓と引よせて三間許投しかば。自家の士卒折果りて。

是まての出像は前版第百六十一回の下に出たりその本文と併見るべし

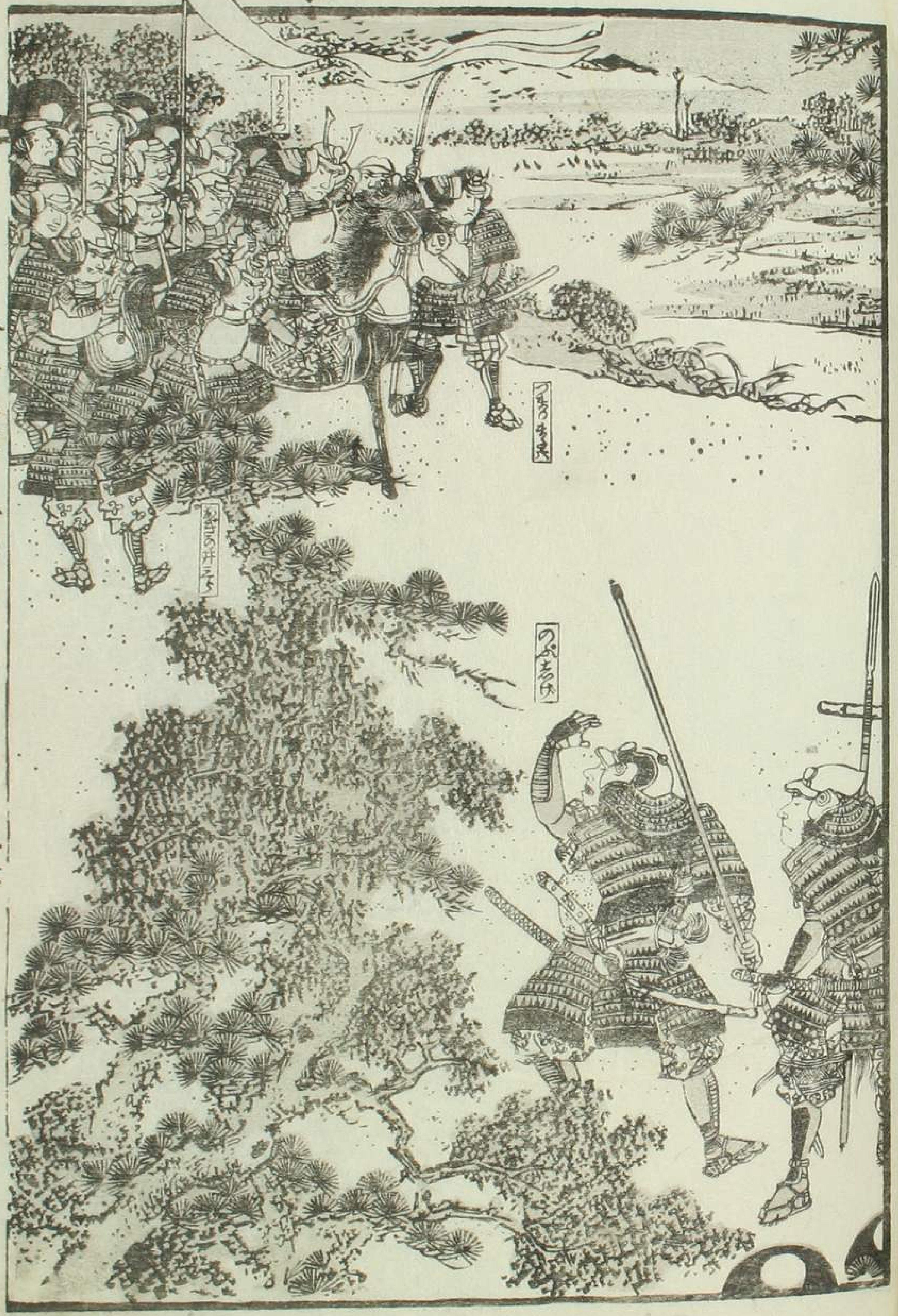
壓く索をぞかけける柵の頭人今目前に生拘られたりければ況士卒は立足もなく迯るゝ舶に
執乗りて辛く命を免れんとす。舶ある岸に来つけるに誰か知るべき豫より犬田が計る所
あり自家の艦に士卒を遺して落んと欲する敵を乗せず且敵の繫ぎ措たる衆舶は
艪械を奪ふて其舶毎に一箇もあらせざりければ柵の士卒の稠乗る者艪械なくて
此夜河の舶の遣端なければ心慌て左せん右せんと罵る程に風烈しく流急ければ憶ず
舶を海へ吐れて往方も知らずなりし者多かり。其中に反て舶に乗らずして陸地を脱れて
次の日に寄隊の陣に赴きて這敗軍を告し者才に両三名に過ぎず。或は又烏夜に紛
れて里見の艦に乗りし者は小文吾が遺し守らせし士卒の為に生拘られしが残兵
僅に百五六十名只得犬田に降参してこの柵立地に来ざりけり。既にして其暁天に
犬田小文吾悌順は柵の守屋に発兒を建させて生口毎を実検を登時里見に
勇士猛卒功ある者第一番に柵の頭人彦別夜叉吾に結らる索を最も緊
なく捉縮て小文吾と相距ること約莫一丈許にて大床の下に牽居しを小文吾
相ひて夜叉五吾に向ひていはれ数世汝は大石氏の家臣にて勇士の稱あり這妙見
嶋の柵の頭人たりと聞えしが思ひきや脆くも戦負て阿容々々と虜になりたる意に勇
士とのみれしは虚名にてぞありけんずらめと詰れば夜叉五吾は眼を睜りて然ば盖世の勇士
といへども運盡ぬれば阿容々々と敵の虜に做れる者古より尠からぬを聞ずや源義
経の佐藤忠信義仲の樋口兼光及近世の妻鹿孫三郎本間孫四郎の如き。
枚挙に遑あらんや其们にだも及ざるべき和郎の主君里見親子は年来仁
政の所為あるぞとめく始より人を暑りて地を奪ぞとゆへるに今故もなく境を
犯して今井の柵をも火攻にせん當柵までも伐畧りしからば反て我を勇なしとて
詰るは是什麼ぞやと聲音高く苔るを小文吾は冷笑ひて知ずや這上
下の今井は浦るの女木猿江の民までも我君里見殿に従ひしを近曽扇谷の管

領豪奪して暴河をかぎりて封疆と唱へ今井河原及這妙見嶋に柵を構へて水陸の通路杜絶に及べど我君寛仁大度にして敢小邑の地を争ひ給はず仁君豈虞芮の訟を要して墻に鬩んや。しかるを何ぞや扇谷定正主は反て心狭く怨むまじき怨を怨として今番猛可に諸侯を連ねて且水陸二路の大兵を発し。我房総を伐まくもす。この故に我們は則当所の防禦使たり進て敵人の城邑を奪略る者にあらねども然るべき備なからんや。この故に我悌順義兄弟犬川荘介義任と相共に防禦の君命を辱して曩に行徳に兵を做せる雄兵八千騎馬良船戦粟弓並削銃火薬に至るまで東西皆足らずといふ事なし。しかれども五十子の大敵于今寄も来ず坐して食へば櫃も空し。五穀は民の辛苦に成れる粒々司命の至宝なるを思ふで徒に費さば民の父母なるかひやはある。この故に今は我君里見殿の封内なる這河の西岸に陣を徙して大敵を待まく欲すれどもまたその今井妙見嶋の

二柵を并又除ざらばと遮ぎ敢我よりも手を出して人の柵を抜て人の地を掠めて便よしとせるにあらず我有る所の地をもて復して便りよくせんと思ふのみ汝等倘這義を知らば早く両柵を退ぞけて我にその地を返すべし。然らずは推寄来るべき五十子の大兵を及見むの故に竟に自滅を取りもすにあらずや。縦ても我君不仁にして人の地を奪ふとならば。咱ら防禦使である身ならばまあるべき大敵を待ずして境を出踰し我より寄かけて暴虐と做まと思ば違ん。いかにぞやくと質まる詞の理義当然に夜叉吾数世は言窮りて頭を低て黙然たり小文吾呵々とうち笑ひて數世に向ひて又いふやう汝みづから匹夫の勇を忠信兼光に比べて云云といひしは過ぎたり。しかれども大石憲重憲儀の家臣たる者皆仁田山晋五等の類ならんと思ひしに汝小勇あればとて身は今虜になりながら敢罵せる非理の理をもて我に對ひて争ひしは死を怕れざる者に似たり。遮莫我里見殿は仁義の君にて残に克殺を去りたまへば御本意に違ひまつりて汝等をと皆憎しとて首を刎さ何に

せんにハ兵具を剥とりて艦に乗せ海へ流して波のまに〳〵死活を儘せ倘幸ひにて恙なく
其船柴濱へ漂ひ就らバ主の大石親子へハ稟さで両管領へも隠さずとありしかバ言の
條々を明らかに地に安えて上より然れども放免の識るべく其非を飾るにもあらん兵毎にその生口
らの頭髪を漏さず前刀捨よ。その餘の事ハ箇様〳〵と見るべく吩咐れバ大家
都てあつまる果て彦別數世を首にて生口の柵兵百五六十名の髪を剪り衣一領に
あて寸鉄ども身に帯ることを饒さず船中ハ戰飯塩將酉柴薪さへ採容れさる者五
六艘船毎に放免の生口を遷させて相載て妙見嶋の東の岸より大洋へ推流す。
勁風急流両ながら一霎時も其船を漂せず勢ひ宛射箭の如く往方ハ知ずなりに
けり既にして天の明しかバ犬田小文吾悌順ハ隊の士卒三四百名を分ちてその処の柵を
守らせ自餘の軍兵を従へて艦を今井の岸に渡して荘介が伐捕る河原比柵に
造る程に辰の半になりける。その日ハ十二月五日にて那五十子の城に聚合る敵の諸将

顕定成氏憲房朝良自餘の将ハ倶に那城を辭し去て水陸より宜行徳口と國
府臺へ推寄せて一時に守を伐破らんとて連りに路次を急ぐと云其隊配進退ハ
第百五十九回に見えたるごとく既に是同日の事なれどもその時五十子の寄隊の大将上
杉五郎丸朝良千葉介自胤大石石見守憲重原播磨介胤久相馬郡領
将常稲戸津衛由充等ハ路近かればいまだ出来ず犬川犬田が軍議後れて昨夜
今井と妙見嶋の両柵を破ることなく敵に便宜あらせなバ戰ひ難義に及ぶとあら
んを微妙くも計りにけり夫戰ひの勝敗ハ地の理に据るの遅速に在り五十子の寄
隊數萬騎なりとも輙く奥河をうち渡して勝を取ることかたかるべしと智ある人ハ評けり
間話休題。爾程に犬川荘介義任ハ逃る後嶋将衡を生拘んとて満呂復五
郎再太郎安西就介等と手先を打して従ふ兵ハ一千五百を駈立々々趕たりけるに
下今井より木下川頭ハ処々に枝流あり去向に畢りヨヲあれども逃る者ハ路を擇まず。



荘介對陣を遠く射て旗の緒を断つ

赶ふ者ハ人馬の脚を損ハじとて川に溢き樹を伐せて投架しなどせし程に思ふにも似ず時移りて猿江の荘まで赶て来ぬれバ既に亭午になりけり。この時穫嶋将衡と其隊の残兵も逃脚早く迥に延くなりしを見れバ又前面より忽焉として出来る雄々しき一隊の軍兵あり其勢約一千五六百有々として隊伍を乱さず其隊の長と見えたる一将鎧の緘緒華やかなれど馬上優に足搦を操せて間近くなる隨に今敵を見て慌ず騒がず備を早く魚鱗に構て敵推寄らバ伐破らんと弓を鋭を先に立せて悄然として音もせず荘介遥に是を見て是必五十子より来ぬる先鋒の一将ならんと思ひて馬を挽めて近つく隨にその旗を瞻仰るに一雙矢筈の花號ある下に北越庄貝一大女丈夫艤大刀自代軍稲戸津衛由充といふ二十一字を大書したれバ荘介憶ず合咲ながら士卒を制めて馬を挽る右に満呂重時安西景重あり左に満呂信重あり間を距ること遠からぬ荘介程よく

馬を駐めて。みづから聲高やかに喚るやう。其里なる一陣の隊長は稲戸主と知るかしハ。旗に寫されし文字を見て問でも既に紛れず。然我ハ里見の防禦使犬川荘介義任是なり稲戸主に對面して告べくなしぬとあれ姑且箭丸を飛すべからず敢請ふ陣頭に出来よと喚りける。登時寄隊の弓を鋭を左右へ颯と辟く処。聊旗を靡せて見れたる稲戸由充馬を徐々と歩せる右に荻井三郎あり左に妻有復六あり登時稲戸由充ハ馬を陣頭に乗居て佗と荘介に向ひて一別以来犬川主恙もあらぬか。と芽出たし和殿今ハ里見の君に仕へて此地の軍陣に防禦使たると聞えしに交て封疆をうち踰て入寇ぬるハ甚麼ぞやと詰るを荘介うち咲て鞍の前輪に額衝て恩人安泰無恙るべし相別れて天の一方栄辱時あり恩仇差あり曩に愛顧を稟しよりの我義任不似にして里見殿に仕る事及て用ひられずといふもとなく義兄弟大田小文吾悌順なると相共に今番當所の防禦使を辱らせり。今也に這女木猿江なぐの

諸邑ハ里見に新附の領所なれバ敢漫に境を越て更に敵地に入るにあらず今試に
其非を論せバ扇谷殿初より連師の貴重をもて叨に今井河を両藩の封疆と唱て
柵を今井と妙見嶋に構へしハいかにぞや。この故に我義任犬田悌順と二隊をもて昨夜那二
柵をうち破りて逃るを逐ひてこの地方まで来つるハ則我職分也。係ても領所に敵を待
つのミ敢境を犯すにあらず既にして今憶ども敵の先鋒に相逢ぬれバ勝負を一時に決
せんのミ。是も我職分勿論なれども。いかにせん曩に義任浮浪たりし時犬田小文吾と倶に必死の
窮阨に遇てしに恩人知己の好情によりて情地に免るゝことを得たり係而相別るゝに及びて。
義任則恩人に誓言をしつく我身倘幸ひに未生以前の宿因をもて異日里見殿に仕ら。
且當家と兵を構ることあるとも倘恩人と對陣せバ三舎を避て洪恩篤義に答まつら
ん。といひしに料らずも今この地方にて其誓言を果すに至るハ二たびならぬ欽び也れ小文吾ハ
妙見嶋なる敵を伐拂んとて昨夜那柵に向ひしかバ今この陣に在らざれども他も亦大

人の舊恩に答まく欲しぬる志ハ我と同じかるべし然ハいへども今日の事ハ是我君の命令也。
人情をもて私議まくするハ公道人情両ならず。虧ぞ盈ざる術もあれハぞとの給ふも背に
負ふる上刺の征箭一條を拔合て鏃をことく拔棄て弓とり直し其箭を刺ふて。
満月の像く彎固めて稲戸津衛の後に建てる旗を遥に覘と射る矢局差ぞそ
旗の緒を標帯と射断しかバ旗ハ天さまに射上されて一朶の横雲風に引れて山峯
上の松に掛るごとく一霎時閃くと見る程に後陣の方に墜しかバ敵も自家も聲を
合して射たりくと誉動めき亟ハ鳴りも已ざりけり登時荘介弓挾そく又由
充にうち向ひて稲戸主是まて。再會ハ異日の便宜に任せめと敬ぶべく左右のかに
馬の轡を乗旋らして今井を投て退けバ満呂重時殿のあで衆兵斉月々整正く
と徐に前後に従ひけり。これを目送る寄隊の士卒ハ皆忙然たる丹が中に妻有復
六條難て由充に薦るから那犬川荘介が奸雄なる言を設け射藝を示して戦を

進て退く、勝て敗を知れバ、今赶蒐く伐ざるものハ後難免れがたかるべしといへバ、由
充頭を掉て、否々他ハ蓋世の義士なり。みづから義任と喚做す名に恥ざるべし。進止を
見て思ひはかる心術、武藝、我敵するに過たり。然バ他ハ義に仗て三舎を避け、我ハ義に
背きて足を赶バ、縱戰克とも武士の數にハ入らるべからず。我意に左傳に晋文公
三舎を避る事あり。三舎ハ幾里なるを知るや。因て今按ずるに、唐山の里法に十里に一
亭、五里に一舎といへり。那土の一里ハ則是我皇國の六町有奇也。此に所云阪東道
是ハ是に由て此を覩れバ一舎ハ則三十町、三舎ハ當に九十町なるべし。或ハ又十里に一
亭、三里に一舎といへり。さもあれ只その大槩をいふのミ。敢里數に泥むべからず。那莊介が其
才文武に富るのミならず、義を知て退くハ、抑亦君子なるかな。さハ里見なる、かくの如き智勇
忠義の犬士八名あり。兩管領家まづ勢ひとなすとも、いまだ戰ずして勝負を知るべし。俺ハ
我老夫人の重代なれバ、得遠回管領家の催促に從ひし者ハ、然るを勝なさしと
知りながら戰ふて我士卒を多く喪ふことあらバ、反て是不忠也。世の鄙語に云如貪子下
なる力藝といふとも少力るべし。權且病痾に推けて安危を見るにしかじと咡きつ
嗟嘆して、隨即荻井三郎ま雛兵四五名を從せて、某の地へ寄隊の摠大將上杉五郎丸
朝良の後見なる大石石見守憲重の陣へ遣して告るやう、由充近年まで病あり。ことに
曉の風寒に冒されし故、狹猛可に持病の五積發りて騎馬の擇も做りがたかり。姑且
後陣に退きて將息をせまく欲を、先鋒を免除あらまほしと辭して、軈て隊兵を故の
ごとくに從へつ、兩國河の方に退きけり。有恁りし程に寄隊の兩大將朝良自胤ハ艦
を兩國河に着陣を、是より東ハ入江の枝川多くして且枯蘆さへ繁かれバ、兵を用
る地方にあらずと、大石憲重が計ひ稟に宗よりその日、則人馬を栰めて五本松の曠野を
本陣とし、又陸路を來るなる自家の士卒ハ原胤久相馬將常に從ふて兩國河なる浮船
橋よりうち渡して倶に五本松なる本陣に着到しけり。その中に先鋒の頭人稲戸由充は

一隊は敵の在る所を極んとて猿江の方に造ると云其事は上に見えたる如し。その外総路次
ゆく〳〵駈加りける殘隊の野武士さへ多かれば摠軍二萬五千餘騎件の曠野に陣屋を成
連ねて碁局の像く構へる勢ひかくのごとくなれども既に先鋒の頭人なる稲戸津衛由
充は時病發りぬとて辭ふて猿江より引かへしてあらずと聞えしに他が一隊は五本松に造らせ。
人皆是を訝く思ふに又今井妙見嶋二柵の頭人小越小權太表練猨嶋郡司將
衡彦別夜叉吾數世等は昨夜里見の防禦使犬川荘介大田小文吾に柵を火攻
せられ且表練は敵に擊れて命を殞し將衡は辛く脱れて其殘兵と共侶に逃て當
陣に來て敗軍の愬あり又妙見嶋より數世が隊兵兩三名才に免れて來ぬるもの是
よりて彦別夜叉吾が敗軍の為体他們は數世を首として多く敵に生捕られ剃頭髪を
剪捨られ虚舟に載られて大洋へ推流されしのみならず。この時に具に聞え或は又荘介小文
吾が猿江逆井までを里見の所領にせんと云那殘さへ告しかば朝良自滑怒に堪ず疾

將衡を牽出して首を刎て敗軍の罪を士卒に示さずんば遂に自家の弱を敵に識らん疾々
せよといそがせば將衡は驚怕れて戰ひ候ずして兄將常ともろ共に向ひて陳ずるやう小臣等が敗軍
不覺の罪は今さら償ふに由なけれども敵は一萬の多勢也臣等が隊兵は千五百に過ぎず。
妙見嶋は士卒五百名の寡をもてしかも衆に勝よしやあらん。倘一日夙く御勢を
當所によせさせ給ひなば臣等が敗軍なからんに後悔是非の及ぶべきにあらねど願ふは權且
首を假して今宵足兵四五百を授けさせ給へ敵の陣所へ夜擊して那犬兩箇の首を
捕て先度の恥を雪むべし。但し自家に野心内應の者あらば計策漏易かり。就て疑
ふべきは別人ならず。此越庁見殿の軍代なる稲戸津衛由充是のみ。他は先鋒を奉りて
嚮に猿江に造りし時敵の隊長犬川荘介に撞見として箭を射ださせ戈を交へず其
退くを目送りて那身は反て急病に推けて辭ひ稟して當御陣へも參らざる其内心
量りかたき故に忠告仕りぬ。その義をもて恩免の執成をこそ願しけれと良らに請れて

将常ハ有繋ホ同胞兄弟の急難同悳の切なるが為ホ上坐ホ侍りたる両家の老輩大石憲重原郷久ホもその義を告て愚弟将衡が死刑を宥めて今宵の夜伐を競ふせバ臣们も他と共侶ホ敵の屯ホ推寄て荘介小文吾隊の兵毎ホ先ん。衂ホせまく欲すといふてくと庶幾ホを憲重郷久ら聞て其の義宜ホ由あれバとて倶ホ遽しく找ミ出て両主君朝良自胤を諌るより将衡が敗軍の罪饒されさせんホ似さくハへども敵ハ一萬自家ハ小勢敵しがたくとも故あるホやをと然れバ将衡並ホ将常が願のまゝく敵の屯ホ夜伐させそ其功あらバ前罪を償ふホ足りぬべし。いまぎ敵一人ども數多補らぐ自家の隊長を誅しなバ恩怨早く地を易でて敵ホ笑るべし。賢慮を仰ぐなると詞斉しく執成まを朝良自胤らち聞て黙然たると半晌許ありて朝良ハ憲重ホうち向ひて猴嶋将衡ハ千葉の家臣なれバ我が左右ホちかあるども、くホ稲戸由充の逆意の告訴あるホあらずや他ハ我が外祖母嚢大刀自の軍伐られバ野心あるべきホあらねど景春既ホ和睦ぞあるから今ホ至て来會せずぞよの義心許なしといはれて憲重然バ那由充が敵ホ逢ずして戦ざりし為体ハ方僕猴嶋将衡が告ましよしあり。然バとて其事の虚実分明ならざるホ自家の隊長を疑ひなバ二萬の士卒鬼胎を抱きてよく戦ふ者あらざるべし。非如由充逆意ありとも他ハ僅ホ一千餘の地兵の長なるのミ何事をかなしえべき。姑且度外ホ措せらるゝと憤ひなく論ずれバ胤各亦其主自胤と和解ゆゑく将衡を救ひ給ふのミならずぞ其兄相馬将常と共侶ホ夜伐の願ひを許容あり。則 逞兵一千を授けて敵を襲せけり。

## 第百六十二回　荘介伏を設て夜将衡を擒ふ　小文吾勇を奮て鷲熊を撃つ

尓程ホ犬川荘介ハ其隊の士卒を従へて今井の柵まかへて来ホけるホ既ホして大田小文吾只妙見嶋より隊兵を渡して夙く這里ホ俟て居り。這柵の燬を免れし防守

屋を修理するに敵の脱棄たる甲冑器械なとの多かりハ悉く倉廩に収め被らかりける戰果さへ故の随なるを枚挙るに遑あらず登時荘介ハ小文吾に告るに昨夕の柵を攻落しける事の趣且逃る将衛を追蒐て憶ず猿江に造りし時五十子より来ぬる先鋒の頭人稲戸津衛由充に撞見あしくハ那旧恩を謝まんとて為に竟ず先言を果しける事恁々と説示せバ小文吾ハ顧感嘆して我も亦那人に稟たる再生の恩あるに尚一言の謝義に由なし況や今ハ刃を交る怨敵なるに折もよく和殿那義を果しぬるハ宜にこそ羨むべし。却唱若ハ妙見嶋を攻破りて柵の頭人彦別夜叉五郎数世等を生捕りしかど我君の御本意に違ふて殺すハ要なしと思ひぬれバ命を饒して生捕約百五六十名の頭髪を皆剪捨て舫なる舟に乗するに数日の飯米柴薪さへ取せて海へ流しぬと告るを荘介ハ聞て深く感服して席を譲りて却以我が這柵を抜けしも和殿が妙見嶋を伐捕りしも其軍功ハ相似たれども我隊兵ハ満呂再太郎が這柵の頭人なる小鐡小権太妻凍等を数多捕へしを首をも多く敵を殺しぬ然るを和殿ハ妙見嶋にて一個の敵をも殺戮せざりし其頭髪を剪捨て流し遣すハ仁者の術にて是則館の御本意に稱ふ所我がよく及ぶべきにあらざれバ劒又我ハ漫に敵を赶あまく寄隊の大兵の来るべきを思ハざる那時我備寄隊に逢バ多く士卒を失ふべし。拾と云拾と云巧拙已に分明なり今日よりして當所の防禦使の上坐を和殿に譲りて我ハ則副将にならんと云を小文吾ハきゝあへず犬川其議ハ兼引がたし夫兵ハ凶器なりとそ戦場に臨む者誰か敵を殺さずしてよく勝を取ることあらんや。且故に館の御軍令に敵を生拘るを第一とせ所謂を捕るをもて又其次と做すべし。とこれあるのミ殺すを罪とあるにあらず然るをなどりんや這里と妙見嶋に敵へいなるも寄隊の大軍と戦ずして何でふ軍功の甲乙を論ずべき其斟酌ハ要なしと詞を敷つくして推辞ども荘介ハ听ず頭を掉て昔陸奥の戦ひに義家朝臣なる自

家の士卒に剛臆の差を分ちて剛なる者を推登し後れし者を退けて励ましたまひし例あり這と那とは同じからねど我は館の御本意に違ひを貽さらんや且唐山唐虞三代の制度をおもふに天子の諸侯を罪するを征といひ諸侯の諸侯を伐を伐といふぞかし天子は征して敢伐せず諸侯は伐して敢征せず征は正也身を正くして後人を正くす又伐は討て其罪あるを誅るの謂とぞ何ぞ戦ひを事とせんや然ば館の御軍令は女の義に縁らせたまひし宋襄婦人の仁に異ならず吾儕を和訓するに征も伐も倶に是をうつの義として諸侯の諸侯を伐をしも征伐といふ者すくなからず定正主の檄文に天誅と云ひ又檄れるは升ば左まれ右もあれ昨今まで隊の戦ひの優劣に自賞自罰の正しからぬを悩 士卒に示さるべし その義異日我必洲崎の御陣へ稟し上ん枉て愚意に任せよと叮嚀に怠状ある 則小文吾を敬ひて上坐に推薦め其身は次席に就しかば是を見るもの皆ふかく満呂復五郎再太郎安西就介も士卒皆感服して莊ぬ

心正しく今この自罰の計ひをうけしとぞ稱へける然ば士卒は昨夜より腰戦飯のことなかりしかば這柵の虹門によりて夙く炊ぎ果しつ隊兵都て飯を啗て饑を醫などせる程に行徳に在陣なりける登桐山八郎良干は早暁に千葉に孝胤の麾下として路次に住められたる加勢の御民の頭人舘持僚扶朝経大樟村主俊故が隊兵さへ皆引率て人馬遽く渡しつ随即犬川犬田両将に告るやう這今并妙見嶋の両柵を攻捕たまひし事の由は今朝しも犬田主よりその告ありしかば在下則塩濱なる陣所より立て人馬を這里へ渡さすなる折両服原木の間に在陣なる這個舘持大樟両頭人は往日間諜兒をもて下總なる千葉氏の虚実を探らせしに孝胤主は両管領の催促に従へども猶疑ひして加勢の軍兵を出さず只其封疆を守ると云なり故に大樟舘持も那里に要られたれど各其隊兵をもて倶に塩濱に来にければ相伴ひ給ひぬと云ひと二犬士うち咲て共に亦便宜のよしかし已にかくの如くなれば行徳

までは自家地なる館持大樟二隊の兵も入用る所あらん。和殿の計ひは極めて好。昨夜の
合戦に甲山は箇様々々。係々の事と共に荘介は小文吾の慈善の計ひを告知されば、小文吾は
亦荘介が猿江にて恩人由充の一隊に逢ひ、折ふし舎を避て舊恩に答し事の趣を
敢自那非を誅て防禦使の上席を譲りける心操さへ係々と迭代に説示せば、
良干朝經俊故等は共侶に敬服して感ずること大かたならず。猶且餘談に及ぶ程に
冬の日既に没果て、點燭時候になりにける。折から今井河の瀬にあまた集ひし水鳥
あり。猛可に物に驚く如く、發と立つ者羽嚮夥しく東を投て翔りしを、荘介遥に瞻仰ぐ。
小文吾にうち向ひて、大田和殿は心付給ひしか。今故もなく群鳥の驚き立て東へ去りしは、
敵が今宵我陣へ夜撃をもて来ぬるならん。といふを小文吾うち聞て、推量宜なり其理あり。
初めの柵の頭人等小越小権太は果敢なく撃れ、猿嶋郡司将衛は辛く命を免
れて寄隊の陣へ加りけん。然らば恥を雪んとて、今宵入来て虎の影羽を抜まく欲するか





るもあるべし。先備を做さるべけれとて、竹合に荘介は再議に及ばず、犬塚即登桐山八良干と
館持朝經大樟俊故に事件々々と囁示して、和殿們は新隊を今宵陣頭に
埋伏して、敵推寄来ば生拘りあへとあるに、良干朝經俊故も悦び承て退出て准
備とありける。亦程に猿嶋郡司将衛は其兄相馬郡領将常と相共に一千餘騎を
二隊に分ちて、人は枚を銜え、馬は鑣子を被て、其夜子二の比及に今井河原の柵に
推寄まるに、将衛は逞兵五百名を将て先に柵を、将常も亦五六百の兵を従へて
陸續として後陣に在り。恁而猿嶋将衛は既に柵を近就て、敵の虚実を覗ふに、
柵の門戸は半分焼て出入に便よければ、直々と馬を拽めて士卒齊一稠入柵
内殊に粛然として、敵一人もあらざりければ、将衛訝り疑ひて、原来敵に備あり。兵
毎早く退出よと喚る聲も果ぬ間に、忽焉として左右なる樹林の茂陰より、暗
號とおぼしく、敵の發つ鐵砲の撻と響く程しもあらせず、咄と鬨る喊の聲と倶に陣

鼓の音囂しく左の方より館持朝経又右の方より大樟俊故各五百の隊兵を将ゐて左右齊一操合して慌忙噪ぐ寄隊の士卒を瞬息間に突崩せバ誰か一柱一ゑべき将衡も徑に馬を返して外面指て逃出れバ後陣に續きし相馬将常入替り敵を拄へて馬を跳せ鎗を拈て近つく敵を突伏々々士卒を駈て挑戦に勢ひ悍しからざるにあらざれバ将衡も稍立直して又相凌けぞ拄える背後に起る敵の伏兵是則別人ならぬ登桐山八良干之又是五百の雄兵を将て透間もあらせず攻伐程に寄隊ハ前後二方の敵に當るに遑なく乱れて走る开ケ中に将衡ハ退後れ良干と鎗を合して先途と戦ひしが良干や武藝勝りけん将衡が尖頭乱れする鎗を裏哩と反落して怯むを左手に引着て馬上に是を生捕りけり一将擒になりしかバ其隊兵或ハ逃去り或ハ又降参して馬前の塵を拂ふも有り係りし程に相馬郡領将常ハ辛く一方を殺脱て従ふ隊兵百名許と共に五本松を指て走りしに惆然とあて馬を駐めて左右に立てる隊兵等にいふやう我数に弟将衡を幫助んとて漫に夜戰を做損して将衡ハ敵に生捕られ我も亦隊兵を多く戰せしまでに至れり因て意ふに我主将千葉殿ハ只管血氣の勇に誇りて敵始終の勝を思ひ給ハずとて御曹司将衡が敗軍を甚しく怒譴て首を刎よと下知せられしを我等が辛くに救ひ給ひ又總大将扇谷の朝良主ハ尚是乳臭き少年なるれバ倶に血氣に惴るのミ敢老黨を敬ふぞあらず啻に我今しまの為体なり阿容々々とあて五本松なる本陣にかへり参らバ必又那怒りに逢ふなり可惜首を刎らるべし武士たる者ハ敵の為に命を捨てこそ後世までも名をも貽さめ自家の為に形なく鄕し首を斬られなバ世の嘲慮になりなんのミかハ去向の吉凶を思ふに憑思しからぬ主と知りつ〻五本松へ還るハ危し我ハ惰地に本國千葉に赴きて孝胤主に身を寓まく欲せ汝達我に従ふて共侶に千葉へ去んや若又欲せるよしあらバ速に立去りね我決

今井の夜戰
寄隊敗績を

なぞ怨るべしとの事を大家らが守て我们は。あの年来御恩の下にはべりし。今この時にあらずは
なく君を棄て已がなど那里に身を躱さん。只投る方へ召れ給へ。皆御伴せんと願ひし
けれど異口同様に答しかば将常歎び領きて欲しかるべからぬそなたど。路引違へて形貌を窶しつ
間道より主僕倶に千葉に走りて孝胤に降参けり。相馬は千葉の親族なれども
将常弟兄故ありて年来石濱の千葉に従ひしが今の難義を寄る方なさに将常
竟に其隊兵を将て身を孝胤に寓せしかば孝胤歎びて是を疑はず。則本領を
還し与へて家老の列に侍らせける。是後の話なれど程に今井河原なる里見の
柵にて登桐山八郎良于館持儀枚朝経大樟村主俊故ら犬川犬田の軍
配に従ふて其夜丈り寄隊の頭人猨嶋将衡を首にて生口及降参兵を毎に
皆数珠係にして倶に柵の正廳の檐廊の下に牽もて集へて犬田犬川両将の実検
にぞ入れにける。登時犬田小文五悌順犬川荘介義任は満呂安西らの諸士を従





へて廳の上坐に在り。先其生口交名を閲するに夜襲の頭人猨嶋郡司将衡なれば。
登桐山八郎是を生拘りて又将衡の従母弟比田鳴子丸村益は館持儀枚の隊に
擒にせり。又相馬郡領将常の家臣とせし渋谷柿八郎足脱は大樟村主俊故が生拘
けり。軍功孰も紛れあらず。當下犬川荘介は高く燈燭を挑させて佐と将衡を相く
ひて云れ猨嶋郡司卿等には和郎逃歩早く何の程より見えざりしが今宵又来て
命を餽るは宛是夏の虫の燈火に入るに似たり。然れども我君里見殿は仁義を
旨とし給へば我们も亦其軍令を守りて戦ひ勝とても敢殺戮を恣にせず縦令和
郎等を皆悉誅するとも寄隊の弱きに為得なる事もあらんど。といへば小文五も亦これ我
昨夜妙見嶋の柵を抜し時柵の頭人彦別夜叉五吾と其隊兵まで擒にせしを
船に乗せて流し遣りける例もあれば汝等も還らんと願はゞ皆放ち遣すべし。素直して
勝負を決せよ。兵毎其降人と生口の索を皆解捨よと云下知に従ふ縄合の

雜兵等ハ何と答へて。随即將衛足脱村禽等ニ被れる索を解れしかバ將衛ハ
且羞く頭を搔て漸く二大士ニ向ひて。在下等ハ不肖ニしてみづから量らず。
先度の恥を雪んとて。身ハ今楚囚ニ做れしを。猶再生の慈恩ニ逢へる歡び何事歟
是ニ優ん哉。しかれども我主將自胤朝良ハ。みづから血氣の勇を負ことて敗軍の士卒を
饒さず。郷向ニ在下戰利あらざりし折。柵を喪ひし時。自胤怒甚しく既ニ死刑ニ處せ
られしを我兄相馬將常が宥く救ひ給ひぬ。則倶ニ今日の夜撃を命せられにけ
今宵も亦戰ひ負て僅ニ命を免れしかど。故の陣所へ還りなバ。自胤ハよに饒べき。又一
層の怒を増て首を刎られなむ。闇を去て明ニ就るハ天日を見るニ由なく。不賢ニ
失て賢ニ得ぬるハ管仲百里奚が甘する所なるべし。願ふハ今より御身ニ屬して再
生の恩ニ報んなるを許容されかしと。亦他事もなく答るにぞ。比田鳴子介村禽も
亦是猿嶋の外戚なれバ。情願將衛ニ異ならず。留められんと欲すと云。獨渋谷柿

八郎足脱ハ。主ゆゑには將常ニ叛して二張の弓をひくべくもあらず。放ち還させ給ひ
なバ安危を將常と倶ニせんなる義を願ひまつるといふ。荘介是をうち聞て犬田の意
見什麼と問へバ。小文吾答て。然バよ既ニ皆助命の上ハ。留られんと願ふ者ハ留めて
是を用ふべし。かへり去んと請ふ者ハ放ち遣るもよからずや。といふを良千歟べし。二犬士を諫
めて給ふなる両君仁慈の計ひハ。則舘の御本意なるに。愚意を舒んハ憚りあれども。
人の心術ハ測りかたかり。今將衛等が命を饒して懇ニ用ひ給ハヾ。黄八が虎ニ齧るゝ
悔あらじとおもへからずや。況や還らんと願ひぬる足脱等を放ち遣りなバ。寄隊ニ我備の虚
実を知られん歟。然る時ハ是も亦寃家ニ刃を借するに似たり。只是千慮の一失
歟。猶再思し給へと願しけれども。荘介うち聞て。登桐和殿の小心も以ある事なら
ねども。都て將る者の巧拙ハ両人局ニ相對ひて象棊の勝負を爭ふに異なることな
し。其高名なる者ハよく其敵なるの馬を取て已が有として使ひぬれバ。則是敵も

なく敵を攻る手段あり。又其拙き者ハ偶敵の馬を獲ても用る所を知ざれバ握殺して竟に要なし。意ふに今寄隊の両大将自胤も朝良も。士卒を用るに拙き者ハ将衡と足脱を用捨のみも這理によりて克思つ。必疑ひなかるべしと諭せバ良干感服して。又いふよしもなかりしを。小文吾差よく慰めて。則援嶋将衡と比田鳴子介村禽をバ其従兵一百餘名と相共に良干の隊に屬て。則先鋒の小頭人とし。又澁谷柿八郎足脱をバ願ひのまにく五本松なる。寄隊の陣へ還しける。是によりて寄隊ハ二萬五千餘騎朝良自胤両大将也て。昨日五本松に着陣の。事の趣を。詳に告げけり。左右する程に天の明しかバ犬田小文吾犬川荘介ハ此日の戦ひの隊配を定るに満呂復五郎重時がいふやう寄隊の両大将朝良自胤ハ年少ければ思慮足らず倶に血氣に惴るといへバ将常将衡が敗軍を怒りて必推寄来るべし。なの義什麼と真實立て問へバ荘介點頭て我も如右思ふのミ遮莫なの邊ハ枯芒蘆処々に繁り立て人馬の進退に妙なりき。先也今より諸隊を我にて五本松の這方なる曠野に出て敵を俟んとかに小文吾も其議を好として。随即登桐山八郎良干を先鋒にて。援嶋郡司将衡と比田鳴子介村禽を左右の羽翼とし。又満呂復五郎重時を後陣の頭人にて。小文吾荘介ハ満呂再太郎信重安西就介景重等の諸勇士を従へて陣の中央に在り其勢約莫六千餘騎人にハ飽まで戰飯を喫せ馬にハ多く豆草を飼て。徐に士卒を繰出し今井河原なる柵の城を館将傔杖朝經と大樟村主俊故に其隊の兵千百十數名を従して。權且なく留め置けり有恁りし程に寄隊の陣中ハ其暁天に澁谷柿八郎足脱並に将常が隊兵の主将の逐電をも知らで逃くる來ぬるも尠からず。又自胤の士卒の昨夜将衡の隊に隷られし卉が中に将衡にハ従ひてかへり來ぬるもありけれバ都て是らが縲紲して昨夜将常将衡が敗軍の事の顛末将衡ハ敵に生拘れて。隊の兵と倶に皆二犬士に降参

なくハ又将常ハ辛く囲を殺脱けしに、いまだ當御陣にかへり参らざるハ敗軍の罪を
怕れて、遂電なしつるならんと云ふ。朝良自胤是を聞て、且驚き且又怒る事大かたならず。あるひ
ハ渋谷柿八等、其残兵も敵に降りて、反て咱等を害せんとて、敵の與に刺客に做して
かへり来ぬるもあらんぞとて、一個も遺さず首を刎よと云。自胤ハ朝良に思ひつべき
益く勢ひ燃る火の如し。朝良も亦些の疑ひあれば、倶に饒きべくもあらず。と原播磨
介胤久が詞を盡し是を諫めて、足脱よ残兵等の命を宥めさせしかども、自胤朝良ハ
猶疑ひ解けず。皆陣中に囚置せて、堅くこれを守らせけり。然りけれども朝良自胤ハ
怒り尚理らず。徑に今井へ推寄て、残賊将衡村禽ハ、今も倶に一天を戴かじと
夙く上總に攻入らずハ、軍功必二の町にならん。然るを一日も徒にあらんや。熱腸を遣る
かしとて、両将夙く軍議を定めて、則人馬を推出すに、自胤みづから先陣たり。當
時山東ゆく野武士の剛人と呼えたる上水和四郎東三、赤熊如牛太猛勢を先



鋒の頭人にてあり。嵐剛四郎浅羽麻二を左右の副とて、原胤久等是に従ふ。次る
則總大将朝良ハ、朝良その日の打扮ハ、小櫻絨の鎧錦繍の戦袍に龍頭打
たる五枚兜を戴き、黄金造の大刀に梟皮の尻鞘帶て、桃花の三歳駒に真紅の
厚總鞦せたるに、貝鞍の四下も赫奕たる鞍措たるに跨て、征矢箭二十四挿たる矢
箙を駝做つ。左手に重藤の弓を握持て、徐に馬を歩せける。左右に従ふ近臣勇士
松山小利作、入間尉藏建、柴破麻嵬介、麻生一郎等、皆華麗に擐甲たるを枚擧
るに遑あらず。大石憲重後陣たり。總軍約莫二萬五千餘騎、山に虎を搏ちにを
べく、水に龍を屠るに足る勢ひなり。振然として既にして朝良自胤ハ、ゆくとのまご幾る
らず先一二騎の斥候を遣して敵の形勢を張るに、其斥候の騎馬馳かへりて、敵も
亦今井より推出て、既に這野畫處に在り。相距ること遠からず。計るに其勢五六千
に過ぎざりけりと、これを自胤らに告しかば、後陣に憑と告させて、前後齊一整々と皆直

急なる推隨に夙く敵陣に相薄むに果して里見の防禦使ハ前後二備で犬田小文吾悌順先陣たり又犬川荘介義任ハ其後陣の將として寄隊を外に待るべし倏而東西相逼る程に迭に陣鼓を鳴らし士卒を揮めて箭を射出し丸を飛して挑爭ふこと半晌許寄隊なる里見方なる各矢傷を負ふ兵あれども敢一人援出くよく鎗を入るゝものなし其時寄隊の陣よりして身長五尺八九寸なる両個の大漢倶に烏草繊の鎧一對なる巨刃の鎗を腋挾みて馬上に乗りも仰張出く敵に向ひて喚るやう爾等人々迭に一霎時矢丸を飛しそ是ハ千葉殿の御内にて數度の戰ひに後れを取らぬ者ありと知られたる手嵐剛四郎高成浅羽麻二原弘なり今よ世の人に里見の犬士と喚れたる小文吾ハ那里に在る荘介も疾出て倶に勝負を決せよと両聲高く指招けば登桐山八ッ房あへも憎れ那奴們が廣言哉聰引裂れ食んと馬に拍れ出んとするを猿嶋將衡推林にありて在下なる今這先鋒に従へども敢ずに一个の功名しなる嵐浅羽が本事ハ知らぬ咱們に任しね給ひねと請ひつゝ比田村會に目を注し二騎相並びて馬上より鎗を打振々々蟇鳶直に馳出れバ鳴子介村會も後れじとぞ倶に敵をぞ逆へける浅羽なる嵐是を相くる主に叛きし両股武士若們ハ我敵なるに足らねど疾二犬士を出しねとらせも果ず將衡村會鎗閃めかして刺んと挑むを高成と原弘ハ倶に相逆へ鎗を合して一上一下と術を盡し互に相知る同士なれバ後聞を恥て輩の訕りを思ふて毫も距ず高成と原弘ハ既にして痛痍を負ひたる又將衡と村會ハ敵の鎗下に馬を斃されて倶に歩立になりしかど將衡ハ手嵐高成を突仆して首を捕り村會も亦浅羽原弘の吭を罵煞と刺志しが仰反り仆れて死でけり浩処に寄隊の陣より金剛力士に異ならぬ猛者一騎馳出て既に退去らんとしけるを將衡と村會を反賊なると喚りつゝ四五十斤なる鐵撮棒をいと輕やかに引提て馬を走らし来て撃んとす是則別人ならず千葉自胤の陣中なる本朝の呂布と負

在る武蔵千束の野武士の長上水和四郎東三是ハ将衡と村斎ハ戦ひ既に疲労れしかども敵に喚れて一歩も退くべしやと相並て鎗を構て立逆るを東三ハ物ともせず鐵撮棒もて両個の敵の鎗を打拂ひ駈悩して撓む村斎の兜の天邉を力に儘して礮と撃ろ撃られて比田村斎の首ハ胴へ滅入と云もさらず死んでけり将衡是に驚慌て引返して逃んとせしを東三透さず馬上より鐙の總角引抓て左手に楚と引よせ右て鐙を鳴らして丁と蹴る蹴られて叫ぶ将衡ハ手に尚鎗を持ながら三間許怪飛されて野中に立てる巨石に背を撲せて甲も骨も砕けて息ハ絶にけり當下里見の先鋒の頭人登桐山八郎良干ハ此の為体を見るに得堪ず突然として只一騎敵に向ひて喚るやう遖れ武藝勁力。和主ハ誰ぞと向せも果ず東三眼を瞪らして若们如き仂武者ハ名告知せる我にあらねども疾小文吾を出さずやと罵り誇る舌も引せず良干怒て入む眉尖刀を東三ハ又鐵撮棒もて受流し打合して姑且挑み戦ふ程に良干勢ひ始に似

ず既に危く見えしかバ満呂再太郎悚難く走り出んとせしを小文吾急に喚禁めて信重ちね那奴が力藝和郎等の及ぶ所にあらじいでくと云ひつゝも四下を佗と見るに這頭に故たる欅樹ありて周匝一尺に餘るべき大枝這方に指出したを小文吾ちと見て是究竟と馬を樹下へ乗よせて馬上に其枝を引よするに最太けれども輭弱に做りしを其幹際より反折て小枝を裂捨梢を拂ひて長六尺許なる生木の棒に造做をを挾みて馳出るを荘介驚きて禁れども小文吾勢ひ壮にて毫も諌を听ざりけり尓程に登桐良干ハ上水和四郎東三に眉尖刀の柄を打折られて克ふべくもあらざれバ早くも馬を棄旋らして飛が似くに引退くを東三ハ循饒さじとぞ鐙を蹴立て趕蒐るを小文吾既に陣頭に馬を走らせ来て立塞がり馬上の武者態問でも知るべし羽中の大鵬毛裏の狻猊入るが境に入る如く佗と東三を遮留めてやよそれ勁敵姑且止れ我ハ是里見の防禦使犬田小文吾悌順人爾屡我を請へき我の手ご爾を知るべき名告れくと向せもあへず東三ハ犬田欤ござんなれ爾知ずや己様ハ坂東随一の

○文溪堂藏


○文溪堂藏

剛者昔の公時義秀といふとも比喩るに猶過たる萬夫無當の勇士なりとて石濱殿も自負れて
當陣先鋒の頭人なる上水和四郎東三是なり。犬狗見は素より泉菜就鳥の餌になりぬべき名詮自性
只一撃に結果せんと今年今月今日は正に其身の命日なるを自知して棒を喫ひねと唱へ哮り
たて鐵撮棒をもて撃んと馬を馳よせれば小文吾毫も慌ず噪がず急造る堅木の棒を揮
丁々磤と受流し又打合する力藝剽姚現徒ある者なるから今防禦使の大任なる
あらかじめ下なるもの勁敵に當りしは士卒を多く撃せじと思ふ慈善に武勇を兼
たる賢者の操は皆実なれば百の和四郎一度に向ふも勝べくもあらずして這一犬に及
ばんやと人は稱へ馬は嘶く自家は比ふる寄隊の士卒も皆打長視て忙然たる這両雄の戦
ひ甲乙あり東三危く見えしかば寄隊の陣より又一騎東三を資んと最大なる鉄鉞を左の肩に
うち掛て馬を飛せて馳出けるが是甚麽なる猛者ぞ弁に又下の回に解分るを聴ねかし。



# 南總里見八犬傳第九輯巻之三十七

東都　曲亭主人編次

## 第百六十四回　賊兵刃を奪ふて窮君を賣る　水軍艦を寄せて敗將を載す

再説犬田小文吾悌順は。寄隊第一番の猛者と聞えたる上水和四郎東三と馬を相
寄せ棒を合せて。他雑もせず戦ふ程に東三竟に腕疲れて連りに嘘を吐くのみ既に
危く見えしかば又寄隊の陣中より一個の騎馬武者馳出るを。見れば是亦東三に
劣らざるべき大漢にて。蝋眼虎鬚骨逞しく面黒く身の長は。皂革紙の鎧擐て腰に
三尺の大刀を跨へつゝ大鉞を執りたる面魂奇あり。銀の左纏の揺額しく胡立忌
兜を被ざりけり。恁而這猛者馬を找めて近つく随に聲震立て上水兄弟我代
んぞ。東西の千士萬卒今我赤熊如牛太猛勢が本事を見よやと喚りける。

馬を馳よせ鉞を振閃して小文吾を只一撃に斫んとす。既にして大田小文吾は。左
右に敵を受れども毫も怕るゝ氣色なく左を拄え右に中り受て流し流まて六
毅なり。神出鬼没の手を盡せバ人馬の進退一致して両敵の器械を打拂ひ追返す
生木の棒ハ翩々と蜿虚空に閃く如く孰を其と分くべき鬪戰闌なりければ寄隊の
士卒も里見の諸兵も呆然として酔るが如く手を空くして長観て在り。倍而上木
和四郎ハ今一雄の帮助を得られバ疲労れし氣力を励して相共に撃なまくほれども
小文吾ハ這両敵を左右に受し。精神始に弥増して岩よりも嵬る勢ひに誰かよく勝
よしあらんや。譬バ唐山三國の初に冀州の刺史袁紹が萬夫無當と自負たる二
勇士顔良文醜が関雲長と戰ひしも係やとぞ思ふ大奮激突戰細に名状べからず
出既にして大田小文吾ハ這両個の勁敵を。思ひの随に疲労して甲乙倶に腕の
乱るゝ透を得て。吁と吽ぶ声と倶に撃る棒を。東二拄るに追られて鈍くも頸を碎





と撃れて頭鎧も冑も砕けん。苦と一聲叫びも果ず馬より撞と墜る時。小文
吾が生木の棒も中より弗と毀と折まくれバ小文吾早く東二が鐵撮棒の杪を摑て
地上に落さじと留ける程もあらせず赤熊猛勢明輩の亢進で。と叫び挑る
鉞の尖く犬田の頭を撃んとするに毫も透をあらざりけり。小文吾馬上に身を反箕
猛勢が撃る鉞児ハ寬外れて小文吾が乗たる馬の髭亂を剪て頸を秏地と斫落せ。
那時遲し這時速し。小文吾ハ我馬の斫られて仆まんとするを時仆るも果ず身を
飛して今東二に放れてありける馬に閃りと乗移りて那八角なる鐵撮棒を振上ぶ
て手も見せず赤熊が如年太猛勢の右の肩尖項骨被て力の儘に撃しかバ~~して堪在
るべき猛勢ハ肩骨摧けて握り持たる鉞児を落して人馬共侶に地上に撞と撃
伏られて。其侭息ハ絶にけり。然バ犬田が這日の棒に敵も自家も目を驚して其
緒を接んと欲する者なし。登時犬川荘介ハ執る麾をうち揮りて莵れくと士

卒を率る軍の潮前時なりけれど勇む登桐山八郎満呂復五郎再太郎安西
就介らハ、べから立雑兵彷武者に至るまで皆洪水の衝く如く又大山の崩るゝ像
く吶と揚る喊の聲と倶に前後を相争ふて面も振らず鎗の尖頭を揃て寄
隊の陣中へ突蒐り衝頽さむと勢ひに誰か中るべき寄隊ハ萬丈に捷れりと然しも
負しく思ひてる上水和四郎赤熊如牛太ハ犬田に輙なせて力を喪ひ勢ひ折けて
忙然たりしに又犬川に先を駈られて始て事の起りしを驚き乱れて辟易し一
陣既に敗れてハ大将自消原徹久も又立直しもえせず返せくと喚るのみ逃る士
卒に誘引れて頽れて後陣へ辟れ蒐れバ朝良も憲重もあれ什麼とおなじく制
しもあらばれず竟に惣敗軍となりにける然バ里見の二大士ハ逃る寄隊を遠く
赶ハず程よく士卒を喚返させて人馬を駐め五本松に在り敵の旌旗を本陣
営に入番りて士卒の軍功を尋るに登桐山八満呂親子安西就介们ため餘も

諸士に分捕ありけれども犬田が那二勇士を斃果して寄隊一萬五六千の胆
を挫ける其武其功に及ぶべき者あらず荘介これを嘆賞して且小文吾に
向ひて云やう和殿今日の挣ぎハ和漢に儔すくなかるべし是をもて敵ハわづかに自家
六七千の小勢をもて二萬五千の大敵を只一呼吸に殺頽せしハ和殿一箇の力に
依れり我及ざる所なれども和殿ハ當陣の上将であるなから士卒の為に自愛をも
始終の勝を思ひ給はずや縦其功ありとても匹夫の勇を事として敢士卒に譲
らずとかく那二勁敵と戦ひ給ひしハいと危しとも危かりし那時倘寄隊の陣より竈
近づきて箭を飛さバ和殿防ぐに由なからん孔子に語道に欲すれども畏忌の及ぶ
所を知らぬハ後の為ならずと理りて演て諫れバ小文吾聽て感服して教諭寔に
其理あり我も亦始より思ざるにあらねども那上水和四郎赤熊如牛太ハ其名
粗聞えたる猛者なれバこそ将衡と村雨ハ果敢なく斃されて良干も亦危かりき敵

倘勝に乗ることもあるべし勝敗はかねて知るべからず。この故に我己を
ゆるせ一臂の力を尽せしのみ。敢て武芸を見かし誉を求めて匹夫の勇を好むにあら
ねど和殿の諫は千金也。我術を知るに足れり。嚮に今井の戦ひに和殿殺戮の
て多く敵を殺さで且進る将卒を赶めて、寄隊の大軍近づけるを思はざりしを兵を
恚みづから貶して副将の席に就ことを禁め難く、我身又得失今まで正使の
上坐を汚せしに、我も亦今日の闘戦の危殆を見るべくて且殺戮を専とせし、彼は和殿に
倍く漫に館の御本意に背き奉りし者に似たり。這失をもて那失に易て今より防
御使の上坐を返しまゐらせんとて、と推薦めて其身は又故のごとく副将の席に就
ぬしかば荘介は云云と一両事時にて推辞れど、当然に争ひ難く僕那意に儘せて
又立替りて正使に做りける。謙遜辞譲義ある礼ある人の及ぶ者道美事を感ぜ
者なかりけり。その中に登桐良干は惜地に満呂に当時之道二犬士を評して、犬
田はヨブカ諸犬に勝りて且武勇は余りあれども智に足らざる所あり。又犬川は智計
あり武勇は犬田に伯仲すれども膂力は及ぶべくもあらず。館は人を知り給ふ良将に
ましませば犬田と川との二犬士をもて正副の二将に做し給ひぬ。那余りある所をもて這足
らざる所を補ふ御軍配なりけんを、那二犬士はみづから居らず。送に其小過をもて或は
正将の席を譲り或は正将の席を返して其褒貶を士卒に示せり。則是忠
臣の真面目といはまくのみ。犬川犬田が殺伐の一挙は館の御本意に出ざりし故にみづ
から貶して倶に衒ひとなれども事皆勝利あらぬに世の人は道て衒を飾らぬを
称ふるに衒ひと思ひ衒を衒としてみづから貶せり。心操をも憑しけれ。意ふに犬田が今
日の挙動は匹夫の勇と知りながら那便宜をもて犬川に正将の上坐を返させんとての
所行なるべしと唱々感ぜざれば当時のよく敬服して登桐の精評ありけり
危言に當れりくとぞ称へける。間話休題 ○ 恁而その次の日十一月七日の朝早天に犬川

荘介は犬田小文吾と倶に五本松の陣営に在り。先に斥候を遣して敵の止る処を知まくほりするに姑且して其斥候馬を走らせかへり来て寄隊は両国河を背にして。南本所に陣をとりて其軍兵初には劣らず猶二萬四五千もあらんと報るを荘介うち聞て亦小文吾に談る義あり言既に訖く即便登桐山八郎満呂復五郎等あ諸士を召聚へいふやう。寄隊は昨日の戦ひに痛く敗績ぬれども多く士卒を喪ねば尚犄角の勢ひを張るべし。計るに寄隊は両大将まで二萬五六千の大兵あり。自家を他に比すれば三分にしてその一にだも足るべくもあらず。夫小兵をもて大敵を破らまく欲するは奇を出すにあらずは不可。敵は一日人馬を息へて明日は必推寄来ぬべし。然れば明日の戦ひには必寄隊の軍兵を分ちて合期をせざらせて自潰朝良を擒にすべし。登桐生は隊兵五百名を従へて今より今井の柵へ赴きて那里の頭人朝経俊故に我計略を相得へて各其隊の軍兵をわかちて明日は早天に墨田川へ赴きて渉すべくする勢ひを張るべし。其計策は箇様々々と悄やかに解示せば小文吾も倶にいふやう我妙見嶋の柵を守せる士卒は三四百名あり今は那里に要なければ那柵は速に皆火を放ち焼却て其兵毎をもて今井の柵を守らせん今すぐ今井の柵に在る所の軍兵を又朝経俊故に従せて墨田河畔に向ふに足るべし。其を三四百名分ちて和殿の隊に加へよ然らば和殿の隊兵は八九百名になりぬべし只神速を至妙とせん。ならぬてよと急せば良干は忻然と言承をして退りて従ふ隊兵を待に及ず各足令に信せよと云捨て騎馬に鞭を鳴して今井の柵へ走らせける。小程に寄隊は酷く敗績せし折稍南本所に旌を建て散失ける士卒を待に幾程もなく聚合しぬ軍兵敢初に劣らねば姑且英気を養ひける其次の日十二月七日両大将朝良自胤は即便憲重胤久等の老党兵頭を聚合て再戦の意見を問ふに大石憲重がいふやう言悍なるに似ねども約莫昨日の闘戦は千葉殿自家の多勢あると上水赤熊の勁勇を負とおもひし

由断よりして敗軍に及べり然りけれども猶幸ひに士卒に傷損少なければ敗れざるのみ故の如し必明日の闘戦にハ當家先陣して先度の恥を雪んと易ろべくやはんと給たり貌に論ずれバ自胤ハ恥ざる色もなく頭を低て黙然たり朝良これを見て石見が意見宜ふ今明日ハ是十二月八日なり我老館ハ定正水路より安房の稲村の城を攻捕ろべしと豫より議ありし約束の日に至れり然るを遠里より絶ざる小敵と破難て水陸の闘戦合期せざれバ異日我何をもて老館に見参せん明日ハ必我先陣して那二犬士の首を給べし宜く隊配を定めよと云ふに憲重再議に及バず承りぬ然ど敵ハ大勢ならずと云ども猶小心にあるべし今宵先間諜児を那邊へ遣して敵の虚実を探らせて且明日の奇兵をもて二犬士を生捕りなん其隊配ハ箇様々々如此々々にやせんと云バ朝良領きて躬て其議に任せけり恁而其詰朝寄隊の惣大将扇谷五郎丸朝良ハ云ずもがな先陣ハとて兵頭ハ人間九郎佑啓松山五六郎尚水と先鋒の頭人にて具萬戸

月十字七郎益を副とし又宿尻城戸介建隆に雄兵一千を従せて五本松の這方なる茂林中に埋伏して闘戦闌なる時横鎗を入れよとて是より諸兵に先だちて其夜中に出遣りけり其の他ハ千葉介自胤原胤久を後陣として朝良憲重先陣とし惣軍二萬五千餘騎既にして十二月八日の朝未明に人馬を繰出さんとする時昨夕大石憲重が敵の虚実を探らせて遣せし間諜等が走り来て報るを聴くに里見の二犬士義任悌順ハ反て千葉殿の石濱の城を捕んとて一萬餘騎を二隊に分ちて小文吾悌順ハ柳嶋より墨田河を打渉して石濱を攻伐んとし又荘介義任ハ五千の雄兵を領て尚五本松に在り但是のみならず這地の民皆里見に従ひて二犬士の隊に附んと欲する者尠からず又千葉孝胤も里見に謀し合されて日ならず出陣あるべしと云ふ土民の巷談右の如し敵其加勢を待ざる間に夙く伐破りねばならぬ難義に及ぼせんと云其言孰も紛れなければ朝良憲重驚きて

さそもとむりに躯く軍使を走らせて。自胤に係と告れば自胤も亦駭慌てみづから
朝良の陣営に来て。談するやうハ如此ハ敵の軍配将に難義に及んと云石濱の
城ハ我宅眷あり且幼少の児子さへ在るに倘萬一の事あらバ後悔臍を噬むとも
及べからず。孝胤ハ風聲のミにて遠地に出陣せざるの地の郷士兇民等のミにて那隊に加りて
る其間に哨と柳嶋より向ふて那里の敵を伐破らん然れども我隊兵ハ寡なるをもて足らざれバ加
勢の士卒を借しめよと詞急迫しく請求れバ。朝良憲重異議もあらざれバ容
て隨即扇谷の兵頭引船綱一郎師範を頭人として雄兵七千名を授るに自胤ハ
尚一人も喪らむことを欲りして衝に陣中に囚措る相馬郡領将常の隊兵并渋谷柿
八郎足脱等百十數名を赦して是も從へんと請ひしかバ朝良則ち饒るされけり是より
自胤の隊兵と加勢の野武士上水和四郎赤熊如牛太の遊兵と共に軍慮一萬餘
名ハ自胤あれを二隊に分ちて原胤久を後陣とし係而千葉介自胤ハ一萬有餘の

士卒を將てみづから先陣に馬を進めて柳嶋を投ていそぐ程に里見方なる加入の隊長有
持備秋朝経大樟村主俊故ハ昨日大川丹狂坐の計策を受けしより其朝二隊の兵
一千四五百名を從へて墨田河原に造るべしとて小梅三囲田の邊遣に来にける時自胤向に
これを見て他ハ必里見の奴們が墨田河を渉ちて我城を攻んとて来ぬるならん然は
敵ハ小勢なり驅破りて鏖にせん兵毎いそげと鞭をもて指示しつゝ馬を走らせれバ從ふ騎
馬も歩武者も皆後れじとうち向ふ其勢ひ極めて急なる其時朝経俊故ハ逆期
あらる事なれバ敵の近つくを見るまで今来ぬる敵の旌表に月星の花號あれバ向ハ
でもあらぬ千葉介なり犬川主の計る所毫も錯ハず這圖に入れり兵毎備を疾く下りて
吶かる共侶に敵を迎へて銃丸を飛し箭を射かけて寄せ立んと間を透さず撃んと
ぞ當下千葉自胤の先鋒の頭人引船綱一郎師範ハその隊の兵一千餘名を
魚鱗に備へ楯を被せて射れども突けども物ともせず競ひて蒐る激波の勢ひ當

小文吾小梅に自衛を破る

るべくもあらず。爰に自滿も亦推續きて。馬上に麾をとり揮りて。先度の恥を今この時に雪めずハ何をか待ん伐めぐと烈しく下知に従ふ士卒五六千各先を争ふて驀直に推蒐るを朝經と俊故ハ深田を前にし茂林を後にして敵の脚を立させず矢種の濫り射に發せども敵ハ視に餘る大勢なれバ朝經も俊故も其刃尖に挑難て竟に總頽に做らんとせし浩處に里見の伏兵二四田の西の方一叢繁たる枯葦盧の中よりしく忽焉と連放つ火銃の音轟しく千葉の士卒を幾名歟斃仆し轂を白まさせて見れバその隊の頭人登桐山八郎良干ハ十百に近き雄兵を択めて自滿の背より咄と噇く競ひ蒐る多勢力も今ゆら貝むに足らず千葉ハ前後の敵に攪されて自滿も師範も存く撥と碎けて靡非きて挫べくもあらざりしを後陣に續きし原滿久徳と見るより隊兵を整めて鋳砲を放蒐々々勝誇りたる敵を擊散せば自滿も師範も亦その新隊と勢ひを得て前後の敵に息をも継せず短兵急に戰ふ程に又

忽焉と左右なる枯葦盧の中に猛火起りて煙の裏より顯れ出るハ是則別人ならず大田小文吾悌順なり。一千有餘の隊兵をひきゐて滿久が隊の真中を縦横無碍に攻破る。一人當千向ふに前なき武勇萬騎に抜萃して人なき境に入るごとく瞬息間に蹴頽せバ又良干も朝經俊故も士卒ともに一勇を奮ふて克戰ざる者なきに朝風啓く吹募れて樹ともいはず草ともいはず猛火限りなく燃廣がりて逃る寄隊の路を断つ火花那隊に落蒐る程に千葉の士卒ハ度を失ひて或ハ斃されて頭顱を喪ひ或ハ燒まて黙ら仆れ死ぬるもあり宗と亡て滿久も師範も乱軍の中に撃れ歟是を知る者なかりしが中に相馬将常が残兵ならびに澁谷柿八郎足脱们百千數名あるのみ。旦禁獄を赦されて當陣ハ駈入られしかども猶自滿を恨みて始よりして精戰せず。隊其徒と悄々地に商量するやう。千葉殿血氣の勇に誇りて敗軍の士卒を饒さざるの故に将常主ハ本陣へ退還るぞ夙く逐電なるにしかず我们ハ知らずして御

陣にかへりて来て惨刻く禁獄せられしに却猛可く赦されて今日の役に従へども倘又負
なば向腹立れども必しも我毎の首を刎るまでもあらざるべし逃さく
他御へ走んずと示し合せてありけるに既に敗軍に及びしかば夥く風く逃亡て敵の放ち
し火に裏かれけるは柿八足脱と其徒五六名は後れて兵火に路をあへぎせん術なければ風
脇なる樹枝の蔭に濡る豪果被りて敵の退くを待て処り於程に千葉殿自胤は既に
敗軍に逮びしより身に従ふ近臣もち四零八落に做りしかば免れがたしと思決めて近
く敵を我名欲殺拂殺脱て小阜なる処に馬棄捨て腹を斫んと坐を占る背に張
ふ渋谷足脱なる奇貨と合笑り其徒五六名と喚ひ喚く火速の逆心先や這敗
将を我生捕りて里見へ降りて功を売んと計較り謀合せて近つくを知ざりける自胤は
鎧を草摺に脱棄んり短刀晃りと援持て肚へ突立んとせし程なりければ足脱等は
叱咤とかけて叫と寄来て組禁て刃を奪とり推伏せて折甲縄に両手を縛りく。

畋しく索を被にけり。この時犬田小文吾悌順は思ひの随なる勝軍なれて兵火も既に滅
なれば小梅の道場の門前に旌旗騎旐を建させて士卒の聚合を待程に盾持朝
経と大樟俊故は千葉の先鋒の頭人引船綱一郎師範を相撃ならんとすれども殺伐は
己とりえざるの館の御本意にあらざればとて首実検と欲せし又登桐良干も千葉
兵頭両三名を射て落せしかども弁が随にて首級を合せ反て那原播磨奴濁久が
十四五箇所の深痍を負ふて枯蘆の中に仆れて在りしを心ともなく見出しとて尽く儘
巨盾に乗せ雑兵に舁せて随即這里におて来つ。その義を犬田に告しかば小文吾は濁久が
忠戦を憐みて准備の膏薬を出し與へて其刀瘡を包ませるほどに浩処に渋谷柿八
郎足脱は其徒五六名と共侶に自胤を生捕りてぞ卒に牽出て来つ則事の趣を
犬田小文吾に報るなり已们は相馬将常の残兵なりしが。僅々ても欲るれば自胤が乱政非法を
怨る故に反忠を仕りぬ其義は亦箇様々々と言詳に訴告て倶に恩賞を乞ひし

爲小文吾聽て且歎び且怒るに堪ねども先朝經が自鳴を受捕せて草裀の上に坐
らせつ佗と良干を見かへりて這足脱們は逆賊の漏なれば搦捕りねと下知激しき指揮に
良干は応も果ず我隊兵と倶に突然と身を起して騒操ぐ足脱們に走寄りつ
打居て一人も漏さず結縛りけり登時渋谷柿八郎足脱は其徒と共侶に慌て聲を
揚立て我們何等の罪あらんや欲する所は里見殿へ反忠して我大将を生拘りて進ら
せなれば今日の軍功第一ならんに非如然なるの賞禄はあらずとも搦捕らるゝよしなしと叫
せも果ず小文吾は睨まへつゝ聲高やかに叱それ這白徒大胆の若們は相馬郡領将
門の従兵ならずや我聞相馬将常は自鳴主の親族なり則千葉の家臣の若們
是に仕へるは自鳴主の陪臣也縱自鳴主不仁にて恨しく思ふともその戰場より身を
免れて故主將常の往方を尋ぬるがせを切てものゝあるらんに今其軍敗るゝに及びて情
なくも這君を犯して功を貴まくするは是叛逆に異ならず傳に云ずや君は君たらずと

いへども臣は以臣ならざるべからず父は父たらずといへども子は以子たらざるべからず况抑我
君里見殿は仁義を旨と爲給へば我們も殺伐を敢好むにあらねども倘是なしも忍びなば
何事をか忍ざらん兵毎者く其奴們を牽出して首を刎よと言苛高く下知すれば良
干の隊兵等諾と応て足脱と其徒と六名を牽退け且推並べて則皆其首を
刎て是を自鳴に見せにける當下犬田小文吾は自鳴に被たる索を親く解
捨て恭しく上坐に推薦めて跪坐ついふやう思ざりける今日の見参僕れば六総の昔に
かはり在下浮浪たりし時淺草野路の頭にて料らず邂逅まゐらせし馬加大記常
武が媢嫉奸詐の故をもて身は口いひ籠中の禽の像く他が別亭に禁錮せられしを楚
囚の怨に堪ざりしに登時いまだ見も知ざりける同因同果の義兄弟犬阪毛野胤智
が復讎の便宜をもて倶に那里を脱れ去て過世ありける里見殿に徵れてはや久しからず
然而今日に至れるも憖れば今我私の再會はあれど和君を情地に石濱へ還しまゐらせべ

けれども、いかにせん防禦の大任這身に在り。然ば軽き情義の為に、重き君命を廃てやハせん。権且世房へ倶しまゐらすべし。君は我に一介の旧恩あるにあらねども、何でふ情なくあるべきや。況寡君里見殿は仁者なり。然しも賓客の礼をもて迎らるべし。その義御心易かれかしと理義明々地に慰れば、自滄はなか〳〵に羞慚をもて悃然たること半晌、許多なく答るやう、言を趣宣定に介へ、我一方の将として逆徒の虜に降逢りける。非徳を思へば今更ながら死ざるを恐と歎きのを、命運の致す所、左にも右にも計れよ、とのみにて嗟嘆に堪ざりけり。当下又ぶ文吾兵衛士卒に下知して寺僧に請へして轎子二挺を借合て、則是に自滄と滄久を扶乗せて、却良干を召てのたまはく、和殿その君臣二名をも今井の柵にゐて将て、士卒に宜く守らすべし。滄久は深痍あり。那里に至らば医師を招き痍を縫して、且療治を閑にすべくもぞ。這余の事は箇様々々と逓送もかく宣示すべし。良干都て承りて、果て遂御一挺の轎子を雑兵八名に舁せつゝ、且隊兵に守せて今井の柵へゆかしけり。然ても小文吾尚在寺の門前に在り。軈て役僧を召よせて、寺号を問へば役僧答て、当山は則禅宗にて、他生山一樹寺と名くといへり。小文吾ゆきて、なかなかの憑むべき一義あり。我は里見の防禦副使犬田小文吾悌順是なり。約莫今日の閙戦に敵は戦歿の者多くあり。自家にも傷損る者あれば、倶に是悼むべし。和僧その義を住持に伝へて、這地方の吏役に課て件の屍骸を当山に聚合て葬らするべし。その義は住持に面談すべく、且地方の村正を召よせて課すべき宛議なれども、大敵なほ在陣なれば去向をいそげば、さとて宜通達を備むのみ。且件の埋葬の諸雑費は異日の沙汰に在べし。その義もあらためいへ、とのみ。軈て現銀若干筆を濡て則諡文一通を写して取せて、卒と共に発児を教へて牽寄せる馬にうち乗れば、朝経伎故以下の従兵列を正して、斉々と去向は更に犬川を真で、赤朝良をも伐破らんとその程勇ざる者多かりける。詰合両頭はこの日大川荘へ入り、義任は五千の士卒を三隊に分て、尚五本松の陣に在り。既に朝日の昇る時候、一町許離れて

寄来るべき敵を待つ程に荘介は馬上より前面を東西と瞻仰て満呂重時を召てのたまふ。和殿はいまだ心づかざるや。去向の左右なる茂林は是一虚一実なり何とならば右の茂林の中へは飛鳥鳴く鳥の声喧かりしに左の茂林の中は鳥翔らず今熟視れば殺気あるに似たり。意ふに必是左の方の中に敵の伏兵あるならん然ば今日の開箭に寄隊佯て逃走らば。我みづから赶敵とて和殿は逃る敵に拘らず右の茂林を衝れかし。必獲あるべけれと諭せば重時ある感して。隊兵八九百を引纏て。胡意左に隊へけり。尓程に寄隊の総大将扇谷朝良は。その副将千葉自胤に墨田河なる敵を蹴拂せんとて一萬餘騎を分ち授けて約ありしに然らでもみだりに兵を日夜が是終の軍議に時移りて既に巳牌になりしかば。朝良心焦燥て。吃るが如く里見の隊に千葉孝胤加勢して。この地の民さへ我に叛きぬ。事の難義に及ぶべし。敵に加勢の附ぬ間に疾く犬士を擒へと先鋒の頭人入間九郎佑啓と松山九六郎時永並に萬戸月十字七郎に下知して諸隊を抜めけり。

佑而佑啓時永約束の如く五本松に推寄て。箭丸を飛し敵を乱して鎗を入れんと欲するに。犬川が先鋒の頭人満呂再太郎安西就介は少年なれども噪がず慌ず倶に義任の教を守りて隊兵を励まし進退賢しく閉ては開き開けば閉る諸葛が八陣鞍馬の八流さながらどもならざる如く。其機に称ふのみならず老兵勇士是を帮助て連りに挑戦ひしが寄隊は猶も誘引んとて隊重が謀りし随に故意と敗れて逃走れば信重東へ引かへす。荘介も亦推續きて。諸勢奔一蒐立々々。那里までもと赶ゆきける。登時満呂重時は走る寄隊を目も遣らず九百の士卒を一度に興して吶と喊て左の茂林へ二三十一の稠入々連放つ鉄砲の透間もあらせず駈立れば目今顕れ出んとある寄隊の伏兵不意を衝れまくるなる什麼とばかりに驚き騒ぎ乱れ走りて敢戦ふ擬勢なく或は敵の火鉄に斃れ仆され或は樹根に跪轍びて己が刀剣で身を傷る然ば伏兵の頭人なる宿尻城戸介建隆は己が名に負ふ不覚なく逃て大路に出しが里見の先鋒に撞見して前後の敵に中るに

由なくかく乱れて逃走るを復五郎重時ハ隊兵を駈て赶ふ程ふ寄隊の大将朝良ハ笑
川荘介が挑戦ふその後ふ出しけの介程ふ朝良憲重ハ謀りし伏兵合期せざれバ始ハ佯
りの敗北も竟ふ実の敗れふなりて既ふ危なりけるを憲重才ふ装直して敵を身づから突
伏せく這里を先途と戦ふ程ふ朝良も倶ふ手を盡して馬を東西ふ馳融し又南北ふ
走らせく近つく敵を射く仆す近習の弱輩有名の者倶ふ敵の前面ふ立塞りは
主を佐けて命を涯ふ戦へども敵ハ名高る犬士の一人文武兼備の防禦使ふ誰かよく
雄飛せん主客の勢ひ地を易て寄隊ハ防ぎ難く折から満呂復五郎重時ハ敵の伏兵を
赶蒐く樹間立潜ミ直推ふ件の茂林より捷径を走りて早く寄隊の陣の後の方ふ
出しかバ逃る伏兵を赶捨く九百有餘の隊兵をもて疲れし寄隊の背より挟合せて
攻うけるほどふも朝良憲重ハ士卒ヨタく落亡て颷過る秋の像く隊踈落ふ做りし
かバ朝良ハ辛くして一方を殺披りて両國河を投く逃走るを荘介ら猶脱さじとて。

満呂安西らを先ふ扮めく柱る敵を伐つ程ふ初逃たる寄隊の伏兵宿尻城戸
次建隆ハ其隊兵一千餘名と兵侶ふ此の時寄り来て返し来つ先度の恥を雪んと
や思ひけん憲重の隊ふ加りて枝せて倶ふ戦ひけり是ふ依りく気力を得る大石憲
重入间九郎松山五六萬戸月十字七等ハ倶ふ朝良を延さんとて猶残兵を擬して
奔一死力を竭しける其间ふ寄隊の大将五郎丸朝良ハ纔ふ従ふ近習八九名を騎
馬の左右ふ相立せく落て両國河原ふ来よけるふ甚る野心の者の所為ふや架たる
船橋ハ断流されて船一艘もあらざりしかバ朝良ハ近習と倶ふ為ん仟麽となりの
呆れて馬を駐めつ四下を遥ふ見つくれバ浅草河の方よりして二隊の軍兵出来たり。
是則別人ならず犬田が先鋒の両頭人旗持傔杖朝経と大樟村主俊故なり既ふ
小梅を退陣の中途ふて又這寄隊敗軍の風聲早く聞えしかバ落ゆく敵を漏さじ
と先く路を料りく今茲の河原へ遶りふ馬を走らするの其兵一千四五百許倶ふ前面を

とち見るに両國の河邊より主僕とおぼしき騎馬と歩立の武者八九名跡を求めてあすゝれバ彼ハ必敗軍の落武者に疑ひなし。好物なりと隊兵を找めて甘糟直に赶逼る。勢ひ究餓たる虎豹の兎に逢るに異ならねバ朝良主僕驚き免るべきにあらざれバ只戰歿と思ひ決めて馬を其方に推向て寄來る敵を待ほどに忽地東北の相距ること二三町許なる田中の茂林の裏よりして顕れ出る一隊の軍兵およそ一千五百許。其隊の將の騎馬の頭に颯と推建る旌に矢竹の花緑あるぞ北越片貝の軍代稲戸津衛由充と寫せし文字見えしかバ朝良主僕合笑て又活たる如く歓びの心ぞ倶に勇みける。然バ朝經も亦俊故も遥にその旌旗の文字を讀なして他ハ是隊眷く犬川大田の恩人也。遽甚今ハしも我私の遭遇際なる君の爲なれ這閑戰に由充もさこそ饒さんや。兵毎找めと競ふて蒐れバ由充が先鋒の頭人妻有復六荻野井三郎倶に隊兵を相找めて刃尖より火出るまで入乱れてぞ戰ひける。登時

稲戸由充ハ馬上に聲高やかに立て猶よや扇谷の人々にもの申さん在下果よしあれバ權且這頭に退陣ぞ。風寒の疾病を養ひ不果そ危窮の御役に違ひ候をも辰巳の河邊まで船ありん。今這敵が咱們に任して疾御曹司朝良をバ倶しまゐり深川の海畔へ赴きて船を求めて渡させ給へと叫れども朝良ハ今更に捨ていく事ハさまざまにいふぐれバせん兵毎續けと馬を找めて由充の陣中に馳入りて力を勠して其閑戰をも資助けり。浩処に滿呂復五郎重時ハ大石憲重以下の敵に戰ひ既に克しかバ又朝良を追伐んとそ隊兵九百を從へて尋ねて来の邊に來ヌワに折ら朝經俊故が隊兵を率て稲戸津衛由充と閑戰正に闌なるを遥に見て左右なく找まで馬を間道へ乘走らせて由充の陣の後より矢丸を飛して轂を乱き破竹の勢ひ急なりけれバ北兵是に驚き慌て後を防げバ前より攻られ前に中らんバ後より破られて前後の敵に度を喪ひてヨヌくハ河へ追墜されて或ハ疾に負ひ命を殞ぎ乱軍の中に身を躱して逃去りしも亦尠からねバ由充憮然と嗟嘆して

一歩(いつぶ)を譲(ゆづ)りて小文吾(こぶんご)
舊恩(きうおん)を復(ふく)す

我始より這敗軍を思ざるにあらざれバ。今陣歿ハ覚期の上也。然バとて死なんとせしを我偶
あり君に倶して参らず。竟に極公果されし異日我大刀自御前のさても歎を見るめ疾なる処分を
退て津を求るにあくともと思ふ心を如此なりと朝良に告げ惴るを諫めて目今妻
有復六と荻野井三郎が残兵をあつめて立直して敵を防ぎて戦ふ程に由充も心ならずも朝
良に倶して只この二騎のミ河原を添ひて寝くも津を尋て落てゆく其路いまだ纔なるに
東のかたより忽焉と又赶来ぬる一隊の敵あり是則別入なる大田小文五吾悌順ハ雄兵劣
千二三百名の士卒に先だち馬を走せて近づく随に聲高く那里なるハ寄隊の大将朝良御
曹司ぞや。なからむ。我ハ里見の防禦使犬田小文五吾金碗悌順なり正なくも敵に背を
みせ給ふな。主僕疲れし馬に任せて那里へとて逃落ゆく前方の路を見る者を返して勝負を決
あれと喚りく赶来ぬれバ叱嗟とばかりに驚き見かへる朝良と共侶に稲戸津衛由充ハ馬ひ
佐轔哩と乗旋らして逆に小文五吾に向ひてけふも絶て久しき大田生なれとも知るや我ハ是北

越の由充なり。我今和殿と敵に取りて這里にて戦歿せんハ素より望む所なれども争何せん。
偶再度の危窮を援て倶しあそびし這御曹司朝良ハ我旧服大刀自御前の外孫なるに
人をもあれ和殿の為に我身と倶に蜻蛉の命空しくならバ我旧恩ハ倒まに今日の仇に做るのミ是
豈自他の本意ならんや。和殿那義を忘れずハ今日一歩を讓らずもあれと請ふを小文五吾うち咲て
馬を駐めて答るやう开ハいふまでもあらずぞ。往日大川荘介ハ報恩三舎を避しと咲ぬ我
義し所ハあなたの便宜をもてさらに仇なく恩を報んや。是裏に必死の厄を恩ハ今我防禦使の
大任ハ那再生の恵に在り。則和殿の賜ならずあれども今日の闘戦ハ寡君の大事に与れり。
我私の恩義をもて何で敵の大将を赶ひて伐ざらん。已ことを得ざるはいでく。と告つゝも服に残る
矢二條の箭を合りやとさに刺て能弯固めて瞟と射る矢局錯ず由充の乗る馬ハ
脚を射られて嘶とともに撲と伏し主ハ勿と下立る程もあらせず又二の箭に朝良の馬ハ額を
射られて主共侶に轉輾ハ由充驚て立よりて扶けてぞと被起せバ幸にして恙もあ

らば朝良は且羞て疼痛を忍びつゝ立ながら當下犬田小文吾は従ふ隊兵を見かへりて我
馬疲労れぬ箭も亦盡たり且窮寇は逐べからず彼等一霎時憩せよといふ詞いまだ訖
らぬに忽地後方に騎馬武者あり是則別人ならず満呂復五郎重時は當下重時
聲高やかに答るやう犬田主犬田主和君は今慾に那舊恩に羈されて主に用捨の心あり
とも咱們に任しね代りて赶ん去向路る江畔まで近よせ入る敵の敗将を見捨ていかにせん
あらんや昔は昔今は今恩も情も時にこそ依らめ我生拘るを見よと唱ながら後れし隊兵。
聚ふを遅しと馬に拍れて甚奮直に赶蒐れば小文吾は吐嗟とばかりに喚禁れども听ざりけり然
あれ時重時は既に北兵们に戦ひ見て猶朝良を赶んとて則あるに逸早く其隊兵をおて目今
已に来るとを知て犬田が意衷を猜せしにや代りて朝良を追ふたりける程に稲戸由充も
犬田が仁義に再生して朝良を扶掖つゝ遁ることはるかに遠からず亦復一隊の敵兵が我を
追蒐来ぬるあり房総防御の使後陣の隊長満呂復五郎重時あなに在り返せ／＼と
喚りさる其兵約莫八九百名陸続として赶逼る勢ひ猛く見えしかば朝良と由充は
目を注せつゝ嗟嘆して稍龍尾を免れ来て亦這虎腮に逢ふ今はなにも是までなり大刀の
刃のあらん限り敵を殺して戦死せんのみ外なし及ばずと相奨して立逆へんと身を構る折
から這江の処々に繋あり立せる枯葦盧の中よりして快船一艘忽焉と漕出し来て水際に
寄せつゝ其船篙師が喚るやう喃御曹司に御坐ますや御伴當の共侶に疾あの船に乗
らせ給へ敵近つきたりいそぎ給へ疾々といそがすを朝良と由充は有あへず急に見かへりて鄙語に
渡津に船の浜ひに堪ざれば敢一句一言の問答に遑あらで身を跳らせ件の
船に乗従れば篙師棹を取直して遠く澳へ漕出す程しもあらせず重時は衆卒に先
だちて馬を馳て赶来つ既に水際に届る時那船は漕離れて及ぶべくもあらざれば續く
隊兵を見かへりて那見よ敵脱れたれども我隊より人魚の膏油を多く身に塗たれば那江を
泅ぎて赶とも敢凍ず溺ることなし料るに敵は篙師と共に才に三人のみ波を潜りて

那船を敵めく那奴们を虜にせんぞとくといひつゝも馬より閃りと下立て鎧の袖と帛腿を解
捨んとく惴る程に又見る這江の頭なる処々の枯芦蘆の中よりして突然と漕出せし戰
艦十艘許其艦毎に操申せる武者三四十名乗れバ都て三四百個の軍兵あり其艦に
建たる旗ハ遮瀾の板より敏く波に晃く鎗鋒眉尖刀ハ刺昇る月の影に似たり然バ
件の艦なる士卒们ハ皆朝良由充の乗たる快船の前後左右をとり囲も造化精妙
と其々めきて西を投て漕去りける。此時日ハ没果て朧々と見えざる澳を長視ば
重時ハ且呆れ且迭恨に得堪ず敵に援の軍兵ありとハ我身単波と凌ぎて赶競ぬと
くも甲斐なき己なる哉と呟く折から犬田小文吾悌順ハ又稲戸由充の安危甚麼
と胸休らねバ猶重時を諭さんとて隊兵をひきて赶々来にけり當下重時ハ小文吾に
報るやう在下剛才朝良に赶近つくと奈ける折始ハ箇様々々の快船あり朝良と由
充をうち載てまくも澳へ出せしが江を泅ぎて其船を曳縫さまく欲ありしに又十箇の
戰艦あり其艦毎に援の軍兵都て三四百名なるべし朝良命運かくの如くヨヌく
援兵をおくけるに我身に人魚の奇葉ありとも隊兵们ハ然る准備なし身単ぞなり
甲斐あらじと思ひくへして只悲と告るを小文吾うち咲て开ハ遺憾しかるべけれど大事に
莅て大功あるも七八分なるを好とす我毎今日の鬩戰に則寄隊の副将たる千葉
自胤を虜にせるに又朝良を擊ず捕らバ开ハ十二分といひつべし物盈る時ハ必溢ぞ。
功ヨヌけれバ禍なきことをいふぞ我ハ那由充に報恩を思ふ故に遂に朝良を擊ず漏せしぞ。
きゝつゝ君に仕へて忠なるぬ武夫あるにあるぞ非如赶ひて那主僕を擊ず果ども虜に做ども
恩に叛く人にあらず。況や我両館ハ其御紛ひ大小とるく都て仁義にあらざるこそ奈し。
然るを今数に不義の功を功として愛く誉らせあらんや。雛に義兄弟義任ぞ那恩
人に撞見して旗の緒を射けるも心ハ同じ。我ハ馬を射て人を射ず倶に是私なき一
箭ハ猶巳に勝れり。此義を思ひあへぬや。と諭せバ重時感服して及ぶべからずと稱へたり。

然れバ是より後々まで大川犬田が報恩の椿事を傳て美談とせざるなし。中に識者或ハ評すらく。那時荘介小文吾が倶に舊恩舊義の為に由充を射て殺さゞりしハ。昔唐山姫周の時衛の庾公之斯が。鄭の子濯孺子を射ざりし事と。又江尹商陽と陳弃疾が。呉師を追ひし事に似たり。且庾公之斯ハ師恩の為に輪を扣て金を去りて空箭を発ちて。子濯孺子を射ざりき。孟子離婁の下に見えたり。又荘介が鏃を抜棄て。由充の旗緒を射ける心操と相同じ。又工尹商陽ハ只呉の雑兵三人を射て斃して敢呉の将を射ざりき。礼記檀弓の下に出たり。又小文吾が由充と朝良の馬を射て斃して。人を傷らざりしと相似て倶に礼あり。且義に依る所和漢今昔君子の行ひ正に符節を合する如く。一揆と云べけれ。閑話休題却説犬田小文吾ハ。為夕満呂重時と其隊兵を皆相従へて。朝経俊故が北兵に戦ひ。京師両国河原に於て来る程に。既にして朝経俊故ハ。北兵を皆殺散し。且逃るを釺しまで

河原に至て。舟火を焼せて皆共侶に出て。小文吾を迎へけり。登時小文吾ハ件の両頭人の戦功を誉て。且朝良由充ハ援の兵船多く出来て。載て漕去りし事の趣を告しかバ。朝経俊故隊兵まで。憶も倶に嗟嘆して。由充を逸せし朝良を漏せしハ。恨るべきにあらねども。重時が倦々と犬田の意あるを告るに及びて。大家感服せざりけり。然どもこの時自家の與に。軍師犬阪毛野胤智が謀計る所ありしを。小文吾ハ知らねば。重時朝経俊故も是を悟る者なかりけり。其弁を甚麼ぞと原るに。始洲崎の陣営にて。毛野が竊地に思ふやう。行徳口へ寄隊の大将扇谷朝良千葉自胤に相従ふ。加勢の隊長ヨヲ方中に。大川犬田の恩人なる稲戸津衛由充も亦あれども。俗に由充倘朝良撲ハ。自胤の隊に附られて戦ひ利あらで。共侶に敗績に及ぶとも。大川犬田ハ恩義の與に由充を逸し落さんとせん。又朝良自胤さへ軟を漏せる事あらじ。其逆寄思ひなせりしかバ。則東峰崩三と鄭船

貝六郎に計策を授けて且雄兵三百餘名をもて倶に悄地に市河なる犬江屋
依介許遣して件の謀計を行せしむ貝六萠三と貝六は則依介に件の機密を
備示して倶にその事を料る程に既にして十二月六七日の時候に逮りて依介は
同宿なる舵工等と倶に隊を隠し置たる快船浅艦十艘有餘を出し來る是に
貝六萠三と隊兵三百餘名を分ち載て悄地に深川の畔に至るに倶に枯蘆の
中に躱れて居り开が中に依介は單ら衆のなる快船より出て當晩七日より敵躬
方の闘戦の光景を覘ひしに果して八日に至りて寄隊敗軍に及びしかバ其頭を
退きて走りて両國河原におりて見るにおに架する舫橋を守る扇谷の雜兵を自
家の敗軍を傳聞けん逃て一人もあらず徴りしかバ依介これの便宜を得て艙く件の
舫橋を斷流し又斷棄て遠首に舫一艘もあらずなし夙く深川（今は分かれと唱ふ所の深川と同名なり。）に
かへり來て復枯蘆の中に居りて俵而その日朝良と由充が満呂重時に酬く赴

まく深川に津を欲りする時依介先快船を寄せて件の主僕をうち載せしに
重時は依介を認らざ俵而其船澳に至る時貝六萠三が戰艦又枯蘆の中
より漕出て倶に朝良と由充をうち守りて杉く去りしにその時黄昏なりけれバ
重時は其戰艦に東峰轄船等が在るを認りて又満呂と大田と隊兵等まで
その義を暁りざりしのミなら由充も亦朝良もその日は曛昏より天結陰りて八
日の新月影でんえざ波上を暗くて投方安定ならざれバ只是棧兵の艦なりけりと
思ふのミ其詰朝迄諸船の安房の洲崎に果るまで身は是虜にせられて
毫も知る由なかりけり俵てそ荘介と小文吾の報恩の義を果させて敢其情状
傷ることなく反くるに別人をもて寄隊の大將を虜にあり北兵加勢の頭人なる
由充さへに迎執りしハ軍師智玉の遠謀より出て勝ことを千里の外に決するの段
あるにあらざれハ誰か其機に先だちて這奇を呈する者あらん看官さへに欺まるく

なるに至りて愕然と覚えて巻を掩ふもあるべし。休題却説大川荘介ハその日大石
憲重が朝良を易く延さんとて死力を竭して戰ひを敢又物ともせざる満呂
再太郎安西就介その他勇士猛卒をもて息をも継せず攻る程に初進なる
寄隊の頭人宿尻城戸介萬戸月十字七入間九郎粂山五六並に憲重が
一二の家臣菅菰三布七関口小田八岸藻雑西郎なんど喚叫き兵を返し
合せ相拄えて一霎時ハ挑戦ふものゝ心後れし癖あれバ終にハ亦復伐破ら
れて或ハ戰れて命を殞し或ハ逃亡て恥を見るものから既にして憲重ハ千騎が
一騎になるまでも屡士卒を罵励して馬上に鎗を打振り近づく敵を突伏
せて大奮然たる老武者の本事に中る者あらざりしを荘介遥に是を見て愀ぞ馬を
馳よせて憲重と鎗を交へて一上一下と術を盡せし大士自得の刃尖に憲重
竟に争ひかねて鎗を裊哩と反飛されて大刀を抜んとせし程に荘介透さず
鎗をとりて斤頬を托地と捷しかバ憲重ハ横さまに馬より撞と打墜されて一霎
時ハ起もあがらず。安西就介満呂再太郎倶に遥に是を見て飛が如くに走り
来つ折累りて隼々と壓えて索を被ける。憲重虜に做りしかバ残兵を皆
逃亡て中も鬧戰果にけり。恁而大川荘介ハ五本松なる陣営に退きて則犬田
が勝軍あるかへり来ぬるを待んとて方儻其報あれバなり有悖し程に満呂再太
郎安西就介ハ郷向に虜にしたる大石憲重を大床の下に牽めて来つ大川荘介に
実検を請ひしかバ荘介則諸士を将て出て発見に尻を掛て憲重を佗と見て
石州をなし汝ハ是鎌倉両管領の四家老の其第一老にて豊嶋大塚の城主たるに
年来其悪を佐けてもて君の非を正さまく要せず剣丁田町進卒川菴ハ籔
上社平簞木五倍二仁田山晋五なんど喚做しる奸虐の酷吏讒訴の倿人をのミ
親愛あるて賞罰其道に違へるを思ハざりしハ甚麼ぞや我髻嵗ころし時逆

荘介鎗とりて捷く旦憲童を生拘る

旅に母を喪ひて。その身の所由るよしゝかバ當時大塚の郷士なる大塚蟇六が小廝にせられて。年來他に仕る程に。東人夫婦の讒言讒を搆へて。恩義に報ひしに汝ハ敢是を賞せず。反て又那奸黨が忠義を賊情といひ做せる誣言を信容して我を罪するに死刑をもてし。又法場に牽れし折幸ひにして我義兄弟犬塚犬田犬飼の救ひによりて萬死を免れ且那寃家們を殺しつゝ今日に至れるも我倘里見殿に未生の夙因あらざりせバ。義兄弟等と共侶に今番の防禦使を奉らざれば言に汝に對面して舊怨を復さん日あらんや。夫一飯の恵も必報ひ睚眦の怨みも必報ふハ志士の辨せざる所にして勇者の本意とする所なれども我君里見殿ハ仁君にしますをもて。郷高に犬田小文吾が妙見嶋の柵を抜し時汝の家臣彦別夜叉五と其隊兵百十數名を生擒りて敢一人も殺さずして船に載せて流し遣りたまひけれバ今我も亦然しも汝を憎しとて首を刎るに忍んや異日安房へ凱旋の日に命乞して得させべし。然でも陳ずべき旨ありや。と問譴らるゝ。蟇六ハ羞て答るよしもなく頭を低て跪居たるを屢問れてやゝ久くにやう〳〵。栄枯寵辱地を易て。身ハ囚に做りし今はかに何事をか陳ぶべき。実に昨の非を知るに足れり。後悔の外なけれど幸ひにして首を續れなば。永く徳澤を仰ぐべし。と謝するを荘介らが聞て。満呂再太郎に向ひていはく。汝ハ隊兵一百名を将て。這生口大石寃重を今井の柵へ牽もて行て。權且那里へ補錮措くべし。路次にて日の暮れなば。ヨヌく蕉火を准備せよ。その餘のことハ箇樣々々と言詳に吩咐れバ信重則寃重を推立せて退けて。軈て隊兵一百名を将ち守らせて路次といそぎて今井の柵へ赴きけり。恁而當晩四鼓の比及に犬田小文吾ハ満呂重時。看持朝經。大樟俊故等二三四隊の士卒を相従へて。五本松の陣営にかへり来にけれバ荘介あれを労ふて勝軍の事の趣を諮問

条小文吾則小梅の戦ひに自胤を虜にして今井の柵へ遣せしかバ並に沼谷柿八們を誅戮せし顛末を告て又いふやう爾後又朝経僕故が両国河原にて朝良主僕を追伐し時稲戸由充の援兵あり姑且勝負あらざりしに由充も亦重時等に後よりして攻破られて那身ハ主僕僅に二人深川の方へ脱去て折我又是を追蒐けしに其両個の敵一人ハ恩人由充なるをもて胡意一歩の路を譲りて那舊恩に報ひしに他又入江の邊にて満呂復五郎が一隊の兵に赶逼られまく免るべくもあらざりしに折から他に水軍の援兵あり其艦十艘雄兵六七四百名許始に漕よせし一箇の快船に朝良と由充をうち載まゐらせて守りて漕去りぬと一五一十を解示せバ壮夫も亦那水軍ハ自家の士卒なるを悟らぬ咄て也駭嘆して原来敵に援兵ありて朝良を捕失ざりしハ遺憾なれども并も亦稲戸由充に報恩の為第一義あて我

あまるぞ和殿まで徳に報ず来徳をもてする。志を果せしハ実に迭の歓びハ非如朝良を漏しぬとも寄隊の副将自胤を和殿の隊に獲られしハ第一番の軍功なるべし。這里にも亦闘戦の顛末ハ箇様々々如此々々とて今朝憲重の伏兵を重時等て伐破らせ。事の始より荘役が一隊をもて朝良を攻伐走らせて竟に大石憲重を虜にせける事の終まで遺もなく報知すれバ小文吾深く感嘆して本意なるぞと称ける。恁而当晩ハ陣門に篝火を焼明し。猶且自家の刀瘡児を勦りて。其療治まで閑なきを既にして天の明しかバ荘役小文吾ハ隨即地方の村正と故老等を召て昨日の邊と両国河原まで戦死なる自家の士卒及敵の亡骸を執集めて其四下なる寺院に埋葬べき旨を課するに皆なる退りて時を移さず猛可に其諸邑なる荘客を聚合下知を伝て。よく其事を致しける有恁し程に北兵先鋒の両頭人妻有復六荻野井三郎ハ昨日両国河原の闘戦に北兵竟に敗績しつ。那

身は倶に痍を負しかバ。なかなか敵の頭人に組て刺んと思ふものから。胡意倒れて撃れし者の屍骸に交りて俯て在り。既にして稲戸由充は。朝良と共に僅に二騎。辛く命を免れて。深川のかたへ落亡せり。士卒は殺れ或は逃去りて。敵皆退陣ありて其本意を得遂ざりし故に復六と三郎は倶に悄地に身を起して。當晩深川に赴きつ。由充の從者力を攪るに他は水軍の援兵有て朝良と共侶に載して漕去りきと云ふ。其頭の民の噂するを聞て。心安しとおもふものから。次の日悄地に津を求めて倶に武藏へ赴きけり。その他始より朝良に從ひし那隊の頭人入間九郎松山五六ら陣殺の聞えあり。又宿尻城戸衆萬戸月十字七及朝良の近習某甲某乙らは皆残兵と倶に逃亡て。脱棄たる甲冑。鞁遣しける大刀鎗のみ多くて殺れし屍骸あれ稀なり。況里見の士卒の殺れしは什が一也。刀瘡児も亦多からず。是里見の君の残に克殺を去まく欲りしあなる後徳の致す所なるべしと心ある人はいひけり。介程に。

這葛飾の民毎は各々簞食壺醤をもて。五本松なる陣営に来賀せざるはなし。そが中に行徳塩濱。並に鄰里近郷の民までも倶に小文吾の故郷児と相唱へて。なかなく鐏を齎し魚菜を捧げて倶に[illegible]川を渉し来つ。其功を稱へ徳を仰ぎて。敬賀する者甚多かり。始小文吾荘介が。塩濱に在陣せし時。犬田と相識る者といへども。寄隊大軍の聞えあるものから。其成敗を料り難て。詣来るは稀なりしに。今全勝の勢を見て。蟻児の甘に就に似たり。一貴一賤。交情を見る。孤獨与福勢同じからず。小文吾は是を見て嗟嘆するのミ。敢受けず。其巳とゆるさるもの東西を取せて。還しけり。畢竟犬川犬田両防禦使の。全勝の戰功は既になほ具にあり。又洲崎國府臺水陸二个所の鬪戰に自他の勝負甚麼ぞや。其は漸次に後々の回まで解分るを聴ねかし。

作者云約這水陸二个所の鬪戰の勝敗結果は皆是十二月初の八日也。

同日の事也。然ども今詳に是を編次るに及びて、二所を駁雑して綴るべくもあらざれバ、その初に行徳口なる二犬の戰功を具にし、畢て次に國府臺又其次に洲崎の水戰を具にす。一戰終て又一戰始るにあらず。倶に是同日の事なるを、看官宜く照見るべし。蓋この水陸大兵大戰の一擧ハ、予が腹稿二十餘年の今に至りて、一事も遺れ漏すとなし。然るを人或ハいまだ結局大團圓まで閲せざりしに、第四輯に約束ある事を予が遺れて漏せり。歛そ遂に人傳そのく其書を作者にうらせまく欲るく驚しくそるど、ゆるてへ無礼なるぞや。其言忠告に似たりといへども、予何ぞ驚駕ん。非除予が春憩壽ありもいまだ老ざるに至らざる前に約束ある事をいかにして忘るべき。鄙語に云、細大流々落成を見て漏あるなくバその時にいふべし。其折鑄りべし。

南總里見八犬傳第九輯巻之二十七終

# 南總里見八犬傳第九輯巻之二十八

東都　曲亭主人編次

## 第百六十五回　一扇を挾て現八橋梁を斷り　火猪を放て信乃戰車を燒く

却説この時下總なる國府臺の城に敵を俟り両個の防禦使犬塚信乃戍孝・犬飼現八信道ハ、東六郎辰相・杉倉武者助直元・田税力助逸友等と共侶に義通御曹司に倶しまつりて十二月二日の未下刻臺の城に來ぬる程に、上總下總の路次にあて郷士郷民の催促に後れしが漸次に附從ふ者あてかも亦尠からねバ、初ハ九千餘名なりし軍兵に加えて一萬二三千ゆぞなりける。恁而這國府臺なる守城の頭人真間井樅二郎秋季・継橋綿四郎喬梁と喚做る者、その朝より士卒を領て城を出て義通君を迎まつれバ、義通則二犬士並に辰相・直元・逸友等と士卒を

ねく城に入て。秋季春高梁に仰する義あり。當城の軍兵四百餘名あれバそが侭
その両頭人の隊に附て城の衛に備らる。當晩ハ人馬の疲労を憩へて次の日
軍議を定めらるべし。義通ハ只出席あるのミ。尚髫歳なれバとて辰相萬事に
後見なり。二犬士並に直元逸友秋季喬高梁なの餘も従軍の老兵ハ勇士席
末に侍る者なりける。登時東辰相ハ二犬士に向ひて小ごゑ唱ふ。昨日あの地に来
ぬる程に先間諜見をもて。敵の動静を揣らせしにあの地に寄隊の大将ハ山内
顕定主と足利成氏主にして。副将ハ顕定の嫡子上杉五郎憲房是なり。相
従ふ四家老の旗頭長尾判官景春白石城介重勝斎我の老黨横堀
史在村新織帆大夫素行們救舉るに遑あらず。そが中に景春いまだ来會
せざれども諸隊の軍兵三萬餘騎日ならず五十子の城より隊分して當城を
攻伐んとすと云風聲既に聞えたり。意ふに這国府臺の一城ハ是昆棊河を帯に



あらく要害堅固なるのミから。始より地を縮めて籠城して敵を待べくもあら
ず然ハ昆棊河を前にして。敵の渉を央を撃んや。或ハ河をうち渉りて。敵所に
因て防んや。その議什麼と諮まれバ二犬士听て倶にいふやう。下同寔にその所
以あり。約大河を前にして。敵を防ぐ戦へバ其利あるに似たれども治承の頼政元
暦の義仲。又兼久の官軍に至るまで宇治の大河を前にして橋を断ち流を
負て。一霎時こそ戦ひしかれ寄隊河を渉るに及びて。攻破られざるハ者なし。
今這地の昆棊河ハ世の人阪東太郎と稱て。宇治河に優る急流なれども今ハ
冬の盡にて水涸たれバ淺瑞あらん。這回も倘亦寄隊の陣に高綱（佐々木四郎）・忠綱
（田原又太郎）に相似たる勇士あらバ必渉さん。他既に犀象の波を披きて岸に就く勢ひを
以て我に中らバ誰か克防ぐべき。といへバ現八も倶にいふやう。約這葛飾の一郡ハ當
家自得の新領なるに定正主横領して千葉自胤に隷せしめ給ひたれバ矢

斫河をうち渉して我をと葛西に寄隊を待つとも敢て敵地を犯まふまじ。勿論宿老辰相ハ
御曹司に従ひまつりて當城を守りもべくも我们両個ハ防禦使なれバ明日ハ風もそ河を
渉まて我をく敵を防ぐべくやと議するをうち聞て直元逸友秋季も呑同く皆この議を
可と称く倶に辰相に薦めくのまう両防禦使の意見まさに其理あり我们先鋒を
まく欲まれく仰付られと請へバ辰相點頭て目今二天の議まる所畢竟意も亦相同じ。
則雄兵五千をあて二天士の隊に隷ん杉倉田税両頭人ハ二天士に従ふて倶に一陣ふ
我むべし。又直間井継橋両生ハ素より守城の頭人なれバ姑且御曹司に従ひまつりて
後の加勢ふるべしと云衆議既に定まりしを義通君うち聴て防禦使河をうち渉して
前岸に敵を待ときハ我も亦雄を我めて倶に後陣に備ん。我身幼少なれバとて犬江
親兵衛ハ年兄なるに這地の總大将であるから敵の旗をども見るとろく徒河
容々々と這一城に竜り在んハ本意ならずと慫ぎる如く宣へバ辰相ハ何とだろうに。



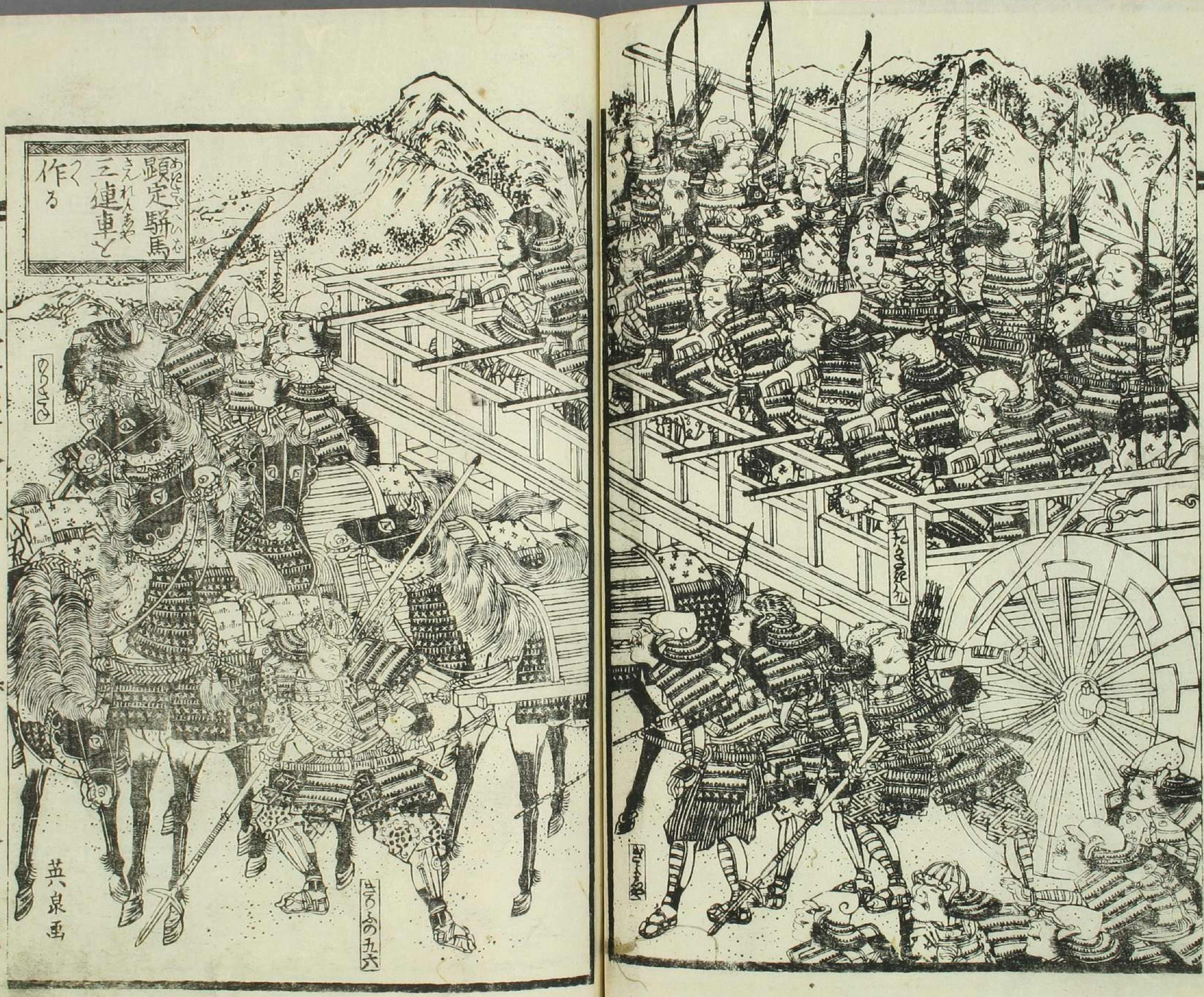
答難て遽しく。信乃と現八を見かへて二の彼什麼と意見を問ふに二天士も亦容
易に議せず。沈吟じて信乃が云う恐れながら御曹司ハ尚総角まて御坐ませども御
父祖に劣り給ざりける智勇の御本性自然に知らて目今の御諚畏りも感服仕り
ハ然後ハいへども寄隊ハいまだ當所に到らず然るを倉卒く城を離れ河を渉して
我をく敵を逆へうつハ夙り陥べくやハいむと云に現八も膝を我めて咸孝が言ハ義ハ愚
意も亦異なるぞ臣等も先前岸に敵を待て寄隊の来るが中一中て其強弱を先
試ハいん寄隊の勢ひ剛くまて閑戦難義にいたらば其折にこそ御出陣を請まるべくは
あれとのに辰相點頭て義通に稟まう御出陣のるハしも御諚理にまうしませども。
約軍陣の進退ハ隊館の御下知あの事皆大氏に儘せよと定させ給ひしかバ権且
御意を枉られく那議に就せ給へと詞穏しく諌れば義通ハ得信容まずして前
議に従ひ給ひしが大家其温順寛裕を称て欽ざるハなかりけり。介程に其の地へ寄

隊の両大将鎌倉の管領山内顕定前関東管領足利成氏并に副将上杉
五郎憲房は相従ふ其隊の偏将白石城介重勝斎藤兵衛太郎盛実〔高実の冡男〕
横堀史在村们と倶に二万五六千の軍兵を将て十二月五日の早旦に五十子の城を
うち出て水路を千住河に溯りて下総国葛飾郡飛蛾の頭に造りて陣する程に
這水陸の路次にして其地々の野武士兇民の勇ありて名を好む者或は迹を慕
ひ来つ或は去向に立迎へて皆顕定の隊に属しつ甲乙士卒四万に餘れる勢ひ弥
振然たり恁而山内兵部大輔顕定は這日先間諜見を箭斫河の上に遣して国
府臺の城の虚実を捌らするに敵の大将里見義通は東辰相後見して国府臺
篭城あり従ふ兵四五千なるべし。その他の防禦使犬塚信乃犬飼現八杉倉直元
田税逸友们と倶に箭斫河をうち渉して五十四田の邊に陣したり是も亦其隊の兵
五六千なるべしといふ事紛れもなく聞えしかば顕定随即成氏を請招して重勝盛実在
村们を召集へて敵の動静を箇様々々と具に告て且いふ。噫思ふにも似ざりける。
這地の敵は小勢也。他們偏一致して要害に據り敵所を断塞ぎ倶に篭城して
我を防がば日に損傷ありといふとも猶半月は挂ふべし。然るを何ぞや今一万の小兵を
分ちて河を渉して我を防ぐは蟷螂の車を避けず夏虫の火に入るに似たり我大兵一
たび攄まば一挙して伐破らん事石をもて卵を推すよりも易かるべし。介はあれども嘗
聞く那二犬士等は奸雄にて且智術ある者なり然れば必その利害を知らずして漫に河を
うち渉して水を背にして我を待んや必詐る所あらん那韓信が嚢沙の術も亦思は
ざりあるべからず其故に我逆より製作したる必勝の戎具あり正に今是をもて連ねて他を
破るべし我嘗唐山古昔の軍旅を思ふに周末戦国の時までも皆是車戦を宗と
せざるなく軍と云陣と云其字車に従ふ者は然るを秦漢より以後は敢亦戦
車を用ひず但三国の時諸葛亮孔明が四輪車に乗りしは古風に則るに似たれ

ども用意戦車と同じからず我大日本ハ神代より軍陣に車を用ひず是を知る者なしあるといへども今も那法則を推考て戦車を作りて敵に中らバ非如堅陣鐵壁なりとも破れざることあるべしと思ひにければ豫より匠に課て戦車を造らせ悄々地に士卒に教て調煉已に事成りし折憶ぞ當陣に臨むに及べバ我鎌倉を出る折齋藤高実に吩咐て件の車数百乗を筏に組せ海に浮めて科草浦に在せしが今朝我公に推續なく漕せて當所に執寄る是見るべしと誇貌に説示して画図披取出てやがて席上にうち開けバ成氏在村素わかち濟我の君臣ハ殊更に耳新れ心地して膝の找むを覚えずまでに齊一其画図を見るに車ハ高三四尺也俗に云天八車に似たるを三輛相連ねて一車と為し井が上に勾欄あり是に相乗れる武者一十二名其六人ハ前に在り六名ハ則後に立て是中央ハ弓をもて左右ハ則銃をもて。馬六疋をもてこれを行しむ車の左右に両個の御者あり鎗を挾え鞭を執れる人ハ



なるに馬も皆薄鐵の面罩馬鎧を透間もなく身に擐ける用心怠らざれバ成氏并に在村等ハ奇也々々と稱讃し當下顕定便面をもて畫圖を指示していふやう唐山にてハ今も昔も馬に車を架て牽すれども皇國なる牛車のごとく昔より馬を要せず然れどもよく習はすれバ我邦の馬とても車を牽ざることやあらん譬バ北狄の狗児ハよく雪舟を牽くが如し習ひの性になるものなり且馬ハ奔走神速にて軍陣至用の物なるに我馬ハ皆車を牽くに熟するを這回よく牽せらると解れて成氏感じて已まず史什麼と見つれバ在村も倶に感服して現未曽有なる御工夫の名を何と呼びはやと問へバ顕定含笑て然バとよ我這戦車を肇て造り果せし折命けて騎馬三連車とそ則是馬を騎せ車を連ねて要を成を其識をもて名づけるのと因て我又意に葛西假名町新驛の間なる或ハ左右に樹粒敵あく或ハ左右に水田ある路一條にして衝坦ならぬ是我騎馬三連車を用ゆるに究竟の地方



顕定駢馬三連車を作る
英泉画

なるべし。明日は那里へ推出て那二犬氏们を鏖にせん。先隊配を做すべしとて、白石重勝を先陣として、錐布五六郎・鷹裂八九郎を其隊の副とし、成氏則後陣にて、滸我式尭・黨横堀在村・新織素行・近臣科革七郎・望見一郎等、是に従ふ。總大將顕定・副將憲房は一萬五千の士卒を將て、其中央に在り。又斎藤盛実を騎馬・三連車の總轄として、調煉熟得の雄兵二千五百餘騎を將て、進退宜く機に臨みて敵を鏖破れとて、下知をなしける。總軍約莫四萬餘名、十二月六日の早旦に飛蝶より推出して、新驛・假名町の間なる曠野に造りて陣しける。人は勇み馬は嘶く、兜の星は晃めきて、暁残る霜に赫奕し、氷做る刀劍は毛骨竦然、寒風に殺氣中天を掩ふめる威勢、破竹に異ならず。秦主八十餘萬の大兵、長く駈り江を渡して東晋を呑まく欲する那時も似るべし。爾程に五十四田の陣に敵を待つ犬塚信乃戍孝・犬飼現八信道は、夙く斥候の注進に因て、寄隊の大將顕定・成氏は、總軍四萬の大兵を將て、昨日飛蝶に着陣なるよし、今朝は假名町の邊まで推出しぬるべしよし。既に其告ありしかば、信乃は道節・現八と商量して、且直元・逸友等の諸頭人にその義を示しつゝ、信乃がいふやう、寄隊四萬五六千の大兵に、自家の士卒を比すれば、僅に是什が一也。奇ならずして是を破らずは、全勝を得がたかるべし。あなれども王者の軍は敢奇偶を做すとなし。仁人君子の敵に遇へるも、隠地なきのみ。是我君の御本意なり。左すれ右すれ、中一中、敵の剛柔巧拙を試ん。僥勝がたくば退きて計るとも遲きにあらじ。我聞ぬ新驛・假名町の間なる左右に水田あり、林原あり、路一條にて廣からねば、大軍列進退は必不便なるべし。寄隊其里に推出て我を誘引まく欲するは、情地に計る所あらん。非如閑戰勝に乗るとも漫に功を貪りて、必逃るを赶ふべからず。口に防ぐをもて要と做さば、後に至りて全勝を得ん。先よくその意を得給ひねと、言叮嚀に敬言ば、直元・逸友等皆兼服して、其隊配にぞ従ひける。恁而這詰朝、信乃

現八ハ拔きて敵を逆んとす。杉倉直元を先陣として。國府臺の守城の小頭人なりける潤鷸手子内振照倶教二を副として隊の兵二千餘名の將とし又田税逸友に兵一千を從せて遊軍として直元們の次に在り信乃現八ハ各一千餘名を將て倶に後陣たり續ける介程に葛西新驛假名町の邊まで両敵夙く相臨て迭に戰鼓をうち鳴らし且箭を發ち鉄砲を連放ちて挑戰む程しもあらず寄隊の先陣白石城介重勝ハ敵の小勢なるを見て破るに易しと思ふ馬上に麾うち揮て兵毎拔めと罵り奨す左右に從ふ小頭人錐布五六郎鴈島列裂八九郎鎗鏡拍り馬を馳て數千の隊兵共侶に競ふて蒐る虎彪の勢ひ當るべくもあらざりしを杉倉直元毫も怯まず手子内倶教二相共に隊兵齊一駢合せて陽に開けて陰に閉る魚鱗鶴翼隊を乱さず射れども突けども物ともせざりし刀尖鋭りければ寄隊ハ憶ひを殺頽されて一町許退くを直元ハ敢赶ハせず隊信乃が號令あれバ馬を駐め士卒を制して姑且息を吻く程に去向に連る松樹の木陰より敵の暗號とおぼしくて轟然として四下に響く鉄砲の音と共に推のせ出る顕定の準備の奇巧愆ず所云騈馬三連車を幾乘となく牽蒐て直元們の一隊に向ひて弓箭鉄砲透間もなく路を塞ぎて攻寄すれバ直元手子内倶教二們ハ驚きながら今ゆふに引退んハさすがにて倶に士卒を励して力を勠せて防ぎ戰ふ程しもあらせず寄隊の先陣白石城介重勝ハ機を見て夙く取て返して錐布鴈島列衣共侶に車戰を幫助て攻んとす登時里見の遊軍なる田税力助逸友ハ其為体に心慌て隊兵を拔めて直元を援けて戰車を撃破らんとて憐る去向の茂林の裏より又推出せ敵の戰車に憶ぎ路を遮られて一歩も拔むこともえならず只得前なる車に從ひて撃退けんと角へども又推出し推出す車極りなければ逸友ハ隊兵と倶に前後左右を圍まれて出べき路いなかりけり況や杉倉直元ハ潤鷸振照二士と倶に只其騈馬三

連車に鐵壁の像く囲れて前に中り後を拂ひ右を遮り左に返せど齋藤盛実修
煉して よく車を行るのミならず車上の雄兵御者すぐるも連車齊一その機に稱ふく進退
弓箭鐵砲に透をあらせず近つく敵あれば鎗して殪し岌より蒐れば楯に隱るゝ
精妙奇兵の術に直元が二千の軍兵及逸友が一千の隊の兵さへに捌れて面を向ざれば
よしもなく身は只敵の的に做りて瘡を負ふ者ぞ多かりける。有徳し程に犬塚信乃
犬飼現八は相距ること二三町備を建て後陣に在り寄隊戰車の奇巧をもて
自家敗軍に及ぶべき事の勢ひに駭然たる信乃は現八を招きて今直元逸
友們を救まく欲するに路一條なく廣からねば横鎗を入れがたかり箇樣々々に計
ひてん續きぬべしといそがしく馬上に鎗を挾き一千有餘の隊兵を將て胡意明を
地に大路を適る左側の茂林ぶち入りて敵の戰車の後に出てうち破らんと走
まる後方に續く現八も隊兵一千百十數名樹拉も路の凸凹も擇までいそぐ騎
馬歩兵後るゝ者はなかりけり。信乃は眞先に馬を扸めて風く戰車に近つく程に
齋藤盛実其機を査して茂林の盡処路を横斷る其隊の兵二三千出衆て伐
んと備へしを信乃はうち見て毫も擬議せず群立る敵に馬乘入て鎗の尖頭
電光の出に碎る勢ひに從ふ士卒も死を見るゝも踏入々々攻靡けり刀頭鋭
かりぬもなかりければ盛実は隊兵と倶に憶ずも辟易して其路颯と開けしかバ信乃が
一隊は衝と走脱て逸友們が囲れたる數十乘なる車の後より車上の敵を
斫落し馬を斃し車を摧く勇士猛卒力を勠せて盡くる程に其一
方を殺顛されて敢近つく敵なければ退くべき路開けにけり。當下信乃は聲高
やかに杉倉田税自餘の人々も益の閑戰まへなるぞ我に續けと喚りて隊兵を
團めて決然と人なれ郷を立出て人なれ郷に還るが如く敢憚る氣色なければ
直元逸友はいへばさら也潤鷲舎吉内振照倶教二兩隊の士卒も氣を得て

復生たりと欽びの瞳を旋して退きたるを白石重勝見るに堪ず鎚布鷹
裂と兵侶に又只戦車を推拢めて追撃まく欲するに目今信乃に打摧れたる車
横り人馬転輾なく戦車自由に轉らねば亟に赶ふことを得ざりけり。尓程に犬飼
現八信道は剛才齋藤盛実が犬塚信乃に推破られて不覚に他を過させし
恥をやなくに思ひけん怯れし隊兵を装返して猶も赶まく欲せしをやられなると
喚かけて馬を真先に走せ来る隊兵を拢めて殺立れば盛実が隊の兵ヨすしとのくるを
又現八が一千の雄兵に撃散されて備斑に做りしかば現八竟に盛実と鎗を合せ
ゝ一上一下と戦ふこと久しかりしが盛実已に勢究り鎗を戛哩と撃落されて怯むを
現八衝と寄く馬上に生捕り肱腋に引着け左手に抱きて動せず信乃と力を勠
せんとて儘大路に出る時寄隊の先陣重勝們は信乃に損れたる破車と人馬の
屍骸を雑兵們に遺棄させて其路才に開きしかば亦復戦車を推出して信乃
們を赶へといそぐ程に現八はその脇路より咄と嘑きて見れば勇士猛卒は大刀風に
當るべうもあらざりける寄隊の士卒驚き噪ぎて逃んとするを白石重勝鷹裂八
九鎚布五六怒れる聲を震立て逢し兵毎小勢の敵に然まで怕るゝことやある日く
戦車を牽并て捕稠て皆撃よと連りに喚り罵り励せば駢馬の車兵御者雑兵是に
氣を得て許多の車を遣破々々鉄砲を發出さんと構るを現八見て冷笑て若
們まで是を知ずや我方僅に来る路にて生拘る這壮佼は是若們が頭人なるぞ今
倘洒家に敵對せば先這奴が首を斫て後に若們を鏖にせん我を誰とか思
らむ里見殿の御内にて然る者ありと知られたる犬士の隨一この地の防禦使犬飼
現八信道なるぞ我身に佩る霊玉あれば弓箭鉄砲も中ることなく刀劍も傷
られず然るを若們緑林の輩憖に虎鬚を捋まく欲せば同士撃に做く這奴を殺
さんはいかにぞやと罵り哮りて盛実を抱きし儘に兜の眉庇推仰反せて指示

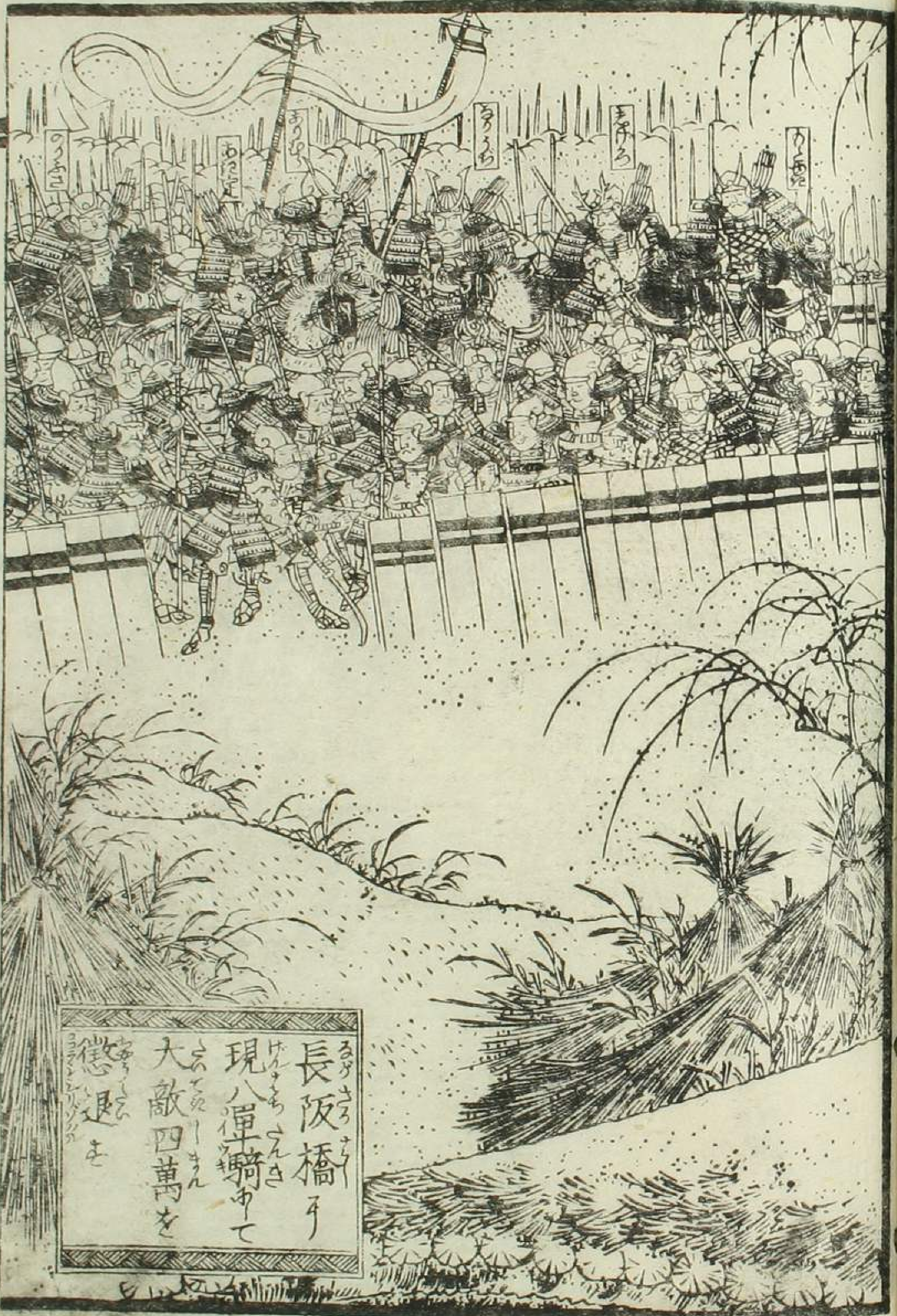
其ハ吐嗟と驚く寄隊の衆兵就中白石重勝ハ慌て隊の頭人と錐布鷹鳥烈裂們を招きつゝ他を見ずや敵の為ふ掠らるゝ那壯佼ハ紛ふべくもあらぬ當家の權宰齋藤左兵衛佐高実の冢子なる齋藤兵衛太郎盛実なると疑ひなし盛実ハ故ありて館の鍾愛大かたならぬ今現八ふ撃捕れ補とも那寵臣を亡ひなバ館ハ怨ミを承べけれ惴りなせそと解諭せば錐布鷹烈頭人ら諸兵ふ傳へて敢動かず車ふ添ふる儘ふまちて皆覘て在りしが。現八ハ然もこそとうち笑ひて聲高やかに若們知らずや里見殿ハ世に罕なる仁君也又我職分ハ防禦使ハ當の敵ふあらざれバ戮るもせず殺しもせず這奴を安房へ將て還りて我両館の御旨ふ依らん先ふとのいでも頭ぞ下知しく隊の兵を先ふ立しく馬乗旋らし疾犬塚ふ追就んとて五十四田を投て退き去ちあと寄隊の士卒ハ勇も不勇も只這英氣ふ拗まく阿容々々として長視て居り敢拒ふ者なかりけり。介程ふ山内顕定ハ戰車の進退其圖ふ當りて。一旦ハ其利ありしふ犬塚信乃ふ戮れ破られて先陣重勝們が既ふ敗績の光景あり。剰齋藤兵衛太郎盛実ハ犬飼現八ふ擄れそれて去られしと聞知りて怒りに堪ねバ一霎時もあらせず萬騎ふ先に立後陣より馬を走らせて來て猶其顛末を質問ふ重勝並ふ錐布五六鷹鳥烈裂八九諸頭人們ハ信乃現八が獍雄なる他們ハ里見の先鋒の両頭人杉倉直元田税逸友の敗軍を援るふ間道より不意ふ出て戰車ふ横鎗を入れしかバ大車も進退敢又自由ならず且三連車の總括なる盛実ハ那茂林の頭ぞて現八奴ふ虜ふせられて戰車ふ頭人あらざれバ微りしふ那現八を追伐んとて反て盛実を殺されんと思ひぞなりふ士卒を制めて御指揮を請まゐらぬと異口同調ふ陳ずるを顕定聴ずもあらず聲苛立てそれハ分説ふなるそれとても路陜ければこそ究竟なるを。

夙く戰車を先へ推させて。他們が歸路を遮らんず。我大軍後より差挾み殄伏
せんず。且盛実をこそ復して。敵を鏖にせんと為る小勢の犬士に氣を呑れて。阿容
阿容として盛実を拯ひ得ざるのみ。不覚なれ好々他們遠くは去らず。我追蒐て伐
捕りてんと。敦圍て暴く罵る程に成氏も亦在村素好等の老黨士卒を従
へて共侶に聚合ひ來て。隨即事の趣を聞て顕定を寛解てこそ那犬飼現八ら
我舊臣なれば罪ありしを赦して信乃を擒捕せまく欲せしに反て信乃を相資けて
倶に亡命なるへし。又犬塚信乃ハ㝡裏に村雨の贋刀をもて我を欺まく欲せしのミ
ならず。剰那時我滸我の館を闘せて。ヨヲヌく士卒を害ひけり。兇奸無頼の亡人
なれば捕へて罪を正まく思ふも久しかりけるに。一霎時も那奴等を敵に合して對陣せしハ
堪がたかり。今より洒家先に我として犬追物の故実のまゝ。攙前に被て射て斃さん。
いでとて遽しく在村素好等に示しつゝ。躬て隊兵を繰替て。みづから真先に

我むかで顕定是を勇しと誉て。則白石重勝と錐布五六鷹鳥列衣八等を
召近つけて。若们も亦先に我として滸我殿成氏を相帮助て倶に先度の恥を
雪めよかし。回も亦不覚の挿にあらず。其罪決して赦しなりいそげくと奇立れバ
大家忻然と言葉あへず。時を移さず成氏と隊兵を合せて。現八信乃を擊捕
んとて。戰軍を牽蒐々。裏然として赶ふ程に顕定も亦憲房も士卒を率て
陸續る總軍約莫四萬餘名騎馬ハさらなり歩兵も後れじといそぐ勢ひ只且基
波の磯打が如く。五十四田を投て赶ふほどに。この時犬飼現八信道ハ既に寄隊の
衆兵を思ひの随に權懲しつ。五十四田の陣営に退くに當時假名町の茂林邊を
距ること約十七八町ゆくに。徑二丈許なる小流あり。土人是を長阪川と喚做し
たり。長阪村に近ければなり。其水原ハ遠くもあらぬ猴股河より引もて來て田甫の
用水にもなるとなん。那水に架せる圯橋あり。長阪橋即是なり。間話休題然バ

現八ハ這橋の上まで退き来ぬる時。權且馬を推駐めて挟みたる齋藤盛実を士卒に遞與し綁らせて。却隊の小頭人們を馬の左右に召よせて寄隊の先陣白石重勝們ハ。鈍くも我に權されて迯げしかバ。今をもて顕定必怨怒りて。大軍を将て赶蒐来るべし。我生拘りたる其壮佼を知る者ありて生口るを聴くに。他ハ齋藤高実の家子にて。齋藤兵衛太郎盛実と喚做さる者。即是父の初顕定に竄従して。龍陽の寵あり今も其餘波にて。重く用ひられてあり。然らバ顕定他を惜て。復まく欲するならん。非如顕定戦車をもて表向の路を断まくするとも豈怕るゝに足る者ならんや。我猶一霎時ここに待て来ぬる敵を推退けん。然バとて多勢ハ要なし。汝達ハ其生口盛実を隊の兵毎に牽せて。皆共侶に退のく。是等の趣を疾大塚に報知せて。我還るを待ねかし。大塚必城ゆへ入らで。戦車を防ぐ備を做さん。余の箇様々々と意衷を示しつ。究竟なる士卒二三十名を這里に在らせて。兵の従ふことを饒さず。定に現八が大胆なるハ。いふにもあるやと思ふものから。心許なき所なれども。否といはんハ由なければ。大家只得応をなして。却盛実を牽立て。五十四田を投て退き去るを現八一霎時目送りつ。則馬の左右に在せし雄兵二三十名に指示をなして。若們皆先那里を見よ。這里を距る事一二町なる那里の路の左右なる処々に樹且なる敗稲塚ありて。敏あり立たる細竹の冬々樹の小森林に雑まる。是我兵を用ふべき究竟の地方也。若們ハ身を伏して鐡砲を携て稲塚小森林の裡に躲れて。敵の赶蒐来ぬるを俟ね。寄隊戦車を先にして那里まで来て我を見バ。疑ひ惑ふて躊躇ふべし。その折我徒々と喚ふるを暗號にして。左右齊一大銃を發ちなく戦車を撃破り。寄隊必驚きて慌てん。一旦ハ退くべし。敵退くとも赶ふべからず。若們その折早く引揚て我に倶して五十四田へ還りね。今我方すくに計る所大かたハ是のみ。差ふべからず。胆を肥して怕るゝことなく。皆よくせよと解諭せバ。大家

礙議せで其意を得ず。別まぞ件の物蔭に躱れて敵を俟にけり。懲而那
身は只一騎自若として橋の邊に在り現はれ出れば打扮ハ草緑紙の札よれ
鎧に龍頭ある五枚兜の緒を締て。猪頸に戴きし石青の故金襴の戦袍套に
黒金装の大刀戒刀柄の匕首と腰に跨へ細目綱鏻の釬十王頭の脛衣に直裏
曳の上總麻の重底なる戦鞋の締高にぞ紉短に穿做て。驪馬の太く逞しき
に深绛の厚總垂く貝錦の磨鞍に白と紫を染分たる腰鞘しく寛に
うち乗り左手に三刃尖の鎗の丈二柄なるを挟まて。前面を佗と見亘したる馬
上の居長最高く其武者態凡庸ならず。臥蠶の眉丹朱の唇眼ハ雙べたる
星の如く歯ハ瓠の実に似たる面の色浅黒く。髯の迹青みける這個蓋世の大丈
夫南總八犬隨一人里見氏股肱の俊傑といふでも知るき面魂坡堤の芒花
霜に枯れて招くともなき寒風ハ馬の邊を避て吹く。威風正可に凛然たる。恁程に
寄隊山内蔚我の両老黨白石城介重勝横堀史在村ハ先鋒三連車の
頭人たる錐布五六雁鳥列衣八九新織帆太夫が幾千百なる兵を将て馬を赶せ
車を轔せ那二天士を補へ篭て鏖にせんとていそぐ間を離れず倶に馬をぞ早めたる
二隊の軍兵二萬餘騎又是に加るに両大将一副将顕定成氏憲房も
各其隊の士卒を将る。大兵都て四萬餘名長阪川近く来ぬる程に先鋒の
隊長重勝在村ハ已に至りて士卒と共にこれを見れば前面なる橋の邊に甲冑たる
武者一騎馬を這方に推向けて端然として敢動かず。其鎧の縅色ハ紛ふ
べくもあらぬまでに我も士卒も認得ある現八なるべく思ひしが他ハ什麼とおもふに
御者と士卒を喚禁め車を些推戻させて止々とおもふに数言れば錐布五六
雁鳥列衣八九又新織帆太夫も衆兵都て疑惑ふて眼を睜り息を篭
あく敢一歩も拕む者なし。弁が中に白石重勝ハ馬を横堀在村の身邊に乗



長阪橋ニ
現八單騎ニて
大敵四萬を
懲退す

よ寄らち向ひて和殿ハいかに思ひ給ふ。那現八ハ只一騎那里に我大兵を誘引まく
欲するハ必是計略あらん。然るを漫に推蒐て倘又失あるときハ再犯の罪を
争何ハせんといへバ在村點頭て然バとよ。その義なれ。那犬飼現八奴が梟雄なる本
事ハ豫我よく知り。一騎なりとも侮るべからず。卒両大将の御上旨を伺ん。疾後陣
へとていそぐ程に顕定成氏憲房も大兵をひきゐて来にければ重勝と在村ハ馬より下
立相迎へて倶に後方を見かへりて遥に現八を指し示して其進退を請問へバ
顕定成氏憲房ハ倶に馬上に頸を伸しつゝうち望むと半晌許疑惑の眉を
顰るのミぞなかりける。成氏ハ尋思に憶ぞ傾けし頭鎧にまとひつけ緒を締て。
顕定に向ひていふやう。那奴ハ咱等が舊臣なれバ心術本事を知ざるにあらず。非如今少
許の計略ありとも寡ハ衆に敵まじ。かくて戦車を先に轉し蒐て蹴ちらさバ勝
ざることあらじと慌るを顕定推禁めて。其も勿論のことながら見よ。那里に小
川あり。現八橋をうち渡して那方の岸に退きバ戦車を行るに甲斐やあるといへバ
憲房も倶にいふやう。加以那圯橋ハ最小かりて危げなるに車を遣らバ中絶ん。那
奴ハ其地の利に據りて我を侮り遊べるならん。憎さも憎しと敦圉くのミ。二将隊
長諸頭人重勝も在村も雖布五六鴈鳥列衣八九士卒も倶に思難て皆計の
出る所を知らず。徒呆然と口を鉗みて不覚に時を移しけり。有恁りし程に犬飼
現八ハ豫て計りし所に差ひ寄隊四萬の大将士卒戦車をヨヌく先に建て。
那里まで来て敢我まぢ。俗に云不動の禁鄉縛狄然ながら禁足の祈禱に遇
へる衆狂人狄群盗と異なるべくもあらざれバ現八然こそと含笑て程を料りそらち
見て在り既にして寄隊の大兵隊伍を乱して相唱く者ヨヌクりけ險を現八遥に
相済して鐙踏張り鞍局に立揚りて聲高やかに寄隊の人々疾蒐けきや。
崗我殿の御内に侮人在村を首として我を認れるもヨヌくらんに今更名告るハ

要なけれども。山内殿ゑへ初見参之我姓名を笠表に寫して各護身符にせよ。昔は滸我の一小卒其罪にあらずして久しく縲絏の中に在りし身の隋玉下和の撰擇に逢ふて今は里見の防禦使たる犬飼現八金碗宿祢信道を。即我へ寄隊四萬の衆中に恥を知り名を惜む勇士なれバ鉄猛将いふとも只是一騎の敵に怕れて進む者なけれバ甚麼ぞや疾々戮きねと喚れバ成氏憲房怒りに堪ず倶に采配うち揮て鬼れくと先鋒を罵る其聲遲し那時遠先左右に隈ある小森の林蔭敗稲塚の邊よりして犬飼が隊兵等の齊一撻と發出せし二三十挺なる大銃に寄隊の戰車七八乗車上の兵も御者も馬さへ倶に霏粉に打摧れて免るゝ者あるとなけれバ差るゝ士卒まで胆を潰して苦と叫ぶ聲共侶に帆太丈は憶ずも鐙を踏外して馬より撻と墮しかバ衆兵都て哇と頽れて引つ極に驚く群禽の撥と立像く逃しかバ先鋒の頭人後陣の三将童勝在村もへバ怖く成



氏憲房顯定ハなほ什麼ともいかゞの勢ひ林叢の樸もなく辟れ蒐りし躬方の爲に推戻されて罵るのミ心ともなく乱走して假名町まで退きける意ふに犬飼現八がけふ日の進止勇なる哉昔漢末三國の始に方りて劉皇叔玄德が荊州の開戰敗れて曹操が百萬の大軍に逐れし時劉備の勇将燕人張飛字ハ翼德が身只一騎馬を駐めし長阪橋の上にて其百萬の敵兵を罵り退けたる其勇一對橋の名さへに相似たる事の勢ひ愉快を見れバ和漢今昔異ならぬ前硯われバ後筆なるに似たり看官軍に合笑れて後回誰何と思ふもあるべし間話休題登時犬飼現八ハ四萬の寄隊立足もなく車を棄鋒を倒にして逃去一人もあらず降りて伏たる隊兵を招きよせるに隨即二三十個の雄兵を又鉄砲を携へ物の林陰より出て來つ造化至妙と散動くを現八急に喚近つけて若們那圖を差へざりける捧れハ極めて好那見よ寄隊の棄たる戰車猶那里にあまたあり皆打摧かで馬を奪等略て後戰に甚ハ利あらむ然

とく其頭に時を移して寄隊返しすることあらば其囬防がんとかの夙く犬塚に赶就て
其の首尾を報知せ又更に又寄隊を破る計策もあらんかし橋を断ねと吩咐て徐に
前面の岸に造まし二十個の隊の兵們は兼りぬと應て力を勠せ左右して長阪橋を
毀流しぬ梁も遺さず做果しぬ現八馬上に是を見て今はしも心易かりき疾く来よと
いそがしく五十四田を投てかへりゆく現八が其の日の退口飽まで敵にかゝはりや思ひのまゝに
程遠からぬ手古名の墳にありて今に口の碑誰も知る武勇今古に獨歩ましとやいふめりける。

作者云本回は文のいと多かれどもその數量て前後二冊を一回と分ちて二冊に做すとすそもその
例なきにあらず本傳刊刻の書肆文溪堂の好に儘せて全部九十六冊にせまく欲すれば也益
分巻は作者の本意にあらねど腹稿猶餘りあるもて既に定めたる巻冊も回數も又數に
まうくやあるらん卉は吾から前定あらず筆の自然に省くべからず看官是を思ひねかし。

南總里見八犬傳第九輯巻之三十八終

# 南總里見八犬傳第九輯巻之三十九

東都　曲亭主人編次

## 第百六十五回下

その題目は既に前巻に出せり所云野猪を放ちて信乃戰車を焼く即是也。

今一回を數量て二巻に做すとて其例なしといへども本傳は一百七十回にして圖圓らすまく欲する故に是より下は回毎に長編ならざることを得ざるなり。

却説犬飼現八は則二十個の隊の兵を馬の前後に従せて。五十四田を投ていそぐ程もあらざれば前面に出せる四五千の軍兵あり敵鋭く射方狹とぞかりに近つく随に又よく見れば是則別人ならず犬塚信乃戍孝が杉倉直元等と共侶にあに現八を待たりけり。郷同に現八は還しける。一千有餘の隊の兵も皆来てその隊の中に在りしかば其の小頭人老兵們も倶に犬飼を相迎へて。信乃が用意を告

るども現八是をうち听て躬て馬より下立て。隨即信乃に對面す。當下信乃がいふやう。曩に我寄隊の戰車を撃破り。且一方を殺開きて杉倉田税を拯ひ得たれども。和殿の安危心に掛れば遠くも去らず。這里に在り悄地に斥候を遣して其勝敗を覘せしに。和殿は既に名ある敵一人を生拘りて猶大敵を權し退けつ。後安く做さんとて反て隊兵の多かるを欲せず。銃術に修煉せし雄兵二三十名を那里に在せて。其他は從ふことを饒さず。其隊の兵們のかへり來て事情も知られしが。いかにぞやと思ふのみ我さへ遠く去難く。和殿の來ぬるを待て居り。あるに那生口を知れる者あり。他は顯定主の家臣齋藤左兵衛佐高實の家子にて兵衛太郎盛實と喚做す者人衛の徽子瑕に異ならぬ主君の寵淺からねば戰車の頭人たりといへり。然らば是要ある者人にて餘も思ふよしあれば。則田税力助に隊の兵二三百名を從せて。五十四田の陣所へ遣しぬ。和殿の首尾は甚麼ぞやと向へば現八

然ればとよ我箇樣々々に計ひて。敵の胆を拉ぎしに多勢を憑む烏合の弱兵一箇投石に駭きて衆鳥飛去ざる者なし。將も士卒も驚騒ぎて一個も遂らく逃亡ぬ。迹に棄たる戰車數十乘あり。皆うち摧きて且其馬を奪略ふべく後の戰に利あるべけれど。其頭の所為に時を移して寄隊の返し來ぬるに逢ば其回る防ぎ易からずと思ひしかば敢せず。長阪橋を截流して寄隊の路を斷くるのみぞ儘退りぬ。と告れば杉倉直元を頭人先兵側聞して胆を潰し面を注してさてもとゞろくに舌を卷て感服せざるが中に犬塚信乃は蹶然として却る犬飼和殿の胆勇は今に初ぬるならねども。約四萬の大敵なるに身は只一騎隊の兵三十。一呼吸の間にして言下に大敵を威し退けし。其勢を推量るに全身都て胆にあらずは何人か能せんや。實に我邦の張飛なる哉。戍孝が及ぶ所にあらず。然れども惜むべし。和殿の思慮足ざりき。何とならば數十乘の那車をうち摧くその時をも

稍さる燧嚢ハ持つらん火を鑽出して車を焼バ大敵返し来ぬるとも煙に堰
まて躊躇ふ間に和殿の退口易からべし。敵に車あらば我又後戦に自家の利
亦只あるのミならず橋を毀しハ拙策え何とならバ那長阪川ハ小流なり寄隊ハ
四萬の大兵なり其橋なくバ做りなくも或ハ樹を伐りてなく投渡し或ハ埋草抛
りて川を埋るとも做し易からん抜もるべしや然るを和殿懲に橋を毀されバ心を知
られて実ハ寄隊を怕る者え外に計策あらじと思ハん寄隊四萬の大衆中に一
個の智者なからんや那折橋を断流さバ其儘にして退ぞあらバ寄隊必訝
りて猶謀ありと思ハん然らバ漫に那橋をうち渡りて追逼るべからぞその理を
懐ひあなぞやと憚る色なく論ぜれバ直元以下の頭人老兵這宏論に敬服して。
現智ハ大塚優れりと思ざる者なかりけり既にして現八ハ憶ぞ信乃に解暁さ
れて脱に浴けりと悔て及ぞ什麼いかにして可らんやと問へバ信乃答へいふやう然バ

ある文明の
岡長阪川次
今ハかの地
にありその
あれよりれ
又後々の
回に鮮分
てん看官
是を訝
あべからぞ

とも四萬の敵ハ怕るゝに足らぞ只那戦車ハ怕るべし。あれども今泉泰河をうち
渉して城に竄りて他を防がバ寄隊戦車の奇巧あるも用ふに由なからべし但恨
る所ハ我們二人強くあの地に敵を待ながら甲斐なく城に逃竄らバ獨我と和
殿の恥のミならで御曹司初陣の花を散すに是似たり又蝕く這義を思ふぞあるく。
我既に主張あり和殿も豫知れる如く前研河の這方の岸に一座の新岡あり。
今より十稔有餘前に民泉泰河數度の洪水ありて夥く砂石を推上て田甫の害に
做りしかバ土民們力を勠せて其沙石を鋤除くに愚公が山を移さ辛苦を
歎ちぞ約莫三稔許にして沙石を一所に聚ありて一座の岡に做なしたバ文明の岡と喚
做しけり這岡山高さ數十仭にて上極めて平坦なれバ數千人を住しむべし況や
今ハ年を暦て自生の雑樹ヨクあり是築ざる城郭に似たり然バ我一軍又蝕く件の
岡に據りて寄隊の戦車を防ぐべし。あの故に方僅田税力助に隊の兵二三百名を

従せて。五十四田へかへし遣せしハ那里にある戦粟兵器を文明の岡に移させん為也とて。那漢萬の事に逸友触けれバ今ハしも好時候なるん卒々といそがせバ現八听つゝ嘆唱あてあるべしと答へて。随即信乃武者助と共侶に各隊兵を推立せて五十四田河原の上なる文明の岡から登れバ田税力助逸友ハ隊兵三百名と倶に先きちて這岡に在り。則信乃現八等を相迎へて那生口盛実ゞ士卒十名許に吩咐て國府臺の城に呈せしろ並に今日の開戦の事の趣を注進せよりしを告るに信乃ハ其移させける戦粟の思ふにも似ず減銷して僅に三百苞許なるを見て訝りて其故を問ふに逸友答て然ンハ料ざりける禍事あり陣所なる戦粟の失たりしを曩ぎ告るに遑あらざりけれバ訝り給ふも理りぞ郷高に土民等が潮忘と听くに近国なる野武士の頭領に高飛車和女九郎剣山峯瘤四郎と喚做もあり其徒一百七八十名を将て這回成氏主の隊に附まく欲せしに疑るゝるやありけん衆議なゞ是を許さざ然るを横堀在村計ひて若们殊なる功あらて倶に志を見さバ必重く用ひられん箇様々々にせよかしと悄地に諭せしかバ和女九郎们皆喜悦びて當陣の隙を覘ふ程に今日あも葛西の開戦に當陣営を成る者の寡なきを覘ひ知りけん件の和女九郎瘤四郎を首として其徒百七八十名と共侶に間道より推寄来て且陣門を毀ち破り我兇兵を攻蹙ち散らして剰陣中に在る所の戦粟を奪略して維楷たる我船に打載々々畠森河を泝り漕去まくせしを遠地の荘客等知りて百十数名援け来て我兇兵们に力を勠せて齎一船を乗り出して赶蒐て戦ふ程に賊徒ハ窮滴して船毎に積入れし戦粟の殊に多かりければ巨舫四五艘乗淪めて賊徒の溺れ死する者百幾名なるを知らず开が中に那高飛車和女九郎と剣峯瘤四郎ハ猶逡れる戦粟を攫んとて船に乗後れて在りし程在下料ずかへりて事の趣を知るとそが儘失場に隊兵を推択めて和女九郎と瘤四郎と其餘類へ

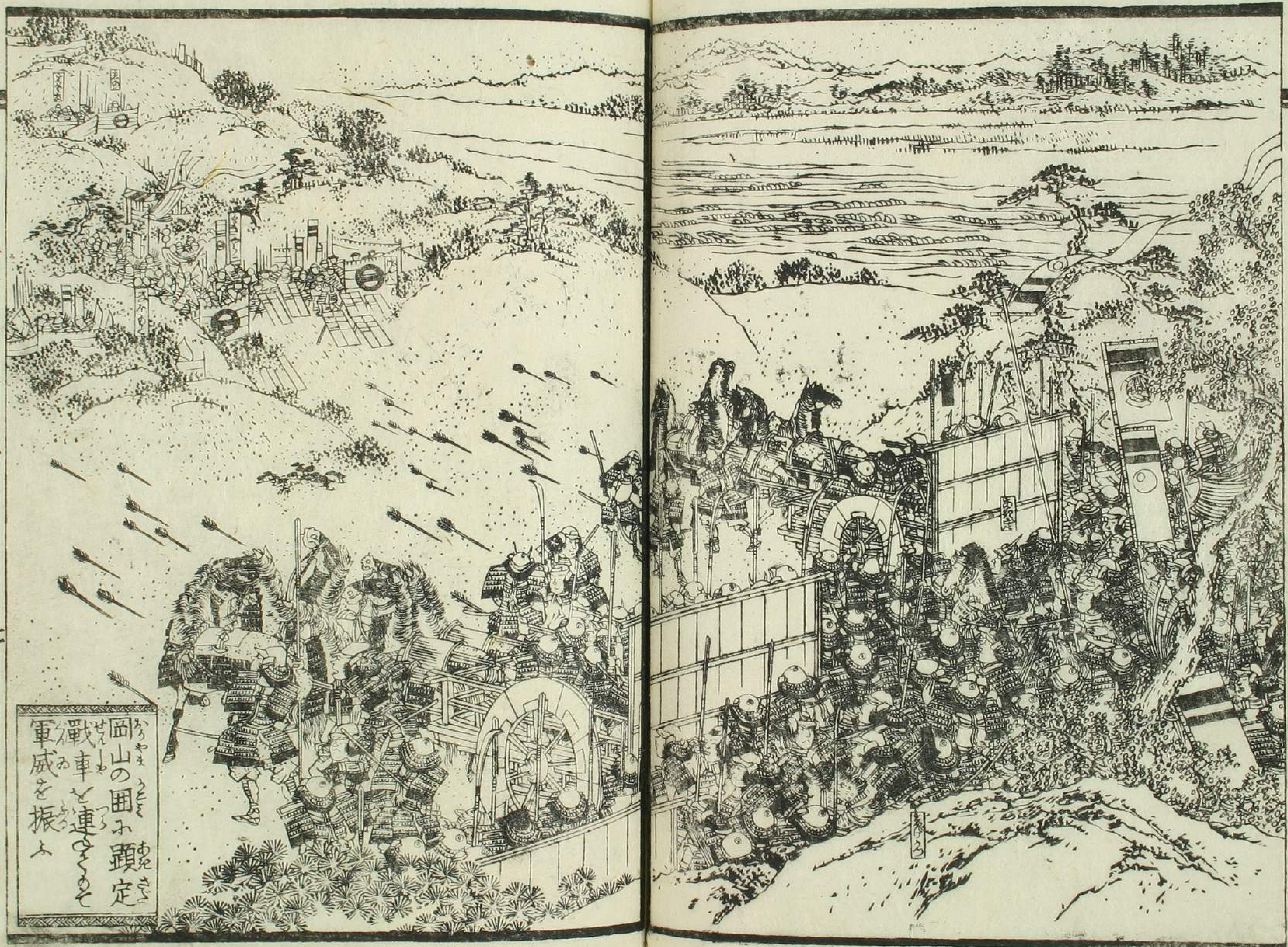
擊捕りしるが禍鬼夙く鎮りぬ然れども戰粟一千數百苞ハ皆荒河の底に沈を
なせど亟に採揚ぐべくもあらず殘るハ二百七十五苞あり其七十五苞をバ荘客們が忠
戰奇特の賞禄に齎せ遣しぬ且陣営に在りし老兵們ハ浅痍負ふものゝふ
なく死に至りし者もあらず這故に戰粟ハ形の如く減銷して今大の圖に運登させ
そハ二百苞の外ハなきと二五一十を告知せて和女九郎と瘤四郎の首を実檢に入れし
が疵負ざりける老兵們も其漏るゝを補ひて陳謝の詞を盡しけり思ひかけ
ぬ這一擧に信乃が驚きたれバ現八も眉をちぢめ嚬蹙て兇徒を即時に殲
げしハ愉快の事なれども戰粟失て復らざるハ是第一の憂なし斯く船を乗浮
め水底を撈らせて咸引揚ずハ後悔あらんといへバ直元も倶に然こそ計るに在
る所の士卒ハ五千有餘なるに二百苞の戰粟ありてハ僅に二日を支ふべし水底なるを
採揚るに其事亟に做しかたくハ疾く臺の城へ告稟して戰粟をとりよするにしくことや



なれべしと議するを信乃ハ聞あへず其義ハ然なる日にあるべし今ヨリ船を漕出させて水中を撈
るとも或ハ使を臺の城へまゐらせて戰粟をとりよするとも今宵の中にハよくせんや其事
なほ做しえざる時大敵急に推寄來バ何をもて是を防ん志士ハ溝壑に在ることを忘
れず勇士ハ其元を喪ふことを忘れず今何の暇ありて沈にし戰粟を合せ揚んや且
事ここに至るといへども自他の勝負ハいまだ知られず既に生口盛実を臺の城へ呈らせ
兼幾程もなく事の不の字を恁々と告稟なさく御曹司及東の翁に物を思せ
まゐらんハ忠臣勇士の本意にあらず先疾防戰の備を做させ給へ今の急務なるべけ
れと道理を舒て説諭せバ現八を首として直元逸友諸頭人們ハ倶に感激してく
敢異議せず然らバ準備をいそぐとて諸隊を分ち林間配りしつ圖ある樹間々々
に帷幕ヨリ接見して寄隊の船九を防ぐ為まに當下信乃又謀りてのたまはく
五十四田の河原にヨリ維だし我諸船を那儘にあらせバ必敵に奪れん然るをかくて這

岡の背なる水際に穏きも亦要闘憖に船中なれバ戰難義に及ん時士卒皆うち
乗りて逃まく欲する心起らん古の勇將ハ船を沈め竈を毀ちて死戰を訣せし
例もあり只是進むのミにして其退くに路なけれバ士卒の心一致して奮勇日頃に百倍
せんかとおもひしかど。在る所の船ハ咸前の岸に退けて。國府臺の下に維ぐべし。なが中なる
快船一二艘をバ這岡の背なる枯蘆の中に隱し措バ臺の城へ事の
火急を告まつるに便宜ならん。ともかくもいそぐべかりなる。と言を現八諾ひて躬て士卒に
下知して准備迭く成し果しかバ。其の宵ハ篝を燒明して徐に寄隊を竢ふけり。
介程に寄隊の大將頭定成氏憲房ハ里見の防禦使犬飼現八が大勇大武の
謀に權されて。四萬の士卒立足もなく逃て假名町まで退きしを且怨み且恥て。
うち嘆くのミなりけるに。姑且して頭定ハ更に斥候を遣して現八が後の形勢を覘
せしに長阪川の上にハ敵退きて一人もあらず只橋を截流して路を斷るのミ。と

れバ頭定是をうち聞て。原来現八奴に謀られて他那橋を截流せしハ我大軍を惕
るのミ別に計策あるにあらず。蚤く樹を伐りて那小川に架渡しね明日ハ未明より
五十四田に推寄せて今日の怨を復さんぞ。兵毎いそげ。と下知すれバ成氏も憲房も
是に氣をとり勇ミあり倶に士卒を奬して先途の不覺を償めけり。係而寄隊ハ
其詰朝二將四萬の大兵をもて五十四田を臨て攻寄するに敵ハ故の陣所にあらず。
文明の岡に篭れるに及昨日高飛車和女九郎劍峯瘤四郎が敵の陣営を
襲ひしに那身ハ戰歿しかれども敵の戰栗什が七八ハ係々の故をもて果河の水
底に沈ミしといふ。且その時威く叫えしかバ頭定馬上に掌をうち鳴らして悦びて成
氏と憲房にその義を告て且いふやう那犬塚信乃犬飼現八等ハ我三連車に懲
されバこそ高所に逃登て遮莫戰栗減銷して什が二三になりしといへバ幾もあらで
よく支ゆべき四五日を歷バ飢疲れて自滅せんと疑ひなし。況や船を奪れしとて欲咸



岡山の囲ニ顕定
戦車を連ねて
軍威を振ふ

退けくもらぞといへバ他みげる路を断ゑ我今駢馬三連車をもて岡の三方を合せ囲まバ遂ふ活路るゝべし。寄せよ漏さずと士卒ふ下知して其攻口を定むるふ則岡の正面ハ頭定みげる将として雁鳥裂八九郎ら頭人雄兵ヨヲくゝの隊ふ在り右のゝさハ成氏ふて横堀在村新織素行及科草七郎望見一郎ら近習外様の従兵勘ぐらぞ左ハ則 憲房ゆく白石重勝錐布五六郎ら隊長さる者ヨヲく従ふ總軍通て四萬餘名百十數乗る三連車を一隊毎ふ先ふ備く推登せまく欲されども岡高けれバ車馬挑まぞ倶ふ簱を敲て喊の聲を揚け箭を飛し銕砲を連放ちく息をも艱れぞ攻るものゝ信乃現八る毫も噪ぞ乗ゝる幕ふ箭丸ね受れバ士卒ふ一個も傷損なし敵又盾を被て連て攻登らまく欲すれバ弓箭銕砲をめく射て落し數多滾し或ハ大石を投下もく虀粉ふ做ま勘ゝらねバ寄隊ハ蒙瘋児其數を知らぞ矢場ふ命を殞ま者ヨヲり恁 挑戦ふ程ふ冬の日又蝕く暮れくれバ寄隊ハ些ㇾ攻口を甘げされども猶稲麻竹葦の如く繞焉として囲を觧ゟず三所の陣営白晝の如く倶ふ篝火を焼續けて明るバ又攻んとる勢ひ撓ぎ振然る爾程ふ犬塚信乃犬飼現八ゟハその宵直元逸友等の諸頭人を一緒ふ聚へく信乃がいふやう今日の鬮戦主客の勢ひを思ふ自家ハ小勢なれども高に處りあく盗を防ぐふ利あり寄隊ハ大勢なれども低に在りゝの故ふ反く傷損ヨヲり然バとく只一戰ありく敵の弱るべくもあらぞ倘徒地わく日を過さバ自家ハ必戰粟竭て夷齊が首陽の蕨も甲斐なく句践が會稽の恥を雪るふ由るゝべし因て熟思惟るふ寄隊の専ら憑む所ハ只那戰車のみ又蝕く是を破り除かバ何の日か大敵ふ克えんゝれども百十數乗なる那車を一時ふ皆毀る破らん事ハ力をもく做まべくもあらぞ於是再 以るふ初大阪が獻りし八百八人の一策ハ只ハ水戰の為のゝみぞ這里ふも亦その時ふ於く風火の資助を借るふあらぞハ連り建く ヨヲゐ戰車を

誰かよく一時に除んすれども岡の上よりして蕉火なども投下さバその間近からぬ車あれバ火の移らずして反て敵に打滅されんその義什麼と談れバ大家ひとしく感佩して。賢慮寔に其理あり。さりながら大なる戰車を一時に咸焼くべき手段ハ我們ハまだ思ひ得ず敎給へと異口同様に膝を拱めて請問へバ信乃ハ然そと點頭て諸君聞ずや昔唐山戰國の時燕齊両國の鬪戰に齊の將田單が一夕火牛の謀計以危く敵に勝ける故事あり火牛ハ聚合し牛の角毎に蕉火を結附て放ちて敵を驚し其乱るゝを撃し又我大皇國にてハ源平両家の鬪戰に木曽冠者義仲が義旗を北國に揚げし時平家の方人齋明が赤火牛の謀をもて富樫太郎宗親と林六郎光明が篭りし城を夜伐して戰ひ利ありし事由ハ阿弥陀寺本平家物語巻の第十二に見え又源平盛衰記長門本平家物語印本平家物語に載せる所異同あるをもて汚ずれども。あくに参考せんハ要なし那齋明ハ素是加賀なる



白山の社僧にて始ハ義仲に従ひしに又平家に降りて這回あり其心術ハ表裏あるかゝる者なれども那謀ハ拙しといふべからず。然バ和漢に火牛をもて勍敵を破りしハ那田單と這齋明あるのミ我們も亦其顰に傚ふて火牛を放ちて戰車を破んとおもふハ田税生ハ今宵事熟る隊の兵十名許を從へて那枯蘆裏に隠し措て両箇の快船に乗りて臺の城に参上り東の翁にその義を告よ。眞間國府臺の近郊なる荘客の家に在るべき牛を夛く召よせて其を亦情地に船に乗せて翌の宵這岡へ牽もて來よ今宵ハかくて翌の宵も我其時分を料り金鼓を鳴らし大く寄隊を驚さバ河原に餘念及ずして和殿の往復易かるべしといひつゝ指を僂へて今日ハ十二月廿八日也新月ハ既に没ぬ翌の宵も月ハ夜中に没ん潜ぶ為ハ烏夜なぞよけれ八日より定正主水路を歴て洲崎に推渡らまくほと云風聲隊なけれバ寄隊ハ這里も行徳口も其日を契り期を推て必勝を急ぐならん犬川大田ハよ

なるや倶に是這墨泰河の河筋に在りながら迷に見る暇なけれど犬川と犬田は那
里に総あるべくもあらず。今の急務は火牛の事のみ。然ばとて我方寸の及ぶ所独賢達て
計るにあらず。這義は既に犬飼と商量して右の如し。天も明ば甲斐なけんやなう〳〵と
言叮寧に説示しつゝいそがせば現八も倶にひそかに一邑近郊に求る牛の数少ければまづ
知ば角寧一頭も多よそを好とも其も明日只一日にあり。企てそ待べけれと心属ければ直
元ぎる頭人老兵感佩して辞して持口へ退りけり。偖而田税力助逸友は其の夜丑三の
左側に隊兵十名を従へて岡の下なる枯蘆の裏に維ぎおける快船二艘にうち乗りつ
悄々に國府臺の城に赴く程に信乃現八は士卒に下知して猛可に戰鼓をうち鳴
らし喊の聲を颺く目今急に攻下すべき勢を示せしかば寄隊は吐嗟と驚き謀ぞて
哀れ犬氏は戰栗竭けん夜驅して落んとするぞや遣る勿ますな推包ぐ一人も漏さ
ず轂を捕りねと相罵りて戰車を連ねて大刀を抜持ち鎗を挾み旗を推建並開を



飛し鐵砲を連發ちて透もあらせず構るに敵は徒其勢のみ多く權且して音
もせず原來那奴们は後れて鵜立の夜を俟なるべし。無益なりと皆呟くものを各其兵を
解て憩睡なく欲するに敵は又戰鼓をうち鳴らし喊の聲を吐と颺て驚きて始の
如し寄隊は是に睡りもやらせて遂に這夜を明せしかば他所を見る暇もなき故に
田税逸友が船に乗り河を渡して國府臺の城に赴きしを寄隊に知る者なかりけり
偖而其次の日も寄隊は又只三連車を岡の下に相連ねて攻ることのみ緊しければ信
乃現八は物ともせず敵の箭丸を幕に受て推登らんとする猛者あれば或は弓箭
或は鐵砲或は石を投かけて岸より是を轂ち墮ときに皆中らずといふ者なけれども
その日も寄隊に傷痍見多くて終日挑戰ふのみ冬の日なれば短くて又いたづらに
暮にけり。然ばその宵も信乃現八は逸友がかへり來るべき時分を料り士卒に下知
して又攻下るべき勢を示すこと昨宵の如く金鼓間なくうち鳴らして寄隊を連りに

驚きぬ。寄隊は都て先度に懲りて敢近くは拵まねども。然ばとて由断せば只攻口を守るのみ。河を渡して来て岡に入る敵あらんとも知ざりけり。介程に田税力助逸友は其の夜子二刻の比及に國府臺より、かへり来て信乃現八に報るを聞くに那身は昨夜障る事なく臺の城に入ることを得て。随即東六郎辰相に急を告て牛を欲する事情を。詳に聞えし上に。那里見郷士那現八が生口盛実をまゐらせし折。義通君感悦浅からず有低れば自家小勢といへども猶全勝の聞えあらんとて最慂しく思ひ給ふ。寄隊は那巧做せる三連車を多く先立て五十四田を臨く推寄来ね備鐵石に異ならねば二犬士の武勇なるも勢二つに中るに由なく文明の岡山に執登りて其英氣を避ると云風聲これあるのみならず。矢叫銃响喊聲まで河を隔て夜となく日となく耳に会る如く聞えしに。剰自家の戰粟は低らの故あつて多く暴河の水底に淪めし事の幸なるを誰ぞとなく知られしかば義通君を首めて宿老頭人士卒まで





りよ心安からず。躁て衆議を凝させて夜に紛れて岡の陣営に戰粟を入れさせん。然らずハ城内に在る所の士卒を盡し船を出して御曹司に倶し於の二犬士を相資けて雌雄を一時に決せん歟と云意見區々なりければ。東辰相らが聞て各異に意衷を盡そハ議勇あるに似たれども寄隊は四萬の大兵なり。是に加るに那騎馬三連車の堅陣をもて攻るにあらずや。虎に翼を添る如き勍敵と知りながら當城五六千の士卒をもて河を渡して伐まくせバ毛を吹て疵を求る悔なきことを得ざるべし。然ば羽生の夜甲夜過て烏夜に乗して戰粟を入れさせるにしくことなけん。幸ひに岡の遠方なる水際は敵の囲なし。是究竟の便宜なり。竟に我八犬士は各身を衛る靈玉あり。且伏姫神の冥助もあらん。縦窮阨の中に在りとも大なる敗はあらざるべし。然ばとて河を隔て長視て可惜日を過さバ轍鮒を枯魚の市に訪ふ寛急の理に暗き者と先戰粟を入れさせる頭人を擇むべしとて。則真間井樅二郎と継橋綿四郎に課て。

翌の夜丑三の時候戦粟千苞を二三十箇の大平駄舫にうち載て雄兵約莫一
千餘名急に暴河を横に渡して岡の陣営に届るべしと定めさせその日の衆議は
果にけり爰に其夜岡山の陣営より田税力助逆友が信乃現八の使に逢て十
個の従兵と倶に悄地に臺城に来り則東辰相に就て信乃が計畧を告稟し
且牛を求ると急なりければ辰相听て歓び感じて敢亦他議に及ばず逆友並に従兵
們を労ふて件の衆議の趣と戦粟餽りの準備あるよしまでも詳に示し談せしかば
逆友則義通君に見参して稟まをす始の如く牛を欲りまするの外に敢他議なし
かしかば義通君其事の危窮に一トたびうち驚きて又信乃が謀る所微妙なるを歓び
感じて六郎に叙く那需に応ずべしとそのそが給へば辰相奉り退り出て次の日の早天
より躬く近郊なる村正荘客に下知して其家毎に在る耕牛を今一日に駈集
めて疾當城に牽もて参るべし必過分の重賞あらん倘愆て隠して出さゞ

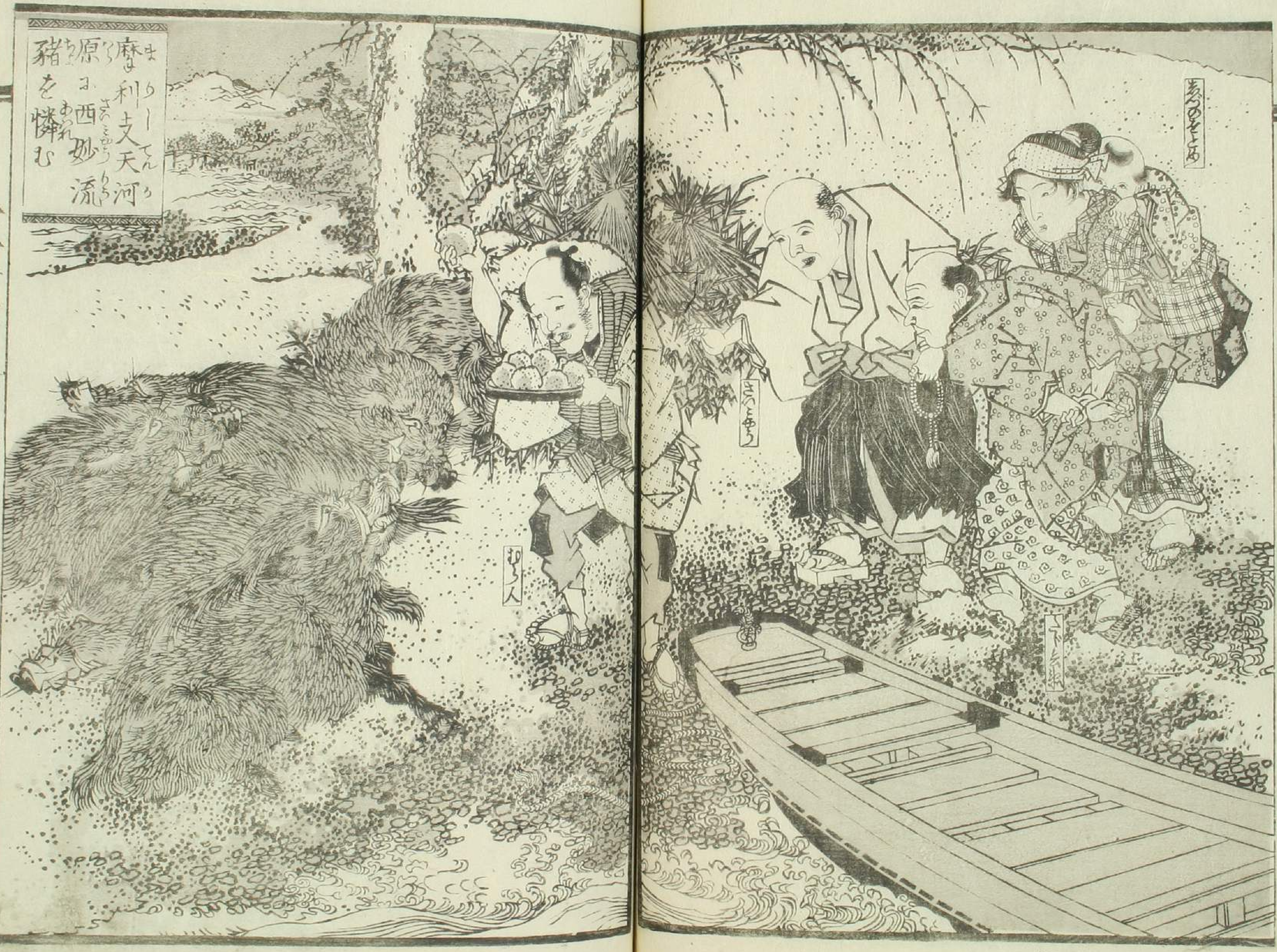
る者あらば其罪免るべからずと最も緊く掟て催促連りなりければ下晡に至る
まで牛一頭も牽もて来ず四境の村長故老們うち連立て城に詣て恐る恐る直訴
すらく今朝疾仰付させ給ひし耕牛のことは一村毎に徇示して隈なく募りたれ
ども約莫這四下なる荘客は田圃を鋤せず東西を駝せず皆馬をのみ用ひて
牛を使ふ者なければ哀れ一人も侍らず上總は牛ありといへども路近からねば争何せん今
日の御用は達がたかり侍りなんで饒させ給へかしと異口同様に陳しかば辰相これをうち聞て
其も安からぬことよと呟きて局の内へ其村長故老們を召入れさせてみづから虚実を
質し問ふに皆其稟まをす所始に違はず馬は黄金に牧あれども牛は他所より求めぬ故に
價直馬より廉からねば人皆欲せずといふと陳謝の詞を盤まをす佯誑ならず叱あれば辰
相は又困じ果て計の出る所を知らず姑且してのたまはく牛に亜て角あるは則鹿と羊也
羊は皇國の獸ならねば這頭に在るべくもあらず倘遊樂に大鹿を家に畜ふ者は是なる

しやと問へバ大家あるじと答ふそが中ニ前研河の邊なる村長ゆて弖次兵衛と喚
做ゝ者膝を拔めく稟ゝて目今尋させ由ある鹿を飼ふ者とてあることを咥びけ
れど老て最大なる野猪のよく人ニ狎るが我村ニ多くあり角ハなけれど牙長くて
いくばくるらむ御用ニ違ざれ欲と真実立告く請間へバ辰相許り眉を蹙ゆて开ハ
亦奇しかるえかし鹿ハ京鎌倉の茶店毛異鳥と共ニ飼押して人ニ観すもあるよ
きけども野猪ハ猛獣也人ニ狎るべき者ならぬニ开を畜措るハ故ありてそあらめ其義を告
よ甚麼ぞやと問復されて然ハ今茲十月の時候最大なる野猪六十餘頭皆
四足を結極りし儘虚舟ニ載せられるが前研の摩利支天河原の岸へ流れ着
しけれバ足を覩る者驚き怪みて打殺せよと罵るもあり否々殺すも益なし然ハとて助
けて陸ニ升しるバ遂ニ田圃の害を做さん只突流せといふもありしを摩利支天堂の別
當なる西妙と喚做る修驗者ハ特ニ慈善の本性なるが倶ニ河原ニ立出て其野





猪等を相ての寄う衆人よく他を観よ猛き獣も愆做りてハ皆是涙啫えて人ニ救
ひを求るニ似たり各位ハ知ずや昨日安房より來ゆげる人の噂を啈しニ
屬日安房ゆてハ國守の山猟ありけれハ素ニたる稀なる仁君ゆて御座せバ其猟獲の
ヨヲるも只生捉らせて敢一頭も殺さることを饒しあらずそが中ゆて猪猿野
猪鹿なぞの或ハ人を害ニ者或ハ田圃を暴き者ハ皆舫ゆらち載せて流し遣りあなとぞ
ゐえる然るが這野猪も亦是國守の流させゆひし猟の獲でありけん狀是も亦知るべからず先試
一二頭を疾這里へ助け登して何まれ物を喫せよとへバ大家有理と悟りて壮佼每二三四名
躰て其船を引よせ維留めて特ニ飢さらんと幸り每二三頭岸ニ援上すに四足の索を解く程ニ
西妙則宿所より夾参の握飯を拿よせて躰て是を投與るニ短き尾を掉り拜する像く喫ひ
盡せども逃もせず四足を屈て睡りて在り船なるハ是を見て羨しげや鼻を鳴らして立まくするを毎
ある西妙のよく憐て又衆人ニ向ひて寄う既ニ這二三頭ハ索を解ても逃もせず人を害する心なく馴く


摩利支天河原に西妙流猪を憐む

先度に懲りたらん。然るを那残まるとも助ずバ守の御仁心に似るべくもあらで不慈
不善の人とならまし。況やまいて八房に負ふ摩利支天神の社地なれバ神の憐みなくて依
きせぬに致是も亦元慮に出て知るべきにあらず。人々さらに心せよと諭せバ大家文諸
ろひて究竟る壮佼十名許或ハ其舩に乗移り或ハ水際に立なともありて左右して
其野猪を送もらく岸に扶登して見るに都て六十五頭あり孰もその大きなるものと
犢ににもしく牙の長きハ尺にあまり短きも七八寸八九寸なるもありけり剛毛頂に逆立て
現怕るべき猛獣なれども其人を慕ふこと豚児の母に逢るが如し躯て咸其索を解
捨て物を喫ますに麥の冷飯のみにて足るべくもあらざれバ黍まれ稗まれ拿出して
與るに喫ふこと始のごとく並て悦服の心あり又試に牽立て故来し舫に載せんとするに
皆な返巡して従ハず次の日山へ遣り棄んとて牽まくすれバ毫も動かず原来摩利
支天の惜ませ給ふならんそ其が儘にして遂もせず則村中で類ふと云這一
奇事を言詳に曳次兵衛が述え上しかバ辰相所々感嘆して肚裏に思ふやう我
君の御仁心猛き獣の上にまでも及せ給ふ盛徳を仰ぎまつれバいとく高し昔唐山姫
周の時齊の宣王ハ牛に易るに羊をもてせよといへり舟ハ只鐘に釁らん為のミ是ハ
大敵の戦車を焼べき牛に代るべき野猪なれども其牙尺に餘しといへバ今雪蕉火を
結著るに必や便宜あらん今不用意にして這物あるハ我君仁義の御餘福にて
且伏姫神の冥助もあるべし何の疑ひかあらんと尋思をしつつ然氣なく曳次兵衛にうち
向ひて牛に代るべき野猪ハ相応しからず思へども大きなるハ犢にもあらずして牙長ければ試に用
ひらるるもあらん余ハ強く立かへり西妙にその義を告て其野猪を皆まゐらせよ迅速
せよといそがせて則雑兵一百名におしろさせて曳次兵衛と倶に前所村へ遣しぬ這
他の村長故老ハ身の暇を取せしかバ皆欽びて退出にけり然バこの時次の間にて件の
奇談をうち聞る田税逸友が欽びハ更なり義通君も辰相が述え上たるに駭嘆

まで且感悦大かたならず。隨即加船の准備をいそがせらる。其野猪の來ぬるを待給ふに既に
あくるの夜亥中の比及に件の百個の雜兵らはヨヲ次兵衛並に西妙と莊客等を從
へて六十五頭の野猪を牽せて城にかへり來る事恁々と吻え上れば辰相則其歸猪を
書院の庭に牽入させて義通君に見せまゐらするに逆友及真間井継橋們の諸頭人をも
侍坐して倶に是を觀るに現られるに彌增て形大きく牙長く且其人に狎こと牛
馬に異なるべくもあらざれば義通君を首めて大家奇々と稱へて心を馮心なく思はれる。
當下東辰相はヨヲ次兵衛西妙們にうち向ひて若們皆來れ牛に代るにまの物は相
應しからず思召せども倘用ひられなばその功あらば恩賞は必異日の御沙汰に
依るべき事といへば大家欽び言葉もなくうち連立て退りける。偖而義通君は
奥に退きて辰相を召て仰せる義あり辰相則來り是を逆友に傳へて曰今宵大
塚が討る所那野猪にて物足るべきや否やまだ知るよしなければ御曹司尚御配
慮あり真間井縦二郎と継橋綿四郎を加勢の頭人として雄兵一千五百を授けて
目今野猪を載遣すべし悄船に推續きて戰粟約一千苞を岡の陣営に入
れさせむや。あるひは御曹司の賢慮は其の儀什麼と談まれば逆友答て然いふ其義は
信乃が遠慮あれば然る御諚もあらせ給ふべし。辨ひまゐらすれども故はいかとならば今の急務は
寄隊の戰車を燒果さまく欲するのみ。其火攻の計行れて鬪戰勝ば求ずして敵の
貯ふる戰粟は必我有にならん然るを今愁に加勢の士卒を遣されて且戰粟を入
れさせ給はば潛ぶといへども敵に知られて反て火攻の謀は空になりなん然ば加勢の兵を
亦戰粟を遣さるゝも目今は尚早かり先疾野猪を賜りて退りて信乃が火攻の謀
成るならば煙天に沖るべし御曹司は其を暗號にして士卒を從へ御船を我めて文明の
岡に御旗を建て自家の軍威を資け給はば犬士はさらなり士卒の勢ひ必や十倍せん全
勝疑ひなかるべし此は是隊より信乃が庶幾に所て今愚意をもて稟まうすも御

許容あらバ幸ならんと請ふを辰相ら聴く。其議ハ都てさもあらめ。然らバ真間井樅二郎秋季と継橋綿四郎喬梁ハ雄兵一百名を相授けて船中和殿の輔助ニせんと云ふハ御曹司の賢慮ニ違ひまつらず。又大塚が意見も称ふて両全穏當ならんといふニ逸友重て異議せず。随即辰相と共侶ニ又義通君の身辺ニ造やて事倭々と啓え上て退りて秋季喬梁ニ示し合する其言訖て。自他百十名の従兵ニ野猪六十五頭を牽せて悄地ニ城を出水際ニ立て準備の快船三四艘ニ其野猪を載せ人も皆うち乗りて漕せて前面の岸ニ届るニ今宵も信乃が時分を量りて。連りニ敵をうち驚する最中なりければ寄隊ハ都て立噪ぎて外を見かへるべくもあらざれ。さてそのく逸友ハ船も人もヨヲくかくしニ素より津近ければ時を移さず首尾を好く。看咎る者なかりけり。偖而田税逸友ハ尚秋季喬梁と其従兵と野猪をそが儘一霎時船ニ在せて十個の隊の兵をのみ従へて悄地ニ圓の陣営にかへり来つ則信乃





現八ニ前條の崖略を箇様々々と告知するニ言約ありし反て漏さず。初ハ牛の紹かさりし事後ニ野猪の奇事ありて六十五頭を紹とる且義通君の賢慮にて真間井継橋両頭人ニ隊の兵一百名を従せて野猪を牽せてあらしめし事の首尾を報知するニ現八武者助が歓びいふやう側聞せる古内倶数二頭人先兵権並て奇也々々と称賛き當下信乃ハ悄然と逸友ニ向ひていふやう宜ニ物ニ奇偶あるハ今ニ初ぬる事ならず。牛を求る牛を得ず。反て思ひかけもなき野猪の老なるをヨクく得たるハ是も亦人力人智の勢をもて致すべきならんや。且其野猪を憐て留めて社地ニ畜措たりける麻利支天の別當西妙と那加賀乃白山の社僧斎明と字ハ異なれども唱ハ似たり。是も亦因果自然ニ出て今古約束あるが如し。君謹白性とのひたべし。是なりて我両館仁義の御餘徳我伏姫神の冥助ならずとや。這妙用ニ至んやとのひて側を見かへれバ現八然えと點頭て卒とそのかに共侶ニ塵淨ふ

なり。相並びて。洲崎のかたと富山の方にうち向ひ遥拝して。其恩徳を謝しまゐらす。黙禱訖りて信乃ハ又逸友を労ひて我急策に意外なる。火牛に易るに火猪をもてせるその義ハ和殿の功なるにぞ。聞して時を移さず天ハ明て空もしらむ。先野猪と護送の頭人真間井継橋隊の兵まで疾喚集めて。准備をせさせやとらに逸友なりなる。図を下りて水際に至まで秋季と喬梁によしを告て共侶に其隊兵に野猪を牽せてかへりまゐりけれバ信乃現八ハ秋季喬梁に今宵の加役を労らひ。倶に其野猪を見るに実に六十五頭あり且うちに弥増て形大きく牙長くよく人にさへ押られず。敵を敗るに究竟の奇物なる上やあるべきと思ふ二犬士の歎びなゆるなり。直元なる古内倶教二们暇あるは老兵まで咸篝火の下に聚ひ来てあるこを観る者駭嘆して神所なりと称賛す。当下現八がいふやう。約角ある獣ハよく人に觸きて力あるは則牛と羊なり。鹿ハ其角牛より長くて。其角に技あらねども我蕉火を結着るに最宜きに似たれども其性痛く人を怕るゝ物に觸るゝの勇なけれバ。其を敵陣に放つとも必逃て度を失ひ何をもてよく戰車を焼んや。しかるに野猪ハ角なけれども牙長けれバ角に代べし。況や其勇あつて瘡を負ふとも只奮男十倍敵を撰まで駈まくるを。獵夫も制しかねしときこゆ。匹夫の勇士と野猪武者とハいふなるぞかし。這を思ひ那を思へバ今宵の所要牛にも勝まり實に珍重々々と誉れバ大家然と咎ふ信乃も聞て點頭のミ。含笑て眞面を復して。稚児を放ちて端然と衆野猪に向ひていふやう。如是安房生命猪なるに安房をあらし獵競の獲なりせバ我君の御仁慈をもて流されあひし。其舫の地に漂ひ来て又西妙们が慈愛もて死ざるを得るよしに我闘戰の幇助にもなれバ今一敵陣に放つに及びて或ハ寄隊に搏殺され或ハ倶に火に燒れて命を其里に殞すともらん遮莫仁君不殺の報恩其軍功ハ勇士に勝りて永く竹帛に載られん勉めよ

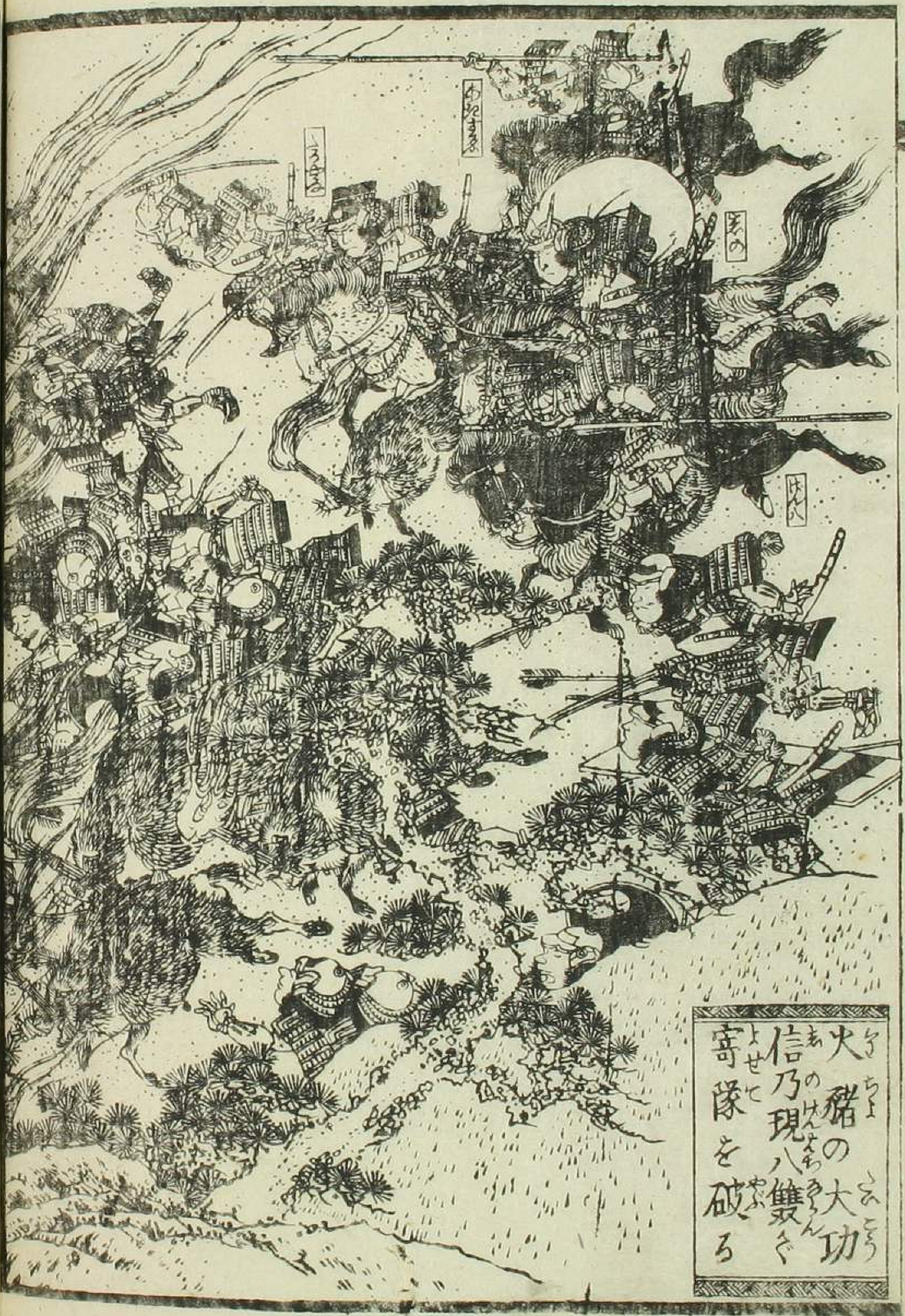
かしと説諭せば。野猪は孰歟を知るごとく。目を抗て見れば顆頭に似たり。すなはち欲する勢ひ
あり。然らば隊部を做えとて。且現八に向ひて告げる。大飼和殿は思ふや。寄隊は囲みて。
岡の二面に在り。其正面は顕定主にて。左右に衛る我殿成氏と憲房主なり。中に衛
我殿はいはでもなる。和殿の舊君又我大父大塚匠作の主筋にて御座も在
今は讎の仇なりとも。那隊に向ひて戦功を見えんは本意にあらざらん。その義什麽と談ずれば
現八答て。寔に然也。和殿は防禦の正使なれば。山内の隊に向ひなん。我は其子の隊を敗
らん。杉倉生と田税に衛我殿の隊を任しなば。迭に後易なかるべし。と解れて信乃は再議に
及ばず。又潤就鶻石古内と振照倶教二を急に身邊へ召て。告げる。和殿等は倶に五百の
士卒を領て。権且這陣営を成るべし。我火攻の謀行れて。煙天に冲りなば。御曹司出
陣ましくて。當所に御旗を建給はん。その折かの隊に従ひまつりて。後の進退は東の公翁の
指揮に依りねと。詞いそしく宣示ぬ。其言訖りて。左右なる秋季孝高涙と力へて和

殿等は御曹司の御意を禀なりしと云。野猪を護送の頭人なれば。誰が隊にありとも
従ふべく。倶に軍忠を見しまへとなられて。秋季孝高涙は相欽びて。防禦使達の隊に属るべき
へと請ひけり。當下信乃は雑兵數名。鐵奴を召て告げる。我が安房より牽せる犬江親
兵衛が愛馬青海波に飽までまぐさ秣を飼まて。又蝕くなへ牽よせよ。いそげ。と立し遣
すに。又現八に向ひて告げる。和殿の隊知れるごとく。那青海波は先館の扈表に親兵衛に賜りし
東國一の駿足なるを。今は大江親兵衛はあの秋使に立られて。遥に京に赴きしより。今に
至るまで歸り來ず。這回の大事に逢ざれば。さぞ朽惜かるべけれ。切て他が馬なりとも這戦
場に伴ふて本意に充んと思ひしかば。往る日稲村を出陣の折。厩舎に其の義を
告て。牽せ來て茲に在り。又只這意味あるのみならず。親兵衛が親なりける義士山林
房八は。身を殺して仁を做たり。我が再生の恩人也。然ば六稔前の夏。行徳なる古那
屋にて。他が将に死せんとせし時。我恁々と誓ひし義もあれば。その後房八が鮮血に染る

夏衣は我その折より藏め措て年來艱苦の中にだも敢喪ざりけるに料らずも今番の
役ある不肖の我身防禦使の大任を稟まゐりて這地の敵にうち對へば又の折をもて
他が義我名をならべて世に顯して命の親なる洪恩の其萬一に報んと思ふたるに准備ぬ。
他が漆血の夏衣を縨に縫せて衣に在り縨を則母の衣親に准へし舊恩を背に負て
敵に中らば身は一箇にして名は両箇且親兵衛の馬に乗らば則三役兼帶の任重
けれども已べからぬ義の仗る所あれば又今るに隔昨の鬪戰は只是敵の強弱を
試んと思ひしのミいまだ晴の軍陣ならねば那日は犬江の馬に乗らずも赤山林の漆血の縨を
掛ずして在りけるに時なる哉今日の鬪戰は両家の雌雄あくに在り我計畧行れまく寄
隊の三將を虜にせん狹猥らずは拙策齟齬ひて敵に首を捕らるゝ狹両箇に一箇の
大殺るれば那馬に跨り這縨を掛て寄隊を敗らまく欲す那見ゑと意衷を示
して前より雜兵に持せる縨を取出さして開けば現八も毎に感嘆せずといふ

となく直元逸友等の諸頭人と共侶に篝火の光に就て先其縨殘熟視
るに現八の折より記ある信乃が病中に被たる夏衣ゆゑ房八が血の塗れて其色
六稔の今に至りて毫も變らずなりけるを則縨に做まし又猶睛を定めてよく見れば
縨の中央に大書して里見八犬士隨一人犬江親兵衛金碗宿祢仁先人
義士山林房八之紀と共に二十八言を四行に誌したる用心正首なりければ直
元逸友秋季于喬梁多古内俱數二に至るまで當時の情由を云云と知ぬも
知らぬも推並て感じ思ぬ者ぞなき就中現八も歔欷として信乃に向ひて那行
徳に旅宿の折和殿と俱に艱苦を嘗しは我と大田と只是のミ然ば山林が義
俠の死を悼む六稔の久しきも只是一日の如くなれども報恩正に時を得て
けふ和殿の忠信至まり盡せり我ぞ及ばずと只顧誉て已ざる折から
又那両個の鎌奴を倶に呆まて面色なく來て跪居てかそるく信乃に向

ひく告訴やら剛才仰付られて那青海波を牽いて来んとて。十數条蔬
屋に造りし那馬其頭に在ざりけらち驚きて訝りて四下にヨヌく覘ひ居
まる雑兵に問ひけるに大家知らずと答ふのみ。其往方詳ならず。然りとて
闇べ走るなるねば陣中隈なく求索るに其影もなく迹もなし。意ふに那
馬絆を外して脱て敵陣に走り入りし歟。然らずば自家に盗児ありて轉して他
郷の人に售りし歟。孰れにしても我們が罪免れがたしといへども這事も亦坍ならば露
陣に在りて寄隊を防ぐ生死の境にいへば自然に守備の届ざりしをいかで饒させ
ぬべしと異口同調にうち勧解るを側聞きする現八は自餘の頭人老兵までも
さてもとばかりに呆れて口を鉗て在り。況や信乃は驚きを胸に難て愀然と現
八を見るに犬飼和殿はいかにおもふ。我救に親兵衛をかりしの故に青海波を
這陣中に牽せたれば。かゝる憂苦あらんかと悔て及ばず。火急の攻口今は天
明に程あるし。先我馬にうち跨て敵に逆なく戦ひ勝ば。異日又青海波の
往方を穿鑿る術あらん。各既に戦飯は飽まで腹に充たれども猶腰餉を忘る
べからず。真間井継橋両頭人は疾従兵に吩咐て這野猪の牙毎に皆蕉火を
附させよ。其餘の准備隊配は箇様々々と宣示せば現八その義を好と答へて
敢亦ヨヌ辯せず。各目今定めたる攻口へとうち向ふ。中央は犬塚信乃副将は真
間井秋季にて從ふ雄兵千五百餘名野猪二十五頭を牽せたり。左右の二隊を
犬飼現八副将は継橋喬梁又其一隊は杉倉直元と田税逸友を両将として二
隊の雄兵二千餘名を分ちて一千五百を從ふ野猪は二十頭々皆蕉火を牙に附
させり。又間諜々古内振照倶数二八五百個の士卒と倶に這岡山の陣営にあり倶に
喊聲を颺げ戦鼓をうち鳴らして自家の軍威を帮助けり。有恁りし程に信乃が
鰥奴ならば青海波の名馬を喪ひしに幸あらず其誅厳しかるとも罪免れしを欲ひて。



火猪の大功
信乃現八雙き
寄隊を破る

代るに信乃が跨座る。連銭葦毛の駿馬に雲珠鞍置て牽もて來ぬれば信乃は負たる鎧の袖に染血の縨をうち掛つゝ重藤の弓を握持つ。現八直元逸友秋季喬梁们と共侶に各馬にうち跨りける。約莫這両防禦使四頭人の鎧の絨縧太刀器械釬脛衣に至るまで打扮前日に弥増せるを細に名状すべからず。恁而二犬士両隊長は二面に立われ各一千五百の兵を前後左右に従へつ、炬を附る野猪を各真先に牽せつ。まだ明やらぬ星影寒き樹间々々に張亘したる幔幕一度に斫落させて、岡の下より敵陣へ勇み進む火猪の數を盡して放ち遣る勢ひ脱兎に異ならず。人畜一擾せるぞ、野猪は數萬の寄隊を怕れず前に備へし戦車の下へ潜り入り亦走り出る程に牙に附たる蕉火は又塩く戦車に燃移りて先陣忽地煽たる。其日の勝負甚麼ぞや。そは下の回に解分るを聴ねかし。

南總里見八犬傳第九輯巻之三十九終

# 南總里見八犬傳第九輯巻之四十

東都　曲亭主人編次

## 第百八十六回　衆侠を以孝嗣源公子を援く　西使を果ずして仁景春を敗走らしむ

尓程に寄隊は両夜安からぬ困る敵の為に駭されて睡りもやらせざりければ第三の夜真夜半過る時候より甚て岡の陣営静まりて戦鼓の音も甘せず篝火の光さへ細くなりしが原來二犬士は落後れて丈芸の夜を俟にやあらんと思ざる者もなけれど或は楯を布或は服に臂を持せつ打睡る者多かりけるに既にして天は明なんとする時候敵陣猛可に起り立て金鼓間なく天地を動す可の喊聲と共に箭を射出し鐵砲を發破て二面一度に攻下る其威勢始に似ず。剌最大なる野猪幾十頭扶牙に蕉火を結着たるを真先に拵かして二面齊一寄隊の陣へ放入るに其野猪は

殊に猛くて寄隊の多勢を憚らず。敵の先陣に備る戦車の下へ潜り入つ。突と前面へ走り出るもあり。然て其戦車を跳踰て人馬を擇ず駈仆せバ。迸る蕉火散乱して亦鋭く戦車に燃移るを。里見の士卒ハ隊より信乃が准備の鋭硝に小石を交へて嚢に盛せしを。ふくよかに携て其火に拡ぎ擲ちければ。火勢立地に激発して。車上の武者も車下の人馬も焼れて免るゝ者幾稀也。将是に加るに旦明の風さへ吹出て。軻遇突智の忌条涯りなけれバ。寄隊二面の大将なる顧定成氏憲房ハさら也。其隊長重勝在村素行們錐布五六箇隻裂八九頭人若兵近習までも心慌にけ。とかくに敢戦に擬勢なく。乱れて譟ぐ士卒と倶に火を避け煙に巻れつゝ或ハ轡を鞚し馬に鞭ち或ハ弦断る弓を執り或ハ一條なる鎗に両三人手を掛て相争ふて捫擇まする开が正面より犬塚信乃並に真間井樅二郎左右ハ則犬飼現八継橋綿四郎杉倉武者助田税力助以下の勇士等二面一度に隊兵を拔めて煙の隙より攻入々々中るに儘すゝ鏖て仆せバ。野猪も亦自家と幇助て慌く叫ぶ敵の雑兵を牙に引掛け擲ち勢ひ人畜進退合期して出没不測の开が上に寄隊ハ都て風下に在り敵に逐れ烟に噎びて面を向べき由もなけれバ将師士卒の差別なく。成直頼れハ敗走るを二犬士並に直元逸友秋季等も香同梁も二面一致に遅速なく猶脱れずと赶ふ程に霜冰る夜の長きも朝風寒く明にけり其の日ハ十二月八日ゆく扇谷定正の水路を安房へ推渡りて稲村の城を屠んと隊契りし本日にあなれバ。なかにも寄隊四萬のその中に然しも恥を知り名を惜む勇士なきにあらざれバ山内の隊の遊軍の頭人に。蕪絶内外進惟定と喚做せる者其副の頭人なる建柴浦之介弘望と只二騎馬を乗駐め両聲高く喚るやう。逢ひ自家の逃歩哉多寡の知れたる敵の為に火攻をせられしとて。逃て那里へ到るべきぞ。志あらん者ハ我に續けと辱め喝りて馬上に鎗を打振々々惟定ハ信乃が隊をうち向ひ又弘

望は現八を拉へて倶に血戦を歇ず。然れバ其隊に相従ふ雄兵僅に二三百名主を帯
助て死を見るまでも。一霎時は挑戦ふものから二犬士の先鋒の頭人真間井秋季継
橋蒿梁倶に兵を用ひ。中を開かせ捕へ竜て息を難しれど攻しかバ惟定と弘望は
太刀折れ勢ひ窮りて倶に陣殺して名を遺しぬ。其隊の兵もヨヌく殺されて命を免
るは稀なりける有恁りし程に山内顕定は逃る士卒に推立られて憶ぞ遥に延ひ
けるが這光景を見るゝそ他殺なまなと喚りて馬を返して馳向へバ隊長白石重
勝が遵りに士卒を罵奨して其里より返し合する勢ひ始めは敵ざれども猶二三
萬の士卒あり。然バ成氏も憲房も且羞且稍是に気を得て倶に備を建直す
と。三回斉一返しまゐるを信乃はうち見て毫も謀を随即人を走らせて現八と
直元们に示しまゐ。現八寇は遂ふべからず寄隊はまた返し合せて両度まで敗軍の
恥を雪めまく欲するなるん遊莫他既に其戦車を燔れて今は脚なき蟹に似



たり又何事をかよくせんや。各切所に引受て其疲労るを撃んと竪急に謀その
利あるをもて現八も亦直元逸友も二陣倶に退きて或は水田を前にあて或は
樹柆ヨヌみの地方に備を建る程もあらせず寄隊は三将隊長頭人三隊に
別れて驀直に返しまゐ攻破らまく競へども樹柆水田に遮られて人馬の進退自
由ならねバ前戦にまゐる時を移すも白石重勝焦燥て士卒に下知して巨盾を幾
ともなく深田の氷へ投布なく人馬を渉して短兵急に撲まく競へども二犬士並に
直元们は樹柆の間に敵を拄て左右なく攻めも破られず一進一退其機に称ふ
士卒は宛も脚の像く出没不測の術を盡せバ寄隊は撃るゝ者ヨヌなりけるに
ども大勢なるをもて又立替り入乱れて時移るまで戦ひけり。話分両頭。その朝
国府台の城中なる昨夜田税逸友が義通君に見参の折大塚信乃の意衷を
傳へて明日の開戦の進退を箇様々々と約しに違ふ事まで明やゝ夜比よりして闇

山の方に兵火起りて箭叫び喊の聲すさまじく。蠅々として聞えしかバ。義通君を東辰相と近習五六名を将て。自親城樓に升りて是を見て。原来田稅力助が如く。信乃が火猪の計略なりき。敵の戦車を燔くなるべし。卒然なれバ我も亦疾出陣して岡山に旗を建て軍威を資ん。高間の山の雲をしるべに。もとより見てのミ已ところに。遽しく城樓を下立ちたまへバ東辰相隊より。あの意をもて出陣の準備ある士卒咸戎衣まで。戦飯さへ使ひ果て。主将の出るを待程なれバ聊も時を移さず只老兵のミ城を守りて其餘ハ這出陣に従ざる者なく。鼠茶河の這方の岸に維置ける舫銭十艘にうち乗りて岡の下にぞ渡しける。然而義通ハ東六郎辰相を先に立して岡山の陣営に至る程に。洲崎島の古内振照偵數二八隊の士卒を将て出迎へて幔幕引匝らしたる儲の発見に就まゐらせて今暁二犬士と直元逸友等が勝軍の事の趣。且野猪の奇異大功猶且寄隊の進るを趕かへして。葛西の方に赴きける。自家の進退箇様々々と逐代に聞え上しかバ。義通欣び大かたならず辰相も是をうち聞て後の安危を知ん為に又更に斥候を遣せしに約莫半晌許にして其斥候かへり来て寄隊ハ假名町の這方まで退て返し合せん今惣々の地方なく。鬪戦の最中にて勝敗いまだ安定ならねど。寄隊大勢なるをもて自家危く見えけりと告るに義通驚きて。さらんにハ這陣営に安坐して居るべきにあらず。疾其地方へ駈着て信乃們を援けて雌雄を決せんとて件ても既に立まくなすを辰相急に推禁めて。現御幼年にて有ながら御勇武は傑出たるを感心の外なれども萬々金にも易がたき貴介公子の御身をもて危きと知食さずや。今大敵に向せ給ふ物体なし。彼窮寇ハ追ふべからずとハ兵書に本文あり。よしや犬士等が知る所なれども只其勝に乗る勢ひにて竟に件の術あり。犬士まで右の如し。況犬士ならぬ者をや。よく思ひなさるべからず。且國府臺の城郭ハ

是當郡の根本なり。遉岡山ハ咽吭也。然るを今この岡を棄て敵に向ふて勝んと云ハ。寄隊必この岡に據りて我咽吭を扼ん。然るときハ臺の城も守るに至らん。縱是を思へバ危しとも最殆くて、そハ君の所に御座さバ犬士們が退口あらて必後易るべし。臣等一二千の雄兵を領て馳向ひ敵に中りて信乃現八們に力を勠せんの議に任せ給ひね。と詞を盡して諫るを義通ハ頭を掉りて否よ我弱冠の身と見るまで今日ハ漫に賢ぶりて老臣の諫を拒むにあらねど大江親兵衛に比ぶれバ年二三の兄なれバ、そハ此地の主將を命せられて闘戰両度に及ぶまで一ツも敵の旗を見ず自家の闘戰危きを知らで坐ますものならバ異日何を面目にて館の見參に入るべきや。縱敵多くとも犬士と安危を俱にせんの覺悟なるハ饒しねと吶言がましく勸解て搗尻あふて慍りぬるハ辰相竟に諫難て有らん是非に及バず。衆皆御伴仕らんと応て更に陣徇なり。從ふ士卒四千餘名𪉩就馬を古内

振照倶教二を先鋒の頭人として辰相則後陣なり。義通の騎馬の前後左右にハ事熟たる老兵近習の每皆華麗に擐甲たる嬖名を鳴すもの扈從して翩飜たる白旗三四流寒けき風に吹靡せて水成岩器械の鞳を外して朝日に赫奕く隊伍齊々整正々と那戰場へいそぐ程に纔に十七八町ゆく端なく一隊の敵兵あり。其勢約三四千有餘両矢箸の花錦欄成る旗を殺めて這方へ來ぬるに撞見けり。此ハ是別人ならず上野國白井の城主長尾判官景春が手下一番の役の先鋒の頭人梶原後平二景澄と喚做る者なり。今其景春ハ郷向に扇谷定正の催促に從ふて既に出陣の時なるが五十子へハ赴かで猛可に漏出せる如く。今在地に在る事の情由を什麼と後に原るに他ハ獨立の志あり。其の故ハ定正の軍兵催促に從ひながら敵挑ふ事多く那隊に附ながら且其水路より安房へ攻入まく思とらふ風聲を得て冷笑ものを言ぬハ出さで肚裏に思ふやう。扇谷ハ淺智の將へ

昔より例もなき海を渡して安房の稲村へ攻入らまく欲するは時をも地理をも思はざる是浅知の致す所凶ならずして吉少なからん山内は聊思慮あり倶に水路より我なざしく国府臺を攻まくするは迂遠に似たれども必是其利あり然ばとて今ゆくり那隊に従ひ縦戦功ありとても我は二の町三の町まで一歩の地をも得るかたかるべし。要こそあれと尋思をしつ白井の城を出しより胡意中途に掩留して敢五十子に来会せず且間諜児をもて寄隊なる地へ着陣の事の形勢を覘知りしかば景春則隊の兵を或は百名二百名づつその地に遣し潜せて那身も既に来着なれども。迹を埋め影を躱して猶も動静を覘ふ程に前日の閧戦に寄隊の戦車如意ならねば勝負遽になりしかば其後寄隊は二犬士の籠りける岡山の陣営を囲み攻たるに。既にして或の暁天に寄隊は戦車を敵に焼れて総敗軍に及ぶ時又那長尾の間諜児が走りかへりて告しかば景春満面に笑れて今なからん里見の犬士們を必





敵の逃るを赶かく岡山の陣営空虚に做ん我その虚に跟入りて又轢く頭里を伐と捕りて。国府臺を攻入らば顕定主の鼻を開て兵権立地に我手に入らんとて猛に狼煙を颺く。近き四下に隠し在せし自家の兵を集るに梶原宇佐美直江樋口など喚做る隊長各其従兵を領て。時を移さず聚合来にければ其兵は二千七八百ありける景春是を二隊に分ちて梶原後平三景澄を先鋒の頭人としつ。樋口小二郎維龍をもて其副とし。則隊兵二千を授けて真先に是を抜せたり。却景春は後陣にて宇佐美直江們以下の勇士と雄兵一千八百有余を従へつ。河原の岡山を投て推かかる程に料ずも今這里にて里見義通の信乃現八等に力を勠せんとて亦岡山より出陣なる連りに士卒をいそがする其一軍に逢るは間話休題却説里見長尾の両敵は迭に其旗挑めく夙くも猜して叙次多しと思ふものから毫も礙議せず近つく随に鉄砲を発ち被け発ちかけられて姑且挑

義通(よしみち)善射(ぜんしや)勍敵(きやうてき)を斃(たふ)す

む程こそあれ長尾の先陣梶原樋口ハ倶に士卒を罵励して殺頽さんとて競へども。
里見ハ先鋒の頭人なる潤鷲振照よく相拄ぐ勇士猛卒死力を盡すに動もせねバ
勝に乗る勢ひ優りて見えにけり有徳し程に景春の後陣の隊長直江荘司包道
宇佐美三郎職政ハ隊兵一千餘名をひきゐて悄地に间道より近つき来る里見の後陣
東辰相が義通君を守護なして馬を立士卒を纒めて敵と自家の閧戰の勝負
甚とうち覰て在りける這一隊の背のうしろより哋と嘯て攻蒐るを辰相毫も驚く色
なく譟ぐ士卒を推鎮めて又蝕く隊を建更て敵を逆へて挑み戰ふ這後陣と
先陣ハ間二三町の中に在り両所の閧戰遑なければ義通の騎馬の邊にハ
老黨近習を除くの外従兵四五百に過ざりけり然バ長尾景春ハ夙く是を
覰ひ知りけん雄兵八百餘名を将て岐道よりしく忽ち馬と驀直に義通の隊を
蒞く推蒐る疾と宛颷の如く短兵急なる程に勍敵に里見の士卒ハ吐嗟と





皆蒐逆ひ推隔て鼓噪され血戰して義通の近習白濱十郎七浦二
郎朝夷三弥老黨鳥山真人なンど嗅做る若就中善敵に中りて士卒を励し
踏入々々ちくを先途と銘結ぶ刀の鍔音馬蹄の响沙を蹴起して刀頭より火出る
まで戰ふりの景春も亦東國に其名ゆえし猛将なれバ鋭を権き固を辟く。
義秀親衛の勍勇なるよわらねバみづから馬上に鎗打振て近つく敵を突伏々々透も
あらバ大将に組んと枕む虎威狼風に里見の士卒ハ心なうずも辟易麻痺して撃散されて。
既に危く見えしかバ義通馬を東西に馳遠らし馳返して敵を擇ぞ射て斃て矢鏃
速の手煆煉にあなれバ弦に応て亲々と斃れざる者なかりけり現この君ハ童年未年
尚十五に足ざれど世家良将の児孫にて且先祖義家朝臣の少年ぞ一時ほも似されバ。
自家の士卒ハいへバさらん敵も亦心ある老兵ハ舌を巻て感ぜざるもなし或ハ又勇ありて。
名を好む壮士ハ敢其死を見かへらで前前に枕むもありけり然バ這乱軍に義通

危かりければ。里見の先陣後陣の隊長東辰相洞就鳥古内振照倶教二以下の
頭人武勇の毎疾這敵を撃ち退けて。主将を拯ひまつらんと。心弥悍く悩まども。
前後の敵に噛締られて毫も遑あることなければ。士卒の胸臆皆安からず怯れぬに
あらねども竟に敵に推戻されて總敗軍になりなんとす。浩処に誰とも知らず西北のかた
なる支道より走り出来る一隊の客兵其隊僅に一百許。擐甲なかりし然もなほ皆
身甲に釬脛衣して手に長械を挟み。一刀ありて騎馬武者なり。其が中に只一個頭
領なりんと見ゆるあり。其人青年二十可り面の色白くして骨相特に賤しからず。身
黒鳥革鍼の敗金甲を擐く。火形打たる頭鎧を戴き。腰に大小の二刀を跨く。
手に雙鈎の鎗を執りたる相貌堂々威風凛々衆に先だち聲高やかに我名景
春無礼なせそ。里見八犬士の知音なる武藏国の浮浪人政木大全孝嗣あり。
退けやツと喚れば左右に従ふ老壮四個の猛者們も衆聲昔めく我其數ある

祿ども亦是犬士に由縁ある石亀次団太越鄭二三向水五十三太枝獨鈷素手吉
乾父乾児共侶に里見殿の加兵ぞと名告り相叫りて勇勢に撓も先を争ふ其
隊の壮佼五六十名持たる長械振閃めかして敵の乗たる馬の脚を薙仆し拂ひ落して
起んとするを撃殺も勇悍一致の擽ては長尾の士卒は驚謬て憶も潑と乱るゝを
孝嗣なりと割く入る鎗の尖頭に血を濺て瞬息間に敵幾名欲殴伏せ又刺
殺せば次団太鄭二三五十三太素手吉皆共侶に氷成も太刀を手ふく抜翳して敵に
中りく術を盡せば里見の老黨近習の毎鳥山真人白濱十郎七浦二郎朝吉人
三弥以下の雄兵是に氣を得て装更ま刃頭尖かるなもなければ長尾景春怒れる堪
ず馬上に聲を昔立て逢ふ自家の兵毎哉敵に加兵のあればとて一百名に過ざるに
何でふ怕ることやある疾推包で撃る果さぬやと哮り喚て近つ敵を鎗の拂ふ
奮撃る突戦猛将の下に不勇士なければ景春の隊の兵ら又その一句に罵励さ


文溪堂藏

孝嗣大ゐ景春と戦ふ

まそ。建更しゝ挑戦に三陣の野戦五角にて勝敗果しなかりけり。詰合両頭に
程に犬江親兵衛は前月の下旬に秋篠将曹廣當と那石茱師の頭を既に
相別れしより。則廣當の教によりて敢東海道に赴き尾張を過りて信濃路より
上野及武蔵下總を歴て恙なく安房へ還んとそ。姥雪代四郎以下の伴當夥兵們を。
いそがし立ても程に云の次の日より那名馬走帆は何とかなく病る容ありて豆草るども
多く喫ざ。路をもく遅く做りしかど。親兵衛は心長閑く。よく是を勦りて敢亦
うちも乗らず夥兵們に是を牽せて只は其行に儘せしかば一日僅に四五里なく歇
店を投る夕まくり左右する程に稍信濃の馬籠に至りて歇を客店に投めし
宵より走帆は疾病いよ〱重くなりて臥ぬ随に起も得ざれば親兵衛痛く是を憂
ひて伏姫授與の神薬を拿出て其舌に塗らして親これを飲せしに人畜其差
ある故に馬には其效あらざる歟或は是死病にて神薬の至妙なるも及ざる者なる歟と
思難ゝ徒に只這病馬の故をもて逗留三四日に逮びしかば代四郎紀二六心焦燥
ち随に倶に親兵衛を諌てやう。和子の慈善は今に創めぬ愛顧畜生にまで厚
かれ人の及ぬ所なれども瀬京師の厄解て還ることを得ざりしに又那病馬に拘らひて
逗留して日を費しぬれば只是智者の一失殺仁義も時に因るべきのみ。速に安房の
かへ思へば両舘は言もさらなり妙真刀自犬士達の朝居夕居に企てさぞ候不樂て
在さんにこの義を思ひあらぬぞやと従代は説出て喞言がましく急せば親兵衛是をうち
听て然なり我も亦其頭の事を思はざるにあらねども爭何せん那馬は虎妖對治に大功
あり那時他よく我を騎せて進退自由ならせずば我何をもて那功を奏して安房へ
還ることを饒されんや然るを那馬病臥てるとて去向をいそぎて棄て去なば不仁不義の
甚しき者心牛馬にだも不如となられんこの故に我は走帆を政元主の賜へるとて敢鍾
愛するにあらず只那大功あるをもて今其死活を見定めずして棄るに忍びざるなり

のみ然ハあらぬや。と辯論せバ代四郎紀二六感服して。又ゆくりもなかりし溏地喜勘
太伴當夥兵等さへに吵知りて現這神童にて這仁義ある今古和漢に獨歩
まさる感嘆せざるハなかりけり。悠而あの次の日に病馬走帆ハ斃れしかバ親兵衛只顧
嗟嘆して。あの馬異日戰場に用ひなバ関羽の赤兎馬にも優らんに縁薄くして其
里に牽るゝも嗟夫惜むべし。他今馬ハ籠の御にして命空くなりけるハ昔義仲の愛
馬を牧せし因ある縁あり。名詮自性狭くも亦一奇といふべくのみと獨語にて遽しく。
逆旅主人を召よせて件の馬の空骸を。今宵近き花山の陰に瘞んとて相譚に敢旋
陀羅の宗を借らで良を合せでと思へバ當下親兵衛ハ代四郎を喚さいはせて要る
暑裏に富山にて。今娘達を馳来ける那靈馬の亡骸を瘞めあひし。その折ハいかにかなれ
やらん。今井に徴にあらねども我聞唐山古昔の制度に狗を埋るに蔽蓋を以し馬を埋
るに蔽帷を以もといへり。あのる礼記の檀弓に載であり。蔽蓋ハ敗たる車の蓋也。蔽帷ハ

破れしたれ布也有係れども今我ハ旅にしあれバ然る東西なし。大袱ハあるべきに両箇許縫り
合せて。走帆の亡骸を裹せあへと吩咐れバ代四郎聽て異議もなく。噫和子の博識なる
今稍おくろ粉ぬひ咀等が富山で那靈馬を埋めし折ハ品山嵐の内に東西なしに然る
故事を知ざれバ直埋にせしのみと答て躯を退れて。抑紀二六と夥兵等にも件の事を徇示
あらく形の如く執行ふに鞍と鐙の遺りしを親兵衛則逆旅主人にあたへさせて預ら
せて異日あの地の道場なる馬頭観音院へ藏めけり。然バ達夜丈瘞駿の事果しかバ。
其詰朝親兵衛ハ代四郎と紀二六と喜勘太伴當五個の夥兵等を相従へて只管に
路次をいそぐに。あの時十一月ハ既に盡て。十二月五日になりにけり。あの日親兵衛ハ一霎時
茶店に憩ひし折代四郎に喁くやう我ハ姫神の冥助にて。文学武藝何くれとなく自得
せざるハなきに只水戯水馬の術とのみ。いまだ学得ざりしかバ昼裏に寄子崎の賊難に既に
溺るべかりしを叟の援けによりて恙なかりき弁を朽惜く思ひしに昨宵我夢裡に身ハ又

富山の巌窟に在り。姫神出現ましまして水戯水馬の一術を教へ玉ひ丁寧に且宣ふやう。我始より這一術を汝に教ざりけるは胡意欠く所あればぞ。懲して自から其儀に悟らしめんとてなりけり。然りけれども今戰國の時に當りて水戯水馬を学び得なば戰場に臨む事にとも何をか多く波を被ぎ水を渉して敵を征せん。或は君將の危きを拯ひまゐらせ或は身の亡ぶべきを保つに至るも水を知ざれば善しからず。勉めよかしと諭し給ふと思へば暁の鐘枕に響きて。忽焉と驚覚ぬ。覚ての後に是を思へバ実によく学得たる身に備る者に似たり。意に異日館のおん為に水戯水馬を用ふべき時しもあるべきぞと告るを代四郎うち聞て夢は五臓の疲労に成ると人はいへども和子の夢は久しく京師に淹留せられて日々に故郷を思ひ宿の所以のまゐりたる水戯自然と実事あらば必是姫神の神護ならん霊夢にてぞあらめ。と言正首に答る折から忽地四下闘なく人東西に奔走を开ける中に土民們が這茶店の邊に立在て且相告るやう多くは其人のありや。和主知るや。今番扇谷の管領家ハ安房の里見を怨とせしよしありて敵に山内の管領家と和睦をなして且近國の諸侯を連ねて海と陸より安房上總下總を一時に攻伐んとて。寡日猛可に這頭へも軍役を宛られしに今朝亦再度の催促あり。水路は扇谷殿御父子向せ給ふ。軍兵約莫五六萬なるべし。又陸路の寄隊を当ふ下總なる行徳口へは扇谷の御嫡子朝良君と千葉自胤主と両大將にて大石兵衛尉殿副將たり。（大石石見守憲重ハ始兵衛尉たりしを後に石見守に轉任せられども地の民ハなほ舊稱に依れるなり。兵衛尉より石見守に轉じたるハ本傳第四輯に出せり。）亦其勢二三四萬なるべし。又國府臺の城へハ山内殿御親子と滸我の御所と両御旗を從ふ。城主隊長より其兵六七萬なるべし。通計ハ一十五六萬の大兵を以て海と陸より攻られなば哀れ安房殿も義成を滅亡なんといへバ。一人が然ればよ里見殿ハ今の世に稀なる仁君也と云噂ハ逆知るやうに八犬士とかいふ猛者あれバ非如軍兵ヨヌるともをと束ねて徒やハ負ん。やがて洲崎に敵を逆る水軍の大將ハ國守里見殿也。

軍師は犬阪防禦使は犬山犬村隊長ヨヌろ又行徳へは犬川犬田國府臺へも國守の公子義通君を將として東六郎後見たり防禦使は犬塚犬飼その餘も隊長ヨヌクリとなハ実言敌虚言敌开は左まれ右もあれ左右村寺の事なれ歳梢莊容暇ある骨休せで夫役に差れ軍要金さへ召るれバ今茲は餅も搗くとかくんそれは御互々々と両唯の郊原問答勤し紀中に空言を唱く高聲山里人の忌憚りも稍肩と材槌天顚掉低げて卒とだろのに東西へ別れて赤復走りけり余程に犬江親兵衛さ心ともなく件の言の首尾を悉知りて胆を潰しつ代四郎共に目を注まるのを言ゆる当さまに代四郎と倶く去ろ后て茶博士に錢十文抉茶錢を還せバ紀二六共らも發足を放ち外に立て駒兵共侶親兵衛に相従まで行て十町許にて山の陰の樹栊深れ処に山神廟ありけり這里は乾淨なる処まて人煙遠く便り宜しけれバ親兵衛たくに立とりて代四郎們に呾く要事も具に耳に入りけん我君危急の一大事を人の噂に洩知りて翅なき身を愁るのミ因てなりに武藏より船を求めて安房へ還らまく欲りすれバ必敵に搦れて渡ることを得ざるべし下總なる真間國府臺は則是今番の便路にて且御曹司の那城を守らせ給へとのおんなれバ上野を歷て武藏に來まく千住河をうち渉さバ那城に參り易かるべし今よりして日夜を分ず長途を走りて疲労なき為に姫神傳授の神薬を服するにしくはなし我這一隊に分ち與へて神薬を倶にせざれバ後るゝ者に怨とられんぞよとくとくといそがせバ代四郎その義を諾ひて腰に吊る薬籠より那仙丹を拿出て紀二六並に喜勘太駒兵伴當們に些づゝ嘗させて我身も又是を嘗るに心地いと清爽まて千里も一日にゆくべき勢ひある然ればいそげと皆共侶にその処を立出て走ること奔馬の如く幾十里欲ひと日に來らけんその日の下晡に薄氷の麓に造りし這里に新関ありて門戸を鎖て東へ過る人を號さバ親兵衛們はそこに至りて只得其頭に歇店を求めつ。

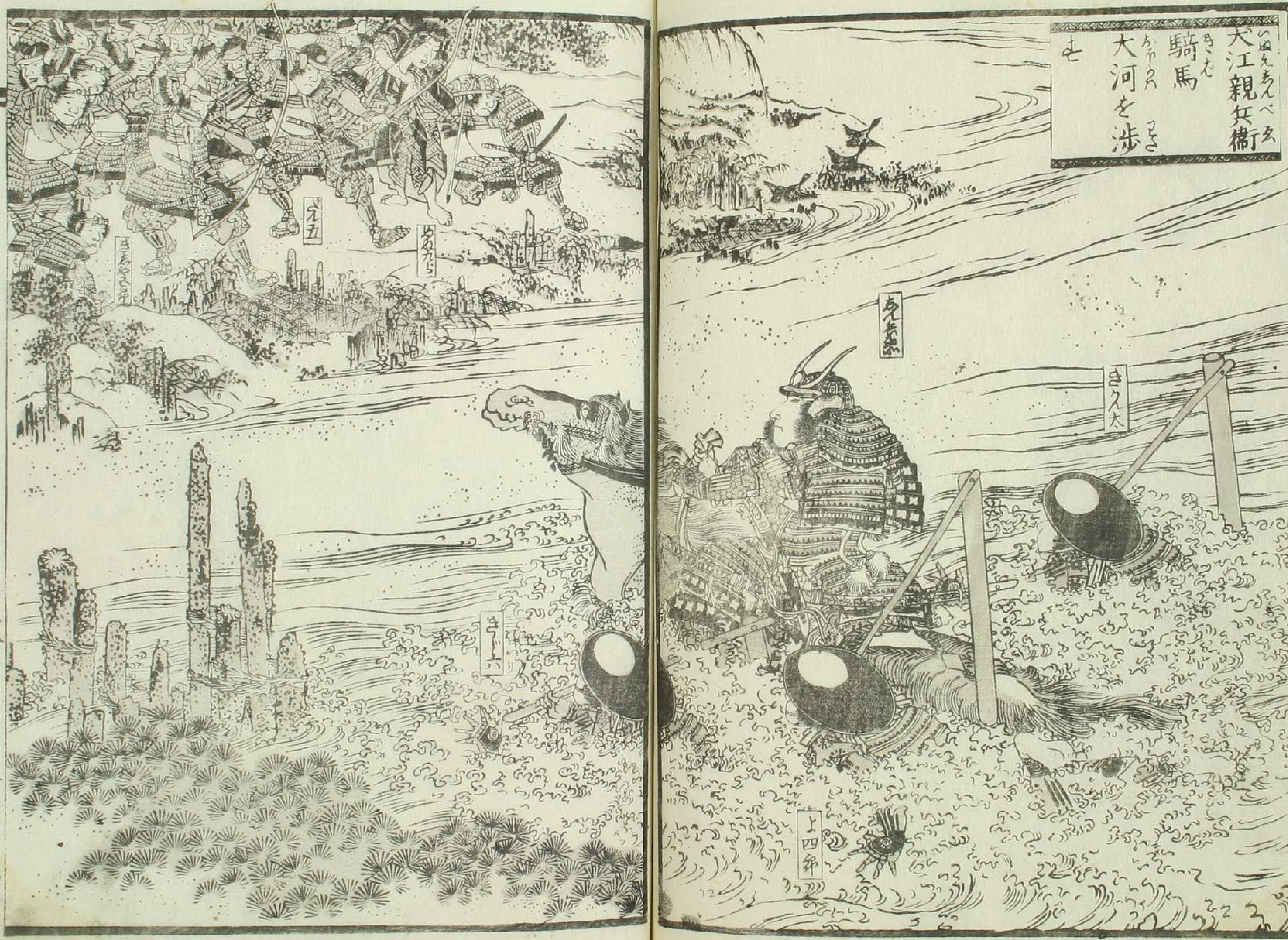
詰朝早天より歇店を出て悄やかに人の知らぬ山路に入りて峯に攀り渓に降
て夙く武蔵に至らまく欲すれども路に迷ひて投もてに出ぬ山路に日暮せども神
薬の奇效ありて主僕倶に餓ず疲れず心るくも二四日を歴て十二月八日の黎明に
武蔵なる石濱の城に程遠からぬ千束村の邊に来にけり然れば昨日より山内里見両
敵は葛西假名町にてあり閧戰の勝敗又杲泰河堤なる岡山にて攻戰ありと定まるも
街談巷説に知られしかば親兵衛はあるに至て代四郎紀二六喜勘太彩兵伴當們を
遠近く身邊へ招よせて既に知る館の御大事なり是逼りぬ今日岡山の
御陣に参りて御曹司の御先途に遇ざれば後悔臍を噬ん然ばとて捷路を歩りして
墨田河を渉りなば石濱の城兵等が怪みて赶蒐て搦捕まく甘弁は怕るに足らね
ども無益の敵に拘らば今日の閧戰に値がたからんとの故に千住河を憑渡して亀
蛾葛西に迭りなば岡山へ近かるべし黎明なれば人稀なり各其の戎衣甘に長柄の

器械を執ずもあらば敵に遮られて不便なりん見るに那里の白屋の背門に倚りかけたる
連枷ヨヌあり連枷は軍陣に是を用ひて其利ありとかの唐山の書籍に見えたり
然とても農民の田器を奪ひ含うべきにあらず價を遂さば罪なけれ喜勘太その義を
あるものぞ其残れる連枷に是を結附てよとありて懐を攪捞りて方金二片鈙三片鈙
紙に拈りて合せれば人皆並て親兵衛が傍ら折ゆを閑あるぞ心正しきを感じける
當下大江親兵衛は伴當に駈しまある甲冑櫃をとら開せて鎧を擐け兜を戴き
大刀を跨身を固めて且伴當が肩にかくる鎗を執て挟めば代四郎以下の衆人も
皆遽しく戎衣まゝに代四郎紀二六は行李の内に身甲あり其身甲あるものは皆針
脛楯のごふしく喜勘太が倉ものて来ぬる連枷をふうふうに受取て准備立地に成りし
かば親兵衛は先に扶して千住河原を投て走く程に後方み續く代四郎を屡見かへ
らば要より我は夜の夢に姫神我に水抜水馬を数ふと見てより既に是其

術を学びし者に似たるは今日の所要に違さんとぞ。夢にや入りけん幽冥人間異なれども今も尚影に立ち形に添ひて侍るまでに慈愛のあまる神恩の過分なる仰ぎまつるも猶畏し。といへば代四郎點頭て然也々々。宜なり汝が那御神の恩徳は小司一家も相同じ。実に是天地父母國土君上師授神佛の六恩を兼ぬるなりと答る間に千住なる大河邊に來にければ親兵衛後方を見かへりて眾兵伴當們にいふやう。這大河を渡り畢なば則下總なり。那里は今闘戰の最中なれば這頭に船の渡もあるべからず。恁れば皆馮渉して前岸へ至らんこと勿論なり。縦今季冬大寒の時なるも各々既に皆我神薬を服したれば水に入るとも凍ることなけん。その餘は心易かるべし。約莫水技を知るも亦得ざるも倶に神薬の奇特にて溺るゝ者はあらじ。或は連枷に相連り或は逆に手を推携へて我に續きて渉るべし。といひつゝも既に水際へ找む折から怪しむべし前面の岸に走り出たる一箇の馬あり。疾こと鳧の像く河へ水と入るよと見る間に其馬殊に逸早く這方を投て近つく程に親兵衛代四郎は[illegible]紀二六喜勘太自餘の伴當他は甚麽とものに倶に訝る开が中に親兵衛は眼敏く代四郎にいふやう。叟はいかに見るや。那馬の毛は我愛馬なる青海波に似たるならずや。开れ左まれ右もあれ那馬必駿足なるべし。今大河を渉る素聊も撓むことなく。半身波より上に出て其速なることゆゝしや。我今戰場へ赴くに良馬を得まく欲りするなる哉。登るを待て騁駐めぞやといふに代四郎紀二六等喜勘太伴當相謀りて行李に附なる麻索を解て伸して相構て登るを遲しと俟程に件の馬は水を出て汀渚に立ち身震して敢又走りもせず徐に這方へ來にければ大家倶に立蒐りて輒くこれを牽駐めけり。登時親兵衛立より見て憶ず含笑て叟よ今我が知る違ぞなき。是紛ふべくもあらぬ我馬青海波にぞ有ける。是甚に我御使を奉りき京上りせける日は水行なる故に是を牽せず厩櫪當番に預け置しに京師にて政元主の那走

帆を賜りしより。虎妖對治に我を幇助け。功に愛て捨るに忍びず。然とても這青
海波を忘れかねに非ねども。現兩雄ハ雙立ず。晝夜は同時に長からず。那馬去て這
馬來にける。抑得失ハ。天の時ぞ然るなれ。這馬遂に安房より來にけんの鞍鐙ハ。
先侯の臣等に賜ひし隨にして。上總を過り下總を歷させて。我身を迎る忠信
情義那走帆に勝れること十級百級。夢歟現歟幻歟。奇なる哉馬にあらずや。と稱て
感嘆なゝめならず。代四郎紀二六以下の伴當雜兵もひとしく一唱三歎。この神童にあら
ざりせバ。恁る奇特に遇ふべしやと思へバ心勇れて。縱今日百萬の大敵に中るとも何でふ
勝ざることあらんやとぞ。皆憑しき附驥の情あり。當下親兵衛又いふやう。昔唐山齊の
管仲は深雪の山路に迷ひし折。老たる馬の行くに信せて還ることを得たりとや。我も亦この
青海波の行くに鞅を儘せなバ。必や御曹司の御陣に差ず届るべし。各ハ馬の尾に
維り或ハ鐙に手を掛て。倶に渉しね。溺れなせそと云ひつゝ鎗を突杖馬に

跨りて。腰鞆しつゝ鐙を蹀拍て。河へ颯と騎入れバ代四郎紀二六以下の伴當雜兵も
倶に身を跳らせて。續きて飛入る河水ハ現神恭の奇效なるべし。温かにして冬を覺ず。且
水技を知ざる者も身ハよく浮て易かりける。其が中に親兵衛ハ靈夢によりて水戲水
馬の術をよく做するにぞ。馬ハ名に負ふ青海波の駿足。この時見れて水中陸より
易かりければ代四郎等に先だつこと五六反。前面の岸に近つく程に思ひかけなき敵あり。
其隊僅に五六十名。皆鮫皮甲冑に身を固めて。槍棒眉尖刀を引提るあり。眞
弓角弓を執れるあり。東の塘堤に立見れて。親兵衛をうち漉さん。雪囲め又雪囲
めて射破る征箭ハ雨より滋く。射て落さんと競へども親兵衛ハ毫も怕れず兜を傾
け馬を泅せて。前面の塘堤に馳陟るを敵兵們ハ相逆へて推捕に籠て戟なんとす。
當下親兵衛聲耳高やかに若們ハ是何人ぞ里見の八犬隨一人犬江親兵衛仁を
知ずや知ずハ本事を見せんぞといふより早く鎗を伸て打拂ひ又打仆して向ふ前





文溪堂蔵
八犬傳九輯巻四十
文溪堂蔵

なれ勢ひに猶懲ざる川鳥の群立ごとく挑む程に姥雪代四郎直塚紀二六
漕地喜勘太伴當夥兵も推續て渉し来て敵を擇ず連枷もて毆伏せ撻
折く利便の器械其機に稱へば敵は乱れて逃走るを猶漏さじと赶蒐るを親兵
衛急に喚返して曳よ直塚も惴るべからず無益の敵に時を移して御陣へ参る
期を喪はゞ後悔其里に遠からん因て憶ふに今此の地方に這頭の敵のあり
けるは必故あらんぞや我猜するに這奴們は寄隊の士卒なる歟野武士山寨の類
ならんずらむ其が中に巨瘡を負ふて仆臥てる這奴們の尚死ざるもあるべきに其来
歴を責問ずやとのふを夥兵もろちぞて一個の傷瘡児を左右より引起して捷惱して。
出処来歴を責問ふに始は頼陳しかども緊しく撻れて苦痛に堪ねば竟に招すらく
ゐるぞ刀祢們やよ実を吐ん姑且怒を饒しねへ小可は這衆の夥計なれども実は活
間野目奴九郎と喚做る馬盗児ではべれど昨宵岡山なる里見の陣へ潜び入て

良馬一頭を竊得て牽もて這頭へ来ぬる程に豫相識る野武士の頭領二四的寄
舎五郎須々利壇五郎と喚做る猛者等が支黨五六十名を将て前面より来
ぬるに逢ひ彼因て馬を售らまく思ひて見せて價を定むる程に馬は猛可に暴斷て
走りて河へ跳り入りしを赶へども逮ざりしかば呆れて長視て在りける程に豈計んや其
馬を大人に獲られつゝ跨て伴當達も共侶に這方へ渉しあふにあらん寄合五
壇五郎の衆人は矢場に大人を射て落して馬を奪んと構へしも大人の勍勇一
人當千伴當達さへ手煉ゆゑ瞬息間に三ヌ人の敵を毆散し數多仆して事
竟にあてよ至れり有恁れば是小可は那夥計ならねども饒させ給ひねと勸解けて
只管口説けしを親兵衛つらく聴果て代四郎に向ひていふやう曳よ我主の馬の来歴を
今こそ思ひ得たるなれそを必犬塚ぬし犬飼が我這回の闘戦に遇ざるを最惜ませ
切て我愛馬なる這青海波を戦場の乗馬にならせまく欲する故に遥に安房より

牽せ来つ。却陣営に轂がれて在せけん。倘ならずは這馬の、いかにして岡山なる陣所に在りけん。這盗児目奴九郎とやらんに竊れて、彼に至れる由あらんや。因て又憶ふに這馬昨宵目奴九郎に竊れずして陣所に在るとも、或は又犬塚犬飼がうち跨りて今日の戦場に潜むとも、今我御陣へ参まくする当用に違ふ所、折よく彼に竊れ来て我を乗せしは、塞翁が馬にも似たる倚伏の自然奇なるにあらずやといへば、代四郎紀二六なる鼯兵伴当推並て倶に感嘆をなしける。当下又親兵衛は目奴九郎にうち向ひて、やをれ盗児、なほ知ずや、是なる馬は曩に我老館の我仁に賜りける青海波といふ名馬なり。然るを你胆太くも竊み合て牽去て、悄地に売まく欲したる其罪萬死に当れども、幸ひにして件の馬の我に返りて、今日戦場の用に達ことは赦すべし。因て首を接しゆるさせん。今より志を新にして人並なる世を渡りね。尚竊む疾耗ぎして非義不良の銭を欲りせば、你が頭顱はあるものゝ生涯との義を忘るゝなかれとて、うち

いひ懲せば、目奴九郎は唯々とむかひて、大地に額を推下げて、御宥りいひしが、既に隻脚を折れて起居自由ならざるに、何でふ昆季抒を做ゐんや。助りて元罪饒され、御洪恩の数々びに何をかな呈せんと思へども、今路次なれば些ばかりの東西もなし。見るに御伴当は素肌なるが早に過ぎたなり。戦場へ赴きあるが、那件なる傷痍児們の甲冑を被せておくて由ためぞやといふを、親兵衛冷笑ひて、現盗児は盗児相応なる口誼をしもいふ奴かな。勿論軍陣に臨む者、名ある敵を轂る捕れば、其器械を相添て実検に備ることを分捕ともいふめれど、我は然ることを欲せず。古の君子廉士は盗泉を掬ばず、瓜田に履を容れず。這奴非敵の奴非甲冑を剥合て何にかせん。卒ゆくべしと、代四郎等をいそがしくて立ける折から、背のかたなる樹の蔭に人ありて、呀よ犬江大人等一等ありと喚留めて走り出たる二個の武者あり。是則別人ならず、剛才親兵衛に轂られて、迯て命を免れたる、当敵野武士の頭領なる二四的寄舎五郎、須々利壇五郎にぞ有ける。

既にして這両個の頭領は犬江の馬前に近つき来て跪居つゝ倶に許すべう小可們が眼ありながら係る豪傑を認り得ず漫に其馬を欲する故に弓を彎き箭を飛し毛を吹て瘢を求めし後悔の外ならず既にして犬江親兵衛と名告給ひしに心付つゝ皆逃亡れども遠くは去らず悄やかに還り来て樹蔭に躱れて便宜を待けるに君が愛馬を竊とる這活间野目奴九郎をさへ擒しあへり寛仁大度にいよゝ景仰の思ひ切なれば這身の罪を見かへらで出て願ひ稟まをしまゐらす海容あらなん抑小可們は原是當國千葉の退糧児にて倶に氣を使ひ俠を立る故に乾児なる者數十名あり又年来交を結びたる野武士の頭領に高飛車和女九郎劔峯瘤四郎と喚做ものあり他們は原是常陸國の人氏にて其隊に従ふ破落戸亦是一百十數名あり去る際に這回扇谷山内の両管領里見殿と兵を構て寄隊當國に發向せしと傳え聞て此小可毎は里見殿に従ひまゐらせまく欲りせしに和女九瘤四們の

議を用ひず他們は渠我殿に従んとて路次に迎へつゝ慇々と請稟せしに猶疑なとよしあつて承引ざりし恙を饒されざりし故に和女九郎們は里見の戰粟を奪略まく欲して五十四田の陣営の空虚なる折急に推寄て陣門を打破り守陣の老兵を殺走らせて奪略る所の戰粟千餘百苞毀咸是を船に積載つゝ曽来河を溯り漕のて去まくせし程に追隊の兵に殺禁られて其船を棄捨め剰和女九郎瘤四郎は里見の隊長田税力介とやらんに搦捕られて竟に首を刎られきとふ風聲耳によりて是を知りぬ然れば我們は始より夥計不合せし故に憶ぞ時日後れしかば國府臺の城へ参り加るべき情願を遂果さず只得這頭に色なる寄隊倘ら負るべ有名の落人を擇數に數を捕て并を功にして義通君の御陣へ齎し愚意を演て請て那仁君の御蔭に依まく欲せしに嚮に活间野目奴九郎が牽のて来て賣んとせし馬を贓物と云猜しかば其毛れ

摸様波濤に似く異相なるのミにあらで。両眼背梁蹄まで一箇も虧る所
なき実に稀世の良馬にあなれば愛惜の惑ひ醒る由なく漫に大人に敵對して
あらぬ罪を醸せしを今さら後悔の外なし。近曽里見殿の御内人に八犬士と稱
らるゝ文武兼備の壮夫達八名ありと人傳に聞しハ名のミ今ぞ知る大人の仁心
武藝の精妙今古獨歩の英雄なる驥尾に附せて倶しあらで夥計の兵士を
従へて今日の軍に微力を盡さんの言偽詐謫あらず身ハ天雷に打摧れて来世ハ
畜生道の苦を禀べし天神地祇も照監あれ急々如律令と唱へつゝ倶に箭を折
て抗言を徴する迭代の胸忠口誼誠心氣色に見れしを親兵衛馬上に聽果て感
ずることた大かたならず原来是和殿們ハ孰も義侠の人なりけり既にして我君の盛徳を
慕ひまつりて倶に歸服の情願あるを我豈汲引せざらんや夫賢を薦め士を擧
るハ人の臣たる職分なる事由を申上なバ必や用ひられん我初ハ和殿等を知ざりし

霎時相戰ふ程に撻仆しける傷瘡兒幾名か傍に在り。遮莫我に神授の仙
丹あり是を用ひバ時を移さず皆立地に愈つべし先其手下の衆人を召集へよや
といそがせバ寄舎五郎と壇五郎ハ怡悦に堪ず言兼まで倶に後方を見かへりて
招けバ出来る手下の衆人樹間藁塚の蔭よりして陸續として近つきつ皆親
兵衛にうち向ひて跪居て額を衝ぬへをし當下親兵衛ハ代四郎を喚ていふやう叟
よ和老の腰なる葉籠に残れる仙丹猶有んずを出さなりて傷瘡兒們に施して
起せよやとのみ代四郎ちゝなて腰を拊りて葉籠より那神薬を拿出せバ紀二
六喜勘太も傍よりて傷瘡兒們に嘗させなるに喜勘太ハ又目奴九郎にも施さん
とせけるを親兵衛急に喚禁めてやよそれ喜勘太其奴ハ悪者なり我今其奴一
人を憎みて情なきにあらねども其奴樸傷亟に愈く身の挊ハ自由になるべ
必又窃竊盗をせん郷同に我ハ諌ふれ人の戎衣を剥拿く那身再生の恩に報


文渓堂蔵

ふべし。とのみハ盗見根性なるぞや。有繋れバ上ハ我教諭に従来似たれども心
癖の改めえたる底意ハ今の一言もて知られたり。さるをも他今より尩弱不具で在
るなるバ一生涯無異にして其天年を終るべし。その故に我ハ他ハのみ敢神薬を
與へざるハ是情なきにあらず反て慈悲也。仁の術も惑ひを取て怨をなせそと理り
切て解論せバ目奴九郎ハ敬頭して悲しやあるハ我のみ狭坐脚車に法衣世に
墨染の住不楽て鉦を敲きて終りやせん哀しきかなと伏沈む程しもあらず傷瘡
瘡児們ハ神薬に即効ありて傷愈痛消散して氣力日来に十倍の勢ひに
堪ざれバ比自聳然と身を起して跪きつゝ親兵衛を伏拝むこと數回奇也々々と
稱賛の聲耳を合せて感ぜれバ夥計の衆兵かへバゆゑ寄舎五郎壇五郎ハ倶に
奇に驚き敬服して親兵衛に向ひていふやう寔に大人の妙用巧致華陀扁倉公
もおよぶべからず活人の手段不可思議なる哉就て稟し試んと思ふ一議あり僕



いへばとて目奴九郎が諫言に傚ふにあらず小可們ハ這人數の外に猶甲冑十四五領
弓箭鳥嘴銃ありけり今日御加兵の贄代に伴當達にまゐらせまく欲きものゝ
義を饒しめんやと請ふを親兵衛うち聽て現和殿們ハ我君の盛徳を仰ぎ
まつりて新参の義あるハ今より後我も伴當們も則是禄を與にせんずる
朋輩なれバ介意もべくもあらぬぞ況や今日の戦場に我隊の士卒に素肌の者
あらバ人必怪むべく且外聞も宜しからぬぞ然るを今幸ひに和殿們兵具に餘りあるを
のく开を贈んとならハ折る便宜といふべし臂近にあるならバ今なしねといふ
ぞバ寄舎五郎等歡び兼て随即手下の兵毎に恁々と吩咐れバ其兵毎身を
起して遠からぬ茂林の内より最取大きなる筹篋を十箇あまり背駝きつ蓋を
開きて取出せる甲冑十二三領鉄砲七八挺ありけり則是を呈まれバ親兵衛
躬て代四郎等に分ち與へて擐甲あらむ當下代四郎紀二六喜勘太夥兵伴

當們は寄舍五郎壇五郎と其每に名對面して鋏びを述く身を固る時。親兵衛がいはく我隊の兵は皆連枷あれば器械に事を欠ねども然しも侍品なる者の農具をもて敵に向んは面正しからぬ所行なるべし。見るに鉄砲も七八挺あるぞや。其を叟と直塚と喜勘太と鶻兵五名は携へてもてそよりめれ伴當六名は故のごとく連枷を放つべからず。さらくせよといひそぞ。大家唯々と諾ゐひて准備えやく成りしかば。親兵衛樹杪を仰瞻て。憶ふ時を得つべし。朝日は既に高く昇りぬ辰牌にやなりぬべからん。いでくと云つも。騎馬の泥障を蹴鳴らして。青海波々なるぞ我今御方の陣所にゆらまく欲さど然ども其捷徑を知らねば去向を你に任せてんやよ。疾我を導きね大家續けと喚りけて馬に拍を走らせれば皆後れじと相從ふ親兵衛が隊の兵なる媄雪代四郎を首として伴の奴隷に至るまで僅に足十四名今是に加るに二四的寄舍五郎須々利壇五郎

其每六十五名合せて七十九人なり一百名に足らねども勇将の下に弱卒なければ。皆大敵を怕るゝ者なく深山を出る若鷹の振鷺を驅る威勢奮然其儔なく。あらゝの土に嚇冷されて立すくまれど跛児の命活間野目奴九郎は身さへ人をも忽たる面を皺めて目送りけり。目奴九郎の事。其の下に話るべし。尓程に亦の朝里見太郎丸義通君は信乃現八等が二たび寄隊と闘戰の危きを援んとて。みづから岡山の陣営より推出く其方を投く士卒を找る其路は遠からぬ相川の松原まで長尾判官景春が岡山へぞ推寄來る。數千の獿兵に相逢て前後中央左隊に聱壘れし闘戰遑あらざりければ里見の隊長東六郎辰相就鷲を古内振照倶數二白濱七浦朝夷們は伉え突然と來て里見を援る政木大全石亀次團太越鮒二三向水五十三太枝獨鈷素手吉其他に從ふ竺高師舵工倶に長械をうち振て苦戰に時を移しける。就中政木大全孝嗣は文武兼学べる壮士なる。

弓箭執ては為朝の猿臂を旋らせる段あり器械に縁る剽姚は牛孺丸にも劣
らざるべし一人當千なるのみか景春も亦東國にて一二を爭ふ勁將なるに且軍
学に疎からず孫子の兵法諸葛の八陣鞍馬八流楠氏の七策習ひ得ざると
ふもなければ士卒を使ふに手の脚の如くみづから屡敵に中りて力戦のまゞ雌雄を
決せざる有恁りし程に長尾景春の最愛の子に長尾太郎為景と喚做すは
少年なれど今茲十五歳の初陣なりしが其驍雄親に劣らず父に倶して其の地に
來つ。其の日は為景遊軍にて隊兵僅に二百餘名弱かる方を援んとて敵の
隙を覘ふ程に里見の先鋒の頭人なる閏就鳥古内振照倶教二人其の時
既に戦ひ疲労れて隊竟に乱れしが為景猶なりと士卒を拕めて自家の隊長
梶原景澄樋口維龍と相援けて透もあらせず殺頽を勢ひ究虎彪の像
く為景みづから鎗を挿して只一刺にする古内を馬上より突落して又倶教
二に傷を負されば一陣竟に乱れ靡きて總敗軍になりんとせし浩処に葛西の
かたより擐甲たる武者一騎驀直に走せ來る勢ひ宛飛鳥の像く從ふ兵五
六十名皆神行の術を得たりけん疾走るに駿馬に後れず衆に先だつ騎馬武者は
近づく隨に聲震ふて其里なる敵は旗の花鳥にある白井の景春なりん。
恁ぞ我を知るや知らずや里見殿の御内にて八犬士の随一人犬江親兵衛尉
金碗仁あり。爰に在り同藩の老兵姥雪代四郎與保蜑崎の若黨直塚紀二六
新参の野武士の隊長二四的寄舎五郎須々利壇五郎們こゝに在り。あなく
と名告被け相叫びつゝ手々に引提し鐵砲を含直し敵に向ひて連發て係
銃响と倶に揚る喊聲耳を驚せ見たる衆敵の真中へ親兵衛馬乘入れて
鎗もて四方八面を中るに儘せて薙仆し欧せ伏せ刈拂ふに奮男獨歩の捧
せふ代四郎紀二六喜勘太們彩兵相當二四的杙む須々利と隊の兵等さへ

奮擊突戰せざるもなけれバ。里見の先陣後陣の隊長東六郎振照倶數二及
義通の隊下なる。鳥山真人朝夷三弥白濱七浦是に氣を得て。奮勇始に十
倍なる。士卒一致の大刀風に然しも長尾の勍敵なるも。三陣一度に殺頽されて
或ハ痍を負ひ或ハ斃て。鮮血に辷り盾に跌て皆蟢子籬を撒せる像く潑
と敗れて逃走れバ。景春為景怒りに堪ねど罵懋れども甲斐なかりける。梶原樋
口宇佐美直江も逃る士卒に誘引れて。將師歩兵の差別なく。葛西のゝくへ
乱走なりしと。犬江親兵衛政木大全其隊兵姥雪直塚須々利壇五に二四的當
る時運に向水水に由縁の石亀も藻東鄉三枝獨鈷も自家の衆に先もて刈
拂ふ敵に息をも難れず漏さじとぞ逐ひける。畢竟犬江親兵衛が歸東の忠戰
時を得て石陣鐵馬も湯と做をまゝ鋒先殊に剛りし。長尾判官景春の勝
誇りたる數千の勍兵を。一擧に敗り走らせて義通君の初陣に武門の花を開せり。

後の話説甚麼ぞや。分教あり。奔馬追北犬江籠暴禽舊恩報得戍
孝完前言。ある後回の題目のみ猶詳に知まく欲せバ又下回に解分るを聽ねかし。
作者云。この編ハ必六巻にて續出すべき者なり。何とならバ本回に大塚信乃犬飼
現八杉倉武者助等が寄隊の敵將顛定成氏憲房と三面二度の鬪戰あり。
いまだ勝負を決するに逮ばず。又里見義通の野戰難義の時政木孝嗣石亀次團太
越鄉三向水五十三太枝獨鈷素手吉と其徒數十名を以て悉く來て義通の苦
戰を援る話説あり。これらハ孝嗣次團太鄉三等の來歷と共に具に寫すに遑あ
らざるの故に第百六十七回までを今番續出して是等の事を詳に看官に
又頻く示さまく欲しけれども刊刻の書肆ハ一板毎に五巻を可として六巻を欲せ
ず。一巻多くて價を増せバ。賣買の為に妙ならずといへりあるも亦故あるなれバ愚
意を枉て其好に從ざることを得ず。敢請江湖上億兆（ヨノナカカズカギリモナキ）の君子達鄉閈戰の勝敗と

孝嗣們の来歴を知まく欲さバ又復後板五巻を續出ま日を竢ねかし。
作者又云本傳ハ始より九輯百七十回ニて必局を結んとおもひしに。をちく九輯ハ四十五巻。是を先例の如く一輯五冊ニ做すときハ則十二輯又第七輯八輯の七冊八冊あると又分巻を加え數まへて平均せバ十六七輯ニ至るべし。その九輯ニ約めしハ初念の已ことを得ざる故なれバ回の數も只管ニ百七十回ニして筆を絶まく欲せし故ニ本編ハ一巻ニ一回なるもあり或ハ一回を釐て二巻ニ做なるもこれあり。然れども今よく思へバ本傳百七十回まくハ局を結ぶ尚足らず然しも胸案の腹稿ハ譬ば統ねたる緒の如し是を文ニ做すときハ其緒を解延まニ似て思ひしより長くならざることを得ざるをもて今より初念を改めて一百八十許回ニて大團圓ニ做まくも然れバ言又その義ニ及べり。

南總里見八犬傳第九輯巻之四十終



○南總里見八犬傳第九輯下帙下編之上画工筆耕剞劂人目次

出像畫工　柳川重信

補助畫工　溪齋英泉

總巻淨書　谷金川

剞劂
三十六之巻　澤金次郎
三十七之巻　常盤園
三十八之巻　高谷熊五郎
三十九之巻　仝
四十之巻　澤金次郎

○曲亭翁精編本房藏板畧目　江戸書林　文溪堂

南總里見八犬傳第九輯下帙下編之下　五巻結局大團圓　近刻續出

近世説美少年録第四集 初集より三集まで先年出販 本集五巻近刻

開巻驚奇侠客傳第五輯 右に同じ 五巻近刻

菅聖廟御傳記 北尾紅翠齋画 五巻近刻

拈花窓譚 一名評論四大奇書考 ○右の書ハ水滸傳西遊記三國志演義金瓶梅の隠微を發揮せる国字評なり 近刻

○家傳神女湯 一包代百銅 婦人ちのみちの妙やくなり およそ気血の二病より出たる諸病に用ひてその効あらずといふことなし

○精製奇應丸 薬種をえらミこせいをつくしてその功神の如し 大包代金弐朱 中包代壱匁五分 小包代五分

○熊胆黒丸子 一包代五分 くまのいけを以丸を製し 真製なり

○婦人つぎ虫の妙薬 一包六十四文 つぎむしハさん後に用ひてけいすいのもれとまるなし

製薬本家 四ツ谷志なのさの町 千日谷の上 瀧澤氏○弘所 江戸元飯田町中坂下南側中程 たき沢氏

○丸薬おしろい仙女香 一包四十八文○黒油美艶香同 江戸京橋南傳馬町 坂本氏

○金匱救命丸 本御林氏製 弘所 江戸 小傳馬町三丁目 丁子屋平兵衛 元飯田町中坂下 ろうそく屋清右衛門

八犬傳第九輯百六十七回以下近日出販全部九十九冊程なく相揃ひ候なり

天保十二年辛丑春正月吉日發行

京都蛸薬師東洞院西へ入 大文字屋仙藏

大阪心齋橋筋博労町 河内屋茂兵衛

大阪心齋橋唐物町南へ入 河内屋太助

江戸大傳馬町二町目 丁子屋平兵衛板

發販書行